

福井県埋蔵文化財調査報告 第108集

稲葉山城跡・黒駒遺跡

－ 舞鶴若狭自動車道建設事業に伴う調査 －

2009

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



(1) 稲葉山城跡・黒駒遺跡遠景（西より）



(2) 稲葉山城跡全景（東より）



(1) 黒駒遺跡集石遺構2〔経塚〕埋経施設(南東より)



(2) 黒駒遺跡集石遺構2〔経塚〕出土遺物

序 文

このたび、舞鶴若狭自動車道建設事業に伴い、小浜市西部の加斗地区において平成15年から17年にかけて発掘調査を実施しました、稲葉山城跡・黒駒遺跡の発掘調査報告書をまとめることができました。

稲葉山城跡は、おおい町の佐分利川上流域を支配していた戦国武将武藤氏の一族が築城したと伝えられる中世山城です。今回は稲葉山城跡の本体から離れた北側の尾根上を調査し、曲輪や堀切を検出しました。尾根上に設けられた曲輪からの眺望は良好で、その立地環境から調査箇所は見張り台である可能性が考えられました。

黒駒遺跡は、石組施設を伴う経塚です。方形に組まれた石組の中には銅製の経筒が安置されており、経筒の中には経巻が納められていました。経巻の出土は稀なことであり、貴重な資料と言えます。

両遺跡の調査成果が、地域史の研究に広く活用され、多くの方々に埋蔵文化財を含めた郷土の歴史について興味を深める一助となれば、誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで御協力を頂きました、関係機関をはじめ地元の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所長 吉岡 泰英

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが舞鶴若狭自動車道建設事業に伴い、平成15年度から平成17年度にかけて発掘調査を実施した稲葉山城跡（小浜市加斗・飯盛所在）、黒駒遺跡（小浜市飯盛所在）の発掘調査報告書である。
- 2 稲葉山城跡・黒駒遺跡の発掘調査は日本道路公団北陸支社（現在は、西日本高速道路株式会社関西支社が管轄）の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 稲葉山城跡の調査は平成15年（2003）12月1日から平成17年（2005）8月25日まで実施し、黒駒遺跡の調査は平成17年（2005）4月18日から6月29日まで実施した。両遺跡の調査担当者は、以下の通りである。なお、担当者の役職は調査当時のものである。

稲葉山城跡

平成15年度：主任 島中清隆、文化財調査員 鮎本真友美、嘱託 藤井久美子

平成16年度：主査 清水孝之、文化財調査員 白川 綾、嘱託 今林信祐・北野 薫・藤井久美子

平成17年度：主査 清水孝之、文化財調査員 白川 綾・坪田聡子、嘱託 今林信祐・北野 薫

黒駒遺跡

平成17年度：文化財調査員 田中祐二、嘱託 二村陽子・中野靖之

- 4 稲葉山城跡の出土遺物の整理作業は平成17年（2005）4月1日から平成21年（2009）3月31日まで、黒駒遺跡の遺物整理は平成18年（2006）4月3日から平成21年（2009）3月31日まで福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにおいて実施した。
- 5 本書の執筆は、附章を除いて清水・田中・嘱託奥井智子が担当し、編集は清水が中心となり田中がこれを補佐した。なお、執筆の分担は以下の通りである。ただし、奥井担当分の原稿については、清水が補足・加筆を行って編集しており、その文責は清水に帰する。

清水孝之 第1章、第2章、第3章第1節、同第2節1・2、同第3節、同第4節1・2、同第5節、同第6節1・2、同第7節

奥井智子・清水 第3章第2節3、同第4節3、同第6節3

田中祐二 第4章

- 6 稲葉山城跡・黒駒遺跡に係るこれまでの成果の発表のうち、本書との間に齟齬がある場合は本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 7 検出遺構・出土遺物の図化・図版作成、および写真撮影は清水・白川・坪田・田中・今林・北野・藤井・二村・中野・奥井、嘱託老岐一哉・早瀬亮介・畠山真証・森下智恵があたった。
なお、黒駒遺跡出土遺物の写真の一部は、保存処理を委託した（株）京都科学が撮影したものを使用している。
- 8 本書に掲載した遺構配置図および遺構実測図は、稲葉山城跡については（株）かんこうに、黒駒遺跡については（株）ソクタントに委託して作成したものを一部改変して使用している。加えて上空からの写真も、航空写真測量時に前記の委託業者が撮影したものを使用した。また、稲葉山城跡の遺構図のトレースおよび編集については、（株）イビソクに委託した。
- 9 黒駒遺跡出土の経筒の成分分析については、保存処理を委託した（株）京都科学を通じて（財）大阪市文化財協会伊藤幸司氏に依頼し、協力を得た。また、黒駒遺跡出土の覆輪の成分分析については、（財）若狭湾エネルギー

ギー研究センター安田啓介氏に依頼し、分析結果をまとめた玉稿を頂いた。なお、安田氏の玉稿については田中が第1節・第3節を補足して編集し、本書に附章として掲載させて頂いた。

- 10 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面および写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。自余のものについては、これにあたられない。

- 11 稲葉山城跡の調査報告にて使用している遺構の略称は、以下の通りである。

SA：土塁 SB：掘立柱建物 SD：堀切 SK：土坑 SP：柱穴

- 12 本書の挿図の縮尺は、個々に記載している。

- 13 本書の挿図の水平レベルは、海拔高(m)を示す。

- 14 本書の挿図の方位は、国土平面直角座標第VI系の座標北(G・N)および真北(T・N)を併用した。

- 15 検出遺構の土層の色調は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)に基づいている。

- 16 発掘調査に際しては、次の方々および機関の御協力を得た(敬称略)。

荒鹿宜勝、伊崎清子、磯野博美、井上一篤、上山恵三、加藤浩慈、森井繁美、小浜市加斗公民館、小浜市教育委員会、福井県舞鶴若狭自動車道小浜用地事務所

- 17 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々および機関から御助言・御協力・御指導を頂いた(敬称略)。

有馬香織、岩田 隆、入江文敏、川越光洋、久保智康、小島秀彰、下仲隆浩、芝田寿郎、中井 均、中野拓郎、西島伸彦、仁科 章、松川雅弘、村上雅紀、福井県立若狭歴史民俗資料館、若越城の会、城郭談話会

- 18 発掘調査には地元の方々の御参加・御協力を頂いた。遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター整理作業員があたった。

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 稲葉山城跡の調査	10
第1節 調査の経過	10
第2節 A地区	18
1 概要 2 遺構 3 遺物	
第3節 B地区	28
1 概要 2 遺構	
第4節 C地区	34
1 概要 2 遺構 3 遺物	
第5節 D地区	60
1 概要 2 遺構	
第6節 E地区	62
1 概要 2 遺構 3 遺物	
第7節 まとめ	79
1 稲葉山城跡の本城について 2 A～D地区について 3 E地区について	
第4章 黒駒遺跡の調査	84
第1節 調査の経過	84
第2節 遺構と遺物	87
第3節 まとめ	93
附章 黒駒遺跡から出土した覆輪の成分元素分析	95
第1節 分析に至る経緯	95
第2節 分析の方法と結果	95
第3節 おわりに	96

写真図版目次

巻頭図版第 1		(1) 稲葉山城跡・黒駒遺跡遠景	(2) 稲葉山城跡全景
巻頭図版第 2		(1) 黒駒遺跡集石遺構 2 [経塚] 埋経施設	
		(2) 黒駒遺跡集石遺構 2 [経塚] 出土遺物	
図版第 1	稲葉山城跡	(1) 調査区遠景	(2) 調査区遠景
図版第 2	稲葉山城跡 A 地区	(1) A 地区全景	(2) A 地区全景
図版第 3	稲葉山城跡 B 地区	(1) B 地区全景	(2) B 地区全景
図版第 4	稲葉山城跡 C 地区	(1) C 地区全景	(2) C 地区全景
図版第 5	稲葉山城跡 C 地区	(1) C 地区全景	(2) C 地区全景
図版第 6	稲葉山城跡 C 地区	(1) 平坦面 C 1 ~ C 5 検出状況	(2) 平坦面 C 4 検出状況
図版第 7	稲葉山城跡 C 地区	(1) 堀切 S D 0 1 検出状況	(2) 堀切 S D 0 2 検出状況
		(3) 堀切 S D 0 3 検出状況	(4) 堀切 S D 0 4 検出状況
図版第 8	稲葉山城跡 D 地区	(1) 土塁 S A 0 1 確認状況	(2) 土塁 S A 0 1 確認状況
		(3) 堀切 S D 0 5 東半部確認状況	
		(4) 堀切 S D 0 5 西半部確認状況	
図版第 9	稲葉山城跡 E 地区	(1) E 地区全景	(2) E 地区全景
図版第 10	稲葉山城跡 E 地区	(1) 土器集中区 1 検出状況	(2) 土器集中区 2 検出状況
		(3) 集石 1 検出状況	(4) 集石 2 検出状況
図版第 11	稲葉山城跡 遺物	(1) A・C 地区出土土器・鉄鏃	(2) C 地区出土小円鏃
図版第 12	稲葉山城跡 遺物	(1) E 地区出土土器	(2) E 地区出土土器
図版第 13	稲葉山城跡 遺物	(1) E 地区出土土器	(2) E 地区出土土器・銭貨
図版第 14	黒駒遺跡	(1) 調査区遠景	(2) 調査区遠景
図版第 15	黒駒遺跡	(1) 調査前近景	(2) 遺構検出状況
図版第 16	黒駒遺跡 集石遺構 1	(1) 検出状況	(2) 半截状況
図版第 17	黒駒遺跡 集石遺構 2 [経塚]	(1) 上部集石検出状況	(2) 経筒確認状況
図版第 18	黒駒遺跡 集石遺構 2 [経塚]	(1) 上部集石半截状況	(2) 下部集石検出状況
図版第 19	黒駒遺跡 集石遺構 2 [経塚]	(1) 石組解体状況①	(2) 石組解体状況②
		(3) 石組解体状況③	(4) 石組解体状況④
		(5) 完掘状況	
図版第 20	黒駒遺跡 遺物	(1) 銅製経筒	(2) 銅製経筒
図版第 21	黒駒遺跡 遺物	(1) 経巻納入状況	(2) 経巻
		(3) 刀子	(4) 覆輪

挿 図 目 次

第1図	稲葉山城跡・黒駒遺跡位置図	2	第36図	C地区土層図9	45
第2図	福井県地形区分図	5	第37図	C地区土層図10	46
第3図	若狭湾沿岸地形区分図	5	第38図	C地区土層図11	47
第4図	周辺の遺跡分布図	7	第39図	C地区主要遺構配置図1	48
第5図	稲葉山城跡グリッド配置図	11・12	第40図	C地区主要遺構配置図2	49
第6図	A地区調査前状況図	13	第41図	C地区被熱面・土坑実測図	49
第7図	B地区調査前状況図	14	第42図	C地区遺物出土状況図	50
第8図	C地区調査前状況図	15	第43図	C地区堀切実測図1	52
第9図	E地区調査前状況図	16	第44図	C地区堀切実測図2	52
第10図	A地区遺構配置図	19	第45図	C地区堀切実測図3	54
第11図	A地区土層観察ライン位置図	20	第46図	C地区堀切実測図4	54
第12図	A地区土層図1	21	第47図	C地区堀切土層図	55
第13図	A地区土層図2	22	第48図	C地区出土遺物実測図1	56
第14図	A地区土層図3	23	第49図	C地区出土遺物実測図2	57
第15図	A地区土層図4	24	第50図	C地区出土遺物実測図3	58
第16図	A地区土層図5	25	第51図	D地区現況図	61
第17図	A地区土層図6	26	第52図	E地区遺構配置図	63
第18図	A地区主要遺構配置図	27	第53図	E地区土層図1	64
第19図	A地区土坑実測図	27	第54図	E地区土層図2	65
第20図	A地区出土遺物実測図	28	第55図	E地区掘立柱建物実測図	66
第21図	B地区遺構配置図	29	第56図	E地区柱穴実測図1	67
第22図	B地区土層観察ライン位置図	30	第57図	E地区柱穴実測図2	68
第23図	B地区土層図1	31	第58図	E地区柱穴実測図3	69
第24図	B地区土層図2	32	第59図	E地区柱穴実測図4	70
第25図	B地区土層図3	33	第60図	E地区柱穴実測図5	71
第26図	C地区遺構配置図	35	第61図	E地区柱穴実測図6	72
第27図	C地区土層観察ライン位置図	36	第62図	E地区土器集中区検出位置図 および実測図	73
第28図	C地区土層図1	37	第63図	E地区集石検出位置図および 実測図	74
第29図	C地区土層図2	38	第64図	E地区出土遺物実測図1	76
第30図	C地区土層図3	39	第65図	E地区出土遺物実測図2	77
第31図	C地区土層図4	40	第66図	E地区出土遺物実測図3	78
第32図	C地区土層図5	41	第67図	調査前状況図	85
第33図	C地区土層図6	42	第68図	遺構配置図	86
第34図	C地区土層図7	43			
第35図	C地区土層図8	44			

第69図	集石遺構1実測図	86	第73図	集石遺構2 [経塚] 石組実測図	91
第70図	集石遺構2 [経塚] 上部集石 実測図	88	第74図	集石遺構2 [経塚] 出土遺物 実測図	92
第71図	集石遺構2 [経塚] 下部集石 実測図	89	第75図	測定試料写真	95
第72図	集石遺構2 [経塚] 埋納部・ 掘方実測図	90	第76図	X線エネルギースペクトル	96

表 目 次

第1表	遺跡名一覧表	7	第2表	C地区出土小円礫観察表	59
-----	--------	---	-----	-------------	----

付 図

付図1	稲葉山城跡調査前状況図		付図4	稲葉山城跡B地区遺構検出状況図	
付図2	稲葉山城跡遺構検出状況図		付図5	稲葉山城跡C地区遺構検出状況図	
付図3	稲葉山城跡A地区遺構検出状況図				

第1章 調査に至る経緯

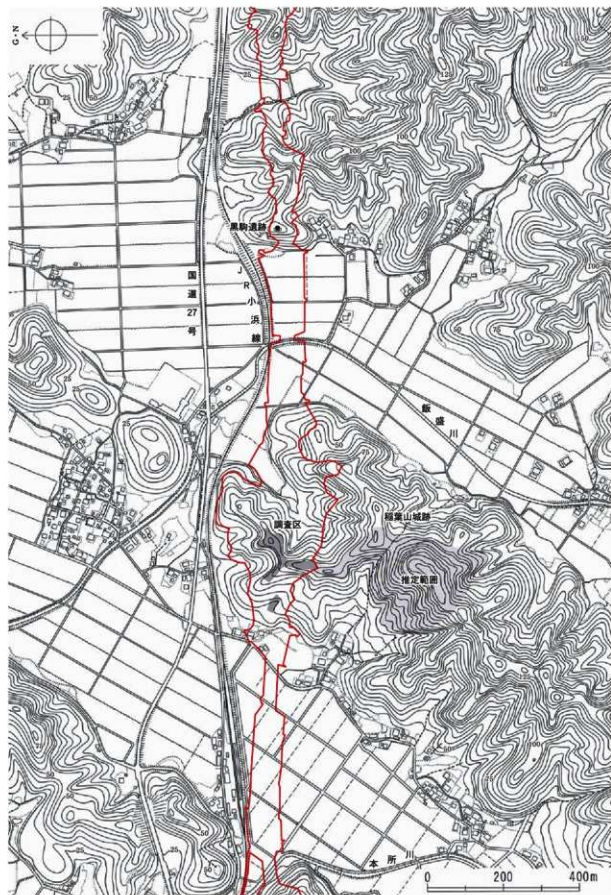
稲葉山城跡ならびに黒駒遺跡は、福井県小浜市西部の加斗地区に所在する⁽¹⁾。稲葉山城跡は小浜市加斗・飯盛地籍に所在し、上加斗集落と法海・黒駒集落の境を成す尾根上に立地する。一方の黒駒遺跡は小浜市飯盛地籍に所在し、稲葉山城跡とは飯盛川を挟んだ東側対岸の尾根上に立地する。両遺跡ともに山頂の調査区より互いに視認できる位置関係にあり、その間は直線距離にして840m程である(第1図)。

平成元年(1989)に基本計画が決定された舞鶴若狭自動車道⁽²⁾は、舞鶴東インターチェンジから北陸自動車道敦賀インターチェンジまでを結ぶ自動車専用道路として計画された。計画された路線は、若狭湾国定公園を避ける形で山間部を貫くように設計された。この舞鶴若狭自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、平成9年(1997)より着手されている。主となる対象地域は大飯郡おおい町の佐分利川流域であり⁽³⁾、平成9年(1997)に滝見古墳群、平成10・11年(1998・1999)に大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓が調査された⁽⁴⁾。平成11・12年(1999・2000)には、中世に佐分利川上流域を治めた武藤氏の居城である石山城跡の発掘調査を実施している⁽⁵⁾。小浜市域においては、本線工事に係わる工事用道路の整備事業に伴って小浜市鯉川の森谷古墳群の調査を実施している⁽⁶⁾。調査終了後に工事が順次着工され、平成15年(2003)3月9日に、京都府舞鶴市堂奥の東舞鶴インターチェンジから小浜市岡津の小浜西インターチェンジまでの24.5kmが開通した。その後、舞鶴若狭自動車道に係わる埋蔵文化財の調査が本格的に小浜市域へと移っていく。小浜市西部の加斗地区の事業予定地内には、稲葉山城跡・伏木遺跡・黒駒城跡が所在しており⁽⁷⁾、これらの遺跡の範囲確認と内容の把握が必要となった。

稲葉山城跡・伏木遺跡・黒駒城跡の試掘調査は、日本道路公団北陸支社⁽⁸⁾の依頼を受けて平成14年(2002)に福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにより実施された。

黒駒城跡の試掘調査は、平成14年(2002)6月4日～6月13日にかけて実施した。中世山城の城域の広がり把握するために、JR小浜線の南側に位置する尾根上に12箇所の試掘トレンチを設け、人力にて掘削を行った。試掘調査の結果、中世山城に関連する遺構・遺物は検出されなかったが、当該調査区西端の黒駒集落背後の尾根上において、拳大から人頭大の礫を積み上げた集石遺構を検出した。集石遺構が検出された尾根からは、飯盛川流域が眺望でき、麓の集落が立地する箇所にはかつて寺院が存在したという伝承が残っていた。以上の状況から判断して、検出した集石遺構は経典を埋納した経塚遺構と判断し⁽⁹⁾、尾根頂部の360㎡について発掘調査の実施が必要と判断された。この段階に至り、遺跡の名称を黒駒城跡とは切り離し、改めて新規の遺跡として「黒駒遺跡」と呼称することとした。

稲葉山城跡の試掘調査は、黒駒城跡の試掘調査に引き続いて平成14年(2002)6月13日～7月22日・30日・31日にかけて実施した。稲葉山城跡は、おおい町石山城主武藤氏の一族および在地有力豪族の伊崎氏に係わる山城とされ、尾根上には明瞭な堀切等の遺構が遺存していた。稲葉山城跡の本体は稲葉観音堂背後の尾根頂部に所在するが、舞鶴若狭自動車道の事業計画では稲葉山城跡本体から北側にのびる尾根上を横断することになっていた。試掘調査は、事業予定地内の尾根上および谷部に36箇所の試掘トレンチを設定し、人力にて掘削を行った。試掘調査の結果、尾根上において山城に係わる遺構(曲輪・堀切)を検出し⁽¹⁰⁾、また西側の谷部では製塩土器に酷似した土師質土器を含む遺物包含層の存在を確認した。これにより、中世山城の遺構が遺存する尾根上の6,450㎡と、西側谷部の土師質土器包蔵地800㎡、合わせて7,250㎡については発掘調査が必要と判断された。



第1図 稲葉山城跡・黒駒遺跡位置図（縮尺1/10,000、朱線は事業実施予定範囲を示す）

伏本遺跡は飯盛地籍に所在し、飯盛川左岸の山麓部一帯に立地する。試掘調査は、平成14年（2002）7月23日～7月25日にかけて実施した。飯盛川左岸の水田地帯に36箇所の試掘トレンチを設定し、重機にて掘削を行った。試掘調査の結果、当該調査区においては明確な遺構は検出されず、遺物についても須恵器・土師器・中世陶磁器が少量出土するのみであった。土層の堆積状況や遺物の出土状況から、遺跡の中心は当該調査区南西側の山裾部分と推定された。伏本遺跡の当該調査区については、埋蔵文化財に影響を与える可能性が低いと判断され、慎重な工事を行うよう要請した。

以上の結果を踏まえて日本道路公団北陸支社と協議を行い、平成15年度から平成17年度にかけて稲葉山城跡を、平成17年度に黒駒遺跡を発掘調査することで合意した。

註

- 1 加斗地区とは、小浜市西部の東勢・西勢・荒木・黒駒・法海・上加斗・下加斗・岡津・輝川を指す総称である。加斗地区は、更に東勢・西勢の勢浜、荒木・黒駒・法海の飯盛、上加斗・下加斗の加斗、そして岡津・輝川に区分される。
- 2 舞鶴若狭自動車道については、当初「近畿自動車道敦賀線」と呼称していた。その後、平成15年（2003）3月9日に福井県内で一部開通した際に、兵庫県吉川ジャンクションから福井県敦賀ジャンクションまでの道路名称が「舞鶴若狭自動車道」に改称された。
- 3 平成18年（2006）3月3日に大阪郡大阪町と遠敷郡名田庄村が合併し、大阪郡おおい町となる。発掘調査を実施した佐分利川流域は、大阪郡大阪町に当時属していた。
- 4 赤澤徳明編 2003 『滝見古墳群・大阪神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓』福井県埋蔵文化財調査報告第75集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 5 赤澤徳明編 2005 『石山城跡』福井県埋蔵文化財調査報告第83集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 6 御嶽貞義編 2001 『森谷古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告第54集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 7 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『福井県遺跡地図』PDF版
- 8 平成17年（2005）10月1日に日本道路公団は分割・民営化され、舞鶴若狭自動車道の東舞鶴インターチェンジから小浜インターチェンジまでが西日本高速道路株式会社（NEXCO西日本）関西支社の管轄に、小浜インターチェンジ以西から敦賀インターチェンジまでが中日本高速道路株式会社（NEXCO中日本）名古屋支社の管轄となった。
- 9 同様の集石遺構は、敦賀市舞崎遺跡・小浜市田島元山谷遺跡等でも検出されており、これらの検出例から経塚遺構と判断した。
 - a 川村俊彦・中野拓郎・佐々木勝 2001 『舞崎前山古墳・舞崎遺跡』敦賀市埋蔵文化財調査報告 敦賀市教育委員会
 - b 御嶽貞義編 2003 『田島元山谷遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第67集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 10 山城を構成する平坦面を「くるわ」と呼称するが、漢字表記については「曲輪」と「郭」の二つがある。本書では下記文献の定義に倣い、「くるわ」と読ませる場合は「曲輪」を、「かく」と読ませる場合は「郭」の文字を使用している。

千田嘉博・小島道裕・前川 要 1993 『城館調査ハンドブック』 新人物往来社

第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

福井県は本州中央部の凹部に位置し、西側は日本海に面している。東西約130km、南北約100kmをはかり、面積は約4,189km²をはかる（第2図）。

福井県南西部の嶺南地方は、若狭湾（日本海）に面してほぼ東西に横たわり、背後は丹波高原北縁の若丹山地の山稜を境に京都府および滋賀県と接する（第3図）。この若狭湾一帯は、著しく沈降した地域であり、山地は海岸部にまで迫り、湾岸は典型的なリアス式海岸となっている。小浜市は若狭湾のほぼ中央部に位置し、古代より嶺南地方西部の中心として発展してきている。市域は、東で三方上中郡若狭町と、西から南西にかけては大飯郡おおい町と接し、南東では若丹山地を境として滋賀県高島市と境を接する。

小浜市は東に内外海半島、西に大島半島に囲まれた天然の良港である小浜湾をかかえるが、湾内外の海岸線は更に小規模な岬が海に向かって多数突き出ているため複雑に入り組み、岬の付け根には小規模な漁港が点在している。

小浜市の市街地は小浜湾奥部東側の北川・南川河口付近に形成されており、更にその東部の北川流域には市域最大の沖積平野が展開する。この平野部は敦賀平野を除けば嶺南地方最大の平野部であり、古代より若狭国の中心として発展してきた一帯とも重なる。

一方、小浜市の西部には狭小な平野部が若狭湾に面して点在しており、東から東勢・西勢の勢浜、荒木・黒駒・法海の飯盛と上加斗・下加斗の加斗、岡津・鯉川の3地区に平野部が大きく分けられる。各々の平野部は小さく、狭小な谷部や海岸部に細長く形成されている。上加斗には本所川が、法海から黒駒にかけては飯盛川が北北東に向かって流れ、両河川ともに国道27号付近で西に流れを変えて日本海に流入している。加斗と飯盛の平野部はこの両河川によって形成され、両河川を挟むように飯盛山（標高584.5m）から派生した枝峰群が互いに平行するかのようにならびにのびている。これらの枝峰の尾根上に稲葉山城跡・黒駒遺跡は立地している。

稲葉山城跡および黒駒遺跡は、飯盛川を境にすれば左岸に稲葉山城跡が、右岸に黒駒遺跡が所在しており、互いに視認できる距離に位置している。

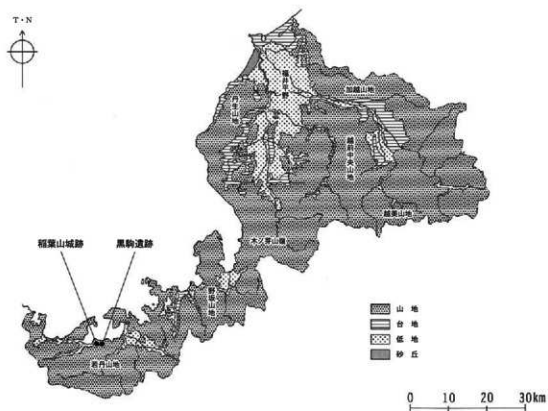
第2節 歴史的環境

福井県南西部に位置する小浜市は、小規模ながら市域において多数の発掘調査が実施されており、福井県の考古学史に名を残す重要な遺跡も多数存在している。考古学的知見からの小浜市の歴史的環境については、すでに各種の文献において詳述されており、詳細についてはそれらの文献に譲りたい⁽¹⁾。

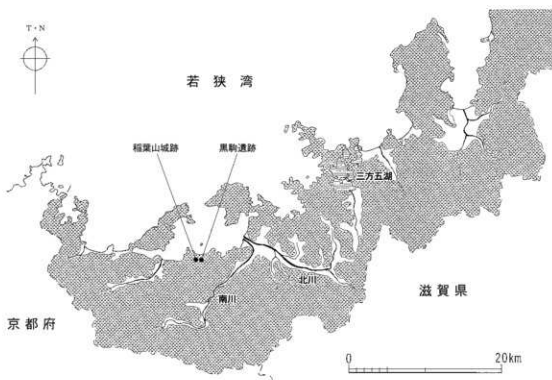
本節では、稲葉山城跡・黒駒遺跡が所在する加斗地域⁽²⁾について、両遺跡の帰属時期にあたる古代から中世にかけての歴史的環境について簡単にまとめておきたい（第4図、第1表）。

古代

古代の様相については、加斗地域においては調査例が少ないためあまり明瞭ではない。表面観察ではあるが、古代の遺物散布地が加斗・飯盛地区の谷部出口に集中して確認されている。荒木から下加斗にかけての平野部を中心に、古代の遺物散布地である埴屋遺跡・伏本遺跡・道野遺跡・亀田遺跡・上野



第2図 福岡県の地形区分図 (縮尺1/1,000,000)



第3図 若狭湾沿岸の地形区分図 (縮尺1/500,000)

遺跡・荒木遺跡が所在する。

伏木遺跡（第4図16）は、第1章で述べたように舞鶴若狭自動車道建設に伴って一部について試掘調査を実施している。飯盛川左岸の水田地帯を中心に試掘調査を行ったが遺構は検出されず、遺物の出土も僅少であった。土層の堆積状況から遺物を含む土層は二次堆積と考えられ、地形等を考慮すれば伏木遺跡の中心は隣接する山麓部に広がるものと推定されている。

出土した遺物は須恵器・土師器が中心であるが、細片であるため帰属時期は判然としにくい。おおよそ平安時代の頃のものとして推定される。それ以外に、古代末期から中世初頭にかけての柱状高台を有する土師皿や白磁碗も出土している。その特徴から、11世紀代に帰属するものであろう。

道野部遺跡（第4図15）は、飯盛川右岸の水田地帯に位置する。平成16年（2004）に県営一般農道整備事業に伴って、国道27号の南側について試掘調査を実施している。試掘調査では遺構・遺物が検出されず、土層の堆積状況から調査区が旧河川の流路であった可能性が指摘されている。

亀田遺跡（第4図19）は、飯盛川右岸の水田地帯に位置する。平成18年（2006）に県営一般農道整備事業に伴って、東側の山麓部について試掘調査を実施している。試掘調査では遺構・遺物は検出されず、調査区の北半は圃場整備による削平を受けており、南半は土層の堆積状況から、近傍の小河川による影響で埋没した谷部であると考えられる。

小規模ではあるが上記3遺跡での試掘調査の結果から、平野部の遺物散布地は河川による二次堆積の可能性が高く、また平野部が耕地化されていたと考えるならば、古代の集落は現在の集落と同様に山麓部に存在したと推定される。そして、その集落域は規模を変えながらも、中世以降も継続していくものと想定できる。

古代の生産遺跡として、製塩遺跡が挙げられる。若狭湾沿岸には古墳時代以降、海岸部において製塩が行われており、古代に盛んに操業していた。

岡津の本所川河口左岸には、古代の製塩遺跡である岡津製塩遺跡（第4図6）が所在する⁽³⁾。岡津製塩遺跡は下層から浜瀬ⅡB式古段階の製塩土器が出土しており、6世紀後半から製塩を行っていたことが確認されている。この遺跡では8世紀まで製塩の操業が継続して行われている。

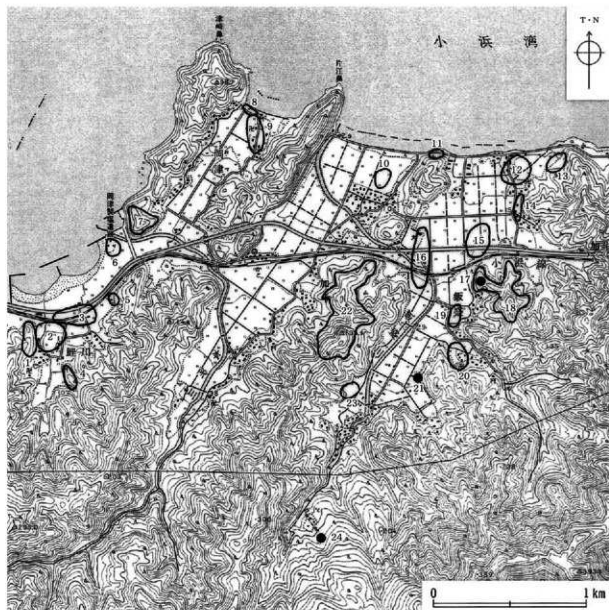
なお、岡津製塩遺跡の操業を支えた集落の遺跡は、現時点では未確認である。しかし、位置的に近接する鯉川において、古墳や古代の遺物散布地が確認されていることから、この付近に集落が存在した可能性が高い。

中世

中世において加斗地域は園城寺円満院領として存在したところであり、加斗庄（賀斗庄）と呼ばれていた。この加斗庄を治めていたのが伊崎氏であり、この伊崎氏およびおおい町石山城主武藤氏の一族に係わる山城が稲葉山城跡（第4図22）である。

稲葉山城跡の築城から落城までの経緯については、故大森宏氏が文献を丹念に調査し、まとめておられるため、以下に概要を示したい⁽⁴⁾。

伊崎氏は、室町時代初期の応永期から天文期まで加斗庄の在地有力豪族として存続していた。天文7年(1538)、若狭守護武田氏一族内部において家督相続に絡む争いが生じ、若狭国内が争乱状態となる。この機に乗じて、おおい町石山城主武藤上野介友益の一族である武藤彦右衛門尉友賢が稲葉館の伊崎民部丞亮為を攻撃したのである。おおい町の武藤氏は佐分利川上流域を支配しており、同じ佐分利川下流域を支配していた本郷氏と敵対していた。伊崎氏が治めていた加斗庄は、本郷氏の領地に近接している



第4図 周辺の遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

第1表 遺跡名一覧表 (番号は第4図に対応)

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	西久保古墳群	古墳	古墳	13	荒木遺跡	散布地	奈良
2	荒廉遺跡	散布地	縄文・平安	14	下代遺跡	散布地	中世
3	東所遺跡	散布地	縄文・平安	15	道野部遺跡	散布地	平安・中世
4	森谷古墳群	古墳	古墳	16	伏本遺跡	散布地	平安
5	沓掛古墳群	古墳	古墳	17	黒駒遺跡	経塚	中世
6	岡津製塩遺跡	製塩跡	古墳・奈良	18	黒駒城跡	城跡	中世
7	海坂山城跡	城跡	中世	19	亀田遺跡	散布地	平安・中世
8	岡津塩入製塩遺跡	製塩跡	古墳	20	宝樹寺遺跡	散布地	近世
9	岡津遺跡	散布地	古墳・中世	21	黒駒古墳	古墳	古墳
10	塩屋遺跡	散布地	平安	22	稲葉山城跡	城跡	中世
11	台場遺跡	集落跡	縄文	23	未命名遺跡	散布地	不詳
12	上野遺跡	散布地	奈良・平安	24	飯盛寺	寺院	中世・近世

ため、武藤氏が本郷氏を挾撃する足掛かりとして、加斗庄の支配を狙ったものであった。武藤氏との戦いによって伊崎氏側が敗北し、一族・従臣は降伏して武藤氏の配下となった。

天文9年(1540)、武藤友賢が对本郷氏への東側の拠点として、稲葉館背後の山に城を構築する。これが稲葉山城である。

天文19年(1550)以降、武藤氏と本郷氏の争いが断続的に行われ、武藤友賢の子友慶の代の天正8年(1580)8月20日に至り本郷治部少輔泰栄に攻撃され、稲葉山城跡は落城する。

稲葉山城は落城したものの、加斗庄は依然として武藤氏の支配下に置かれたが、伊崎氏は被官せず在地豪族としてその後も存続したようである。

このような歴史的背景を有する稲葉山城跡の本体は、稲葉観音堂背後の尾根頂部に所在しており、詳細については改めて後述したい。

加斗地域には他に稲葉山城跡に係わる遺跡として、岡津の海坂山城跡(第4図7)が存在する⁽⁵⁾。稲葉山城跡から直線距離で1.5km程をはかる北西側の丘陵上に、海坂山城跡は所在する。岡津の西側には小浜湾へ突き出る小規模な岬、「津崎鼻」がある。この津崎鼻より南西に連なる尾根の南端に、海坂山城跡が立地する。尾根の南端部は海岸部と本所川河口によって画されて独立丘陵状となり、この山頂に曲輪や堀切等の山城遺構を配置する。城主は、稲葉山城跡と同じ武藤氏と伝えられている。

山城遺構は尾根の形状に合わせて、北東側に開口する谷部を囲むように逆コの字状に配置している。主郭は尾根南端の海拔67mの最高所に設けており、主郭北側には堀切を、同じく南東側には長大な堅堀を配置する。曲輪の配置状況から、主郭の北東側に開口する谷部に対して強い防衛意識を有していることが見て取れる。これは主郭の南側には本所川が流れ、西側は海となり、南側から西側にかけては天然の要害となっているためである。

伊崎氏の系図によれば、海坂城跡は稲葉山城跡の支城として天文9年(1540)に築城されたと記録されている。それ以降については定かではないが、前述の稲葉山城の落城の経緯から類推すれば海坂山城跡もやはり同時期に落城の憂き目にあったと考えられる。

山城以外に重要な遺跡として、経塚と寺院が挙げられる。

加斗地域の東端にあたるおおい町尾内では尾内経塚が所在するが、明確に経塚であるかどうかは不明であり、「尾内配石遺構」と報告されている⁽⁶⁾。この遺跡は昭和35年(1960)に国道27号の改修工事の際に不時発見されたもので、同志社大学考古学調査団によって緊急調査が行われた。遺跡はおおい町尾内と長井の境に所在する八ヶ崎丘陵上に位置する。調査によれば、不整形の土坑に礫を充填した遺構を1基検出した。遺構の直上で皇宋通宝が1点出土した以外に遺物はなく、この遺構の性格については特定することはできなかったが、盗掘を受けた経塚の可能性を残している。

寺院では、飯盛寺と宝樹寺遺跡が挙げられる。

飯盛寺(第4図24)は、飯盛に所在する真言宗高野山派の寺院である。山号は深山であり、本尊は葉師如来である。飯盛寺の創建時期は未詳であるが、「飯盛寺由緒書」によれば文中(1352~1355)に後光厳院の勧願所として建立され、最盛時には七堂伽藍と十二坊を擁した寺院であったと記されている。しかし、文明16年(1484)3月29日に火災により、本堂以下全てが焼失してしまった。その後、文明18年(1486)に本堂が再建され、現在に至っている。平成6年(1994)から平成10年(1998)にかけて、本堂の解体・保存修理作業が実施された。その際の平成7年(1995)に、解体後の本堂部分の発掘調査が小浜市教育委員会によって実施された⁽⁷⁾。発掘調査により、本堂の基壇は二時期に渡って構築さ

れていることが判明し、現在の本堂が焼失前よりも規模を大きくして再建していたことが判明した。更に須弥壇下からは、経石埋納壇が検出された。経石埋納壇には、法華経を記したと考えられる「一字一石経」が納められていた。この経石埋納壇は、遺構の切り合い関係から本堂再建時に設けられたものと考えられる。

宝樹寺遺跡（第4図20）は、飯盛地区の黒駒に所在する。遺跡の性格は明らかではないが、近世の遺物散布地として現在の飯盛川右岸の黒駒集落一帯に広がっている。遺跡名に冠せられた宝樹寺は黒駒遺跡から直線距離で南へ600m程のところに位置し、応永期（1394～1428）に創建されたと伝えられている。このため、宝樹寺遺跡も中世にまで遡る可能性が高い。

以上、考古学的知見から加斗地域の歴史的環境を概括してきた。今回、発掘調査を実施した稲葉山城跡および黒駒遺跡は、この地域の古代・中世史を考える上で非常に重要な遺跡であると言えるだろう。よって、本報告が今後のこの地域の歴史研究に寄与するものと期待したい。

註

- 1 例えば、下記の引用・参考文献を参照して頂きたい。
- 2 第1章註1の加斗地区に加えて現在のおおい町長井・尾内を含めた範囲が中世加斗庄の荘域にあたり、また『若狭郡県志』によれば稲葉山城の支配地域であったと記載されている。本書では、便宜的にこの地域を加斗地域と呼称しておく。なお、加斗庄の範囲については下記の文献aを、『若狭郡県志』の記述については下記の文献bを参照した。
 - a 小栗田 淳監修 1981 『福井県の地名』日本歴史地名体系第18巻 平凡社
 - b 福井県立朝倉氏遺跡資料館編 1987 『福井県の中・近世城館跡』福井県教育委員会
- 3 小浜市教育委員会文化課編 1980 『岡津製塩遺跡 一第1次・第2次発掘調査報告一』小浜市教育委員会
- 4 大森 宏 1996 『戦国の若狭 一人と城一』大森睦子
- 5 前掲註4
- 6 石部正志編 1966 『若狭大坂 一福井県大坂町考古学調査報告一』福井県大坂町
- 7 杉本泰俊・松川雅弘 1998 「第五章 その他の調査事項 第1節 発掘調査」『重要文化財 飯盛寺本堂修理工事報告書』飯盛寺

引用・参考文献

- 小浜市史編纂委員会編 1992 『小浜市史』通史編上 小浜市役所
- 御嶽貞義編 2001 『森谷古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告第54集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 島中清隆編 2002 『外街道遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第62集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 御嶽貞義編 2003 『田島元山古墳跡』福井県埋蔵文化財調査報告第67集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

第3章 稲葉山城跡の調査

第1節 調査の経過

稲葉山城跡はおおい町石山城主武藤氏一族、および加斗地域の在地有力豪族の伊崎氏に係わる山城とされており、所在地から「本所村城」もしくは「加斗城」とも呼称されていた¹⁾。

稲葉山城跡の発掘調査は、平成15年(2003)12月1日より着手した。調査区は調査前までは山林であり、事業予定地内の立木伐採後に調査を開始した。調査はまず、調査区を含めた尾根全体の清掃作業を実施した。平成15年度の調査は、立木伐採の際に遺棄された枝葉類の後片付けやその他の雑木伐採に終了した。

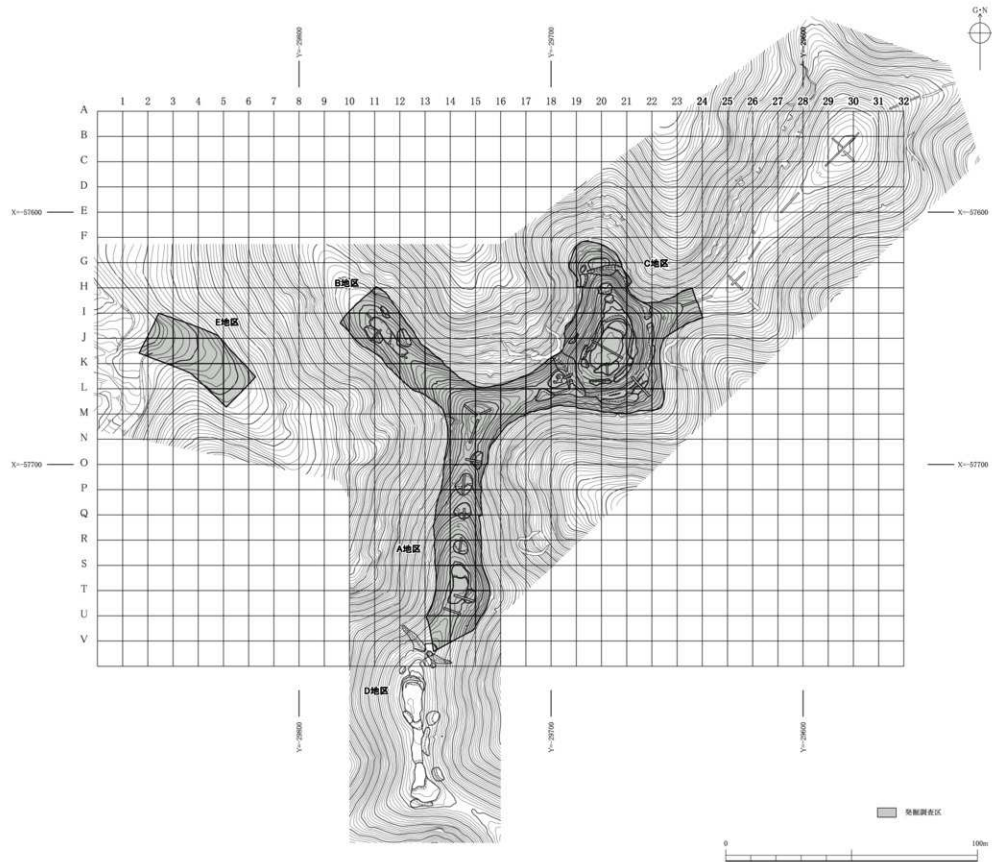
なお、調査範囲が広域であるため地形を考慮して便宜上A～Eまでの五つの地区に分けて調査を行った(第5～9図)。A地区は事業予定地内南側の尾根で、北に向かって緩やかにのび、やがて北東と北西の二つの尾根に分かれる。B地区は、この二つに分かれた北西側の尾根であり、C地区は北東側の尾根である。A地区以南の尾根は事業予定地外ではあったが、山城遺構が遺存しているため測量調査の対象とし、D地区とした。E地区はA・B地区西側の谷部の調査区であり、製塩土器に酷似した土師質土器の包蔵地であることが試掘調査で確認された調査区である。また、調査に際して調査区内に10m×10mのグリッドを設定した。グリッドは国土平面直角座標第VI系に揃えるように配置し、南北にA～V列、東西に1～32列を配した(第5図)。そして、グリッドの北東角にそのグリッドの標識となる木杭を設定した。なお、グリッドについては、以下「A1区」というように表記していく。

平成16年(2004)4月6日より平成16年度の調査を開始した。前年度と同様に、5月17日まで調査区全域の雑木伐採と清掃作業を継続して行った。5月18日に現況測量のため、航空写真測量を実施した。測量範囲は工事により地形が大きく改変されるため、山城が立地する尾根の全容が把握できるように、広範囲にわたって行われた。

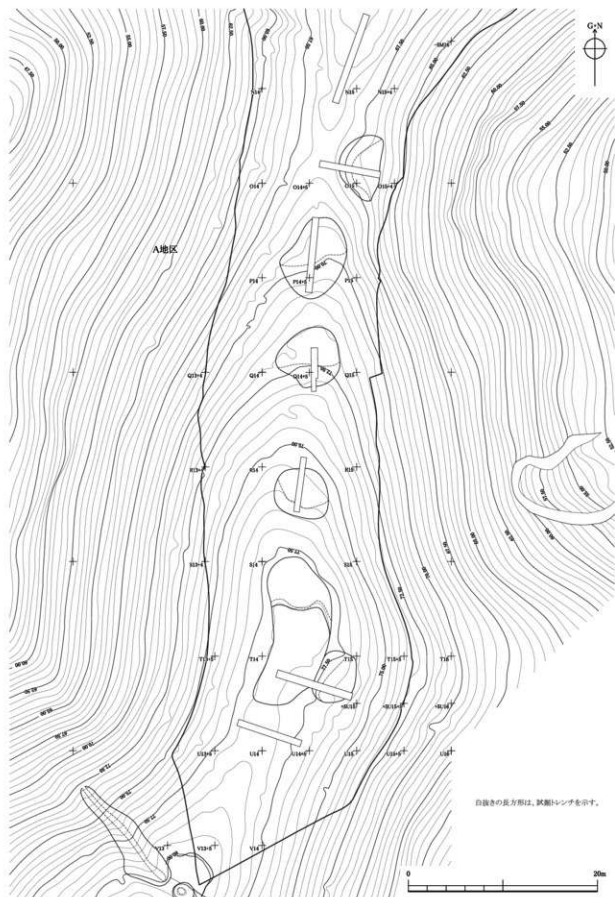
5月20日よりE地区の発掘調査に着手する。調査区内に土層観察用のセクションベルトを残しながら、表土並びに遺物包含層の掘削に取り掛かった。E地区は、奥行きが狭い谷部の開口部付近に位置するため(第9図)、遺物包含層は谷底にあたる部分に存在し、遺物の出土も局所的で調査区の中央部にほぼ限られるような状況であった。遺構も概して少なく、谷底を中心に柱穴を検出するが掘り込みの浅いものが大半であり、積極的に建物に復元し得るような配置については現地での調査段階では見受けられなかった。更に、遺構からの遺物の出土も僅少であった。8月20日にE地区の航空写真測量を実施し、E地区の調査を終了した。

6月29日から7月5日まで、事業予定地外にあたるが山城遺構が遺存するD地区の現況測量のため、下草刈り等の清掃作業に着手する。D地区の遺構は、A～C地区と一連の山城遺構と考えられていた(第5図)。しかし、縄張り図等の図面が無いため、A～D地区の山城遺構の配置状況を十分に窺い知ることができなかった。このため、D地区においても現況測量を実施する運びとなった。清掃作業の終了後、測量業者による現況測量が実施された。

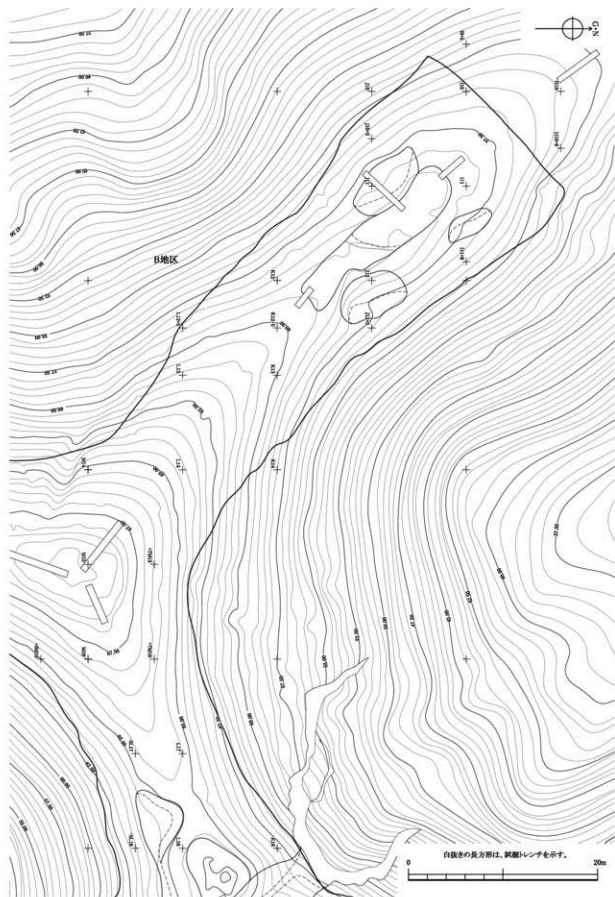
E地区の調査と並行して、7月13日よりA地区の表土掘削を開始した。A地区は尾根最頂部に曲輪と想定される平坦部を有し、更に北に向かってのびる尾根上にも不鮮明ながら階段状の平坦面が認められていた(第6図)。表土は厚いものではなく、10cm前後の表土層を掘削すると地山層に至る。8月26日



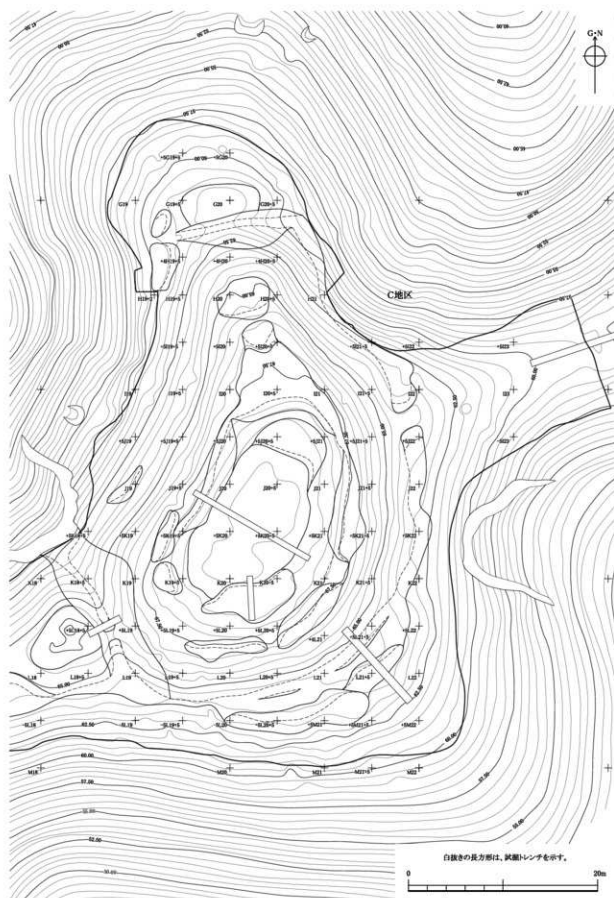
第5図 稲葉山城跡グリッド配置図(縮尺1/1,500)



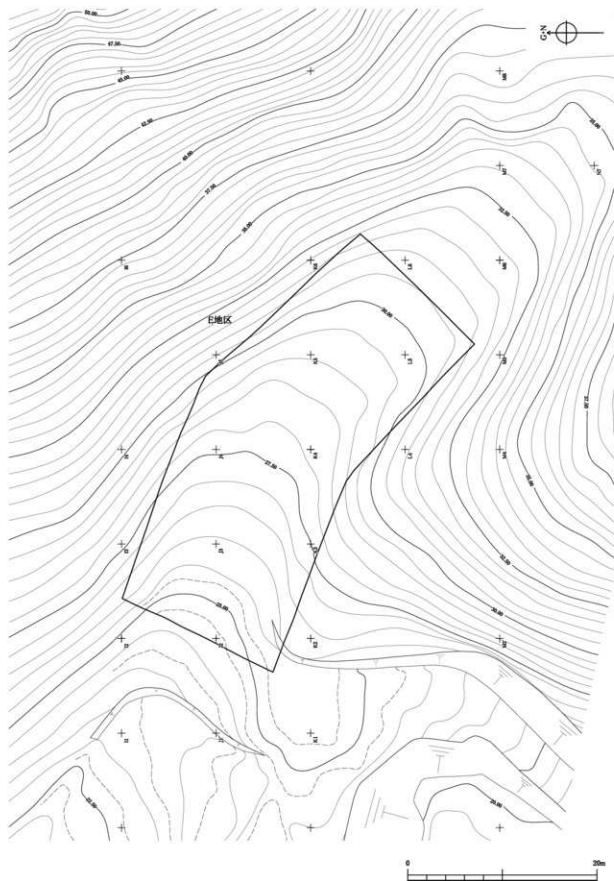
第6図 A地区調査前状況図(縮尺1/400)



第7図 B地区調査前状況図 (縮尺1/400)



第8図 C地区調査前状況図 (縮尺1/400)



第9図 E地区調査前状況図(縮尺1/400)

には、A地区の表土掘削が終了する。

引き続き、山城遺構が明瞭に遺存するC地区の表土剥ぎに着手する。調査前においても一見すると古墳かと思われる高まりを有し、頂部には曲輪と考えられる平坦面が存在する（第8図）。この平坦面がC地区の主郭と考えられる。頂部より若干下った尾根の中段には、回廊状に狭い平坦面が巡る。この平坦面も、帯曲輪として機能していたものであろう。頂部平坦面下裾部の北側・北東側・南西側では尾根が切られて窪地状となっており、堀切が存在することを容易に推定することができた。更に裾部の南東側には堀切をつなぐ形で回廊状の平坦面が巡っており、山道として利用されていたようである。

C地区の頂部平坦面の表土を剥ぎ始めると、表土下において鉄線および碁石状の小円礫が出土し始めた。また、小規模ではあるが、被熱によって変化した焼土面を4箇所検出した。

10月7日以降、表土剥ぎの作業に目途が立ってきたため、本格的にC地区の全域に断ち割り用トレンチを設定し、掘削を開始する。土層観察から、頂部の平坦面は掘削した土砂でその縁辺部を整地し、平坦な面を形成していたことが判明した。また、中段回廊状平坦面下は、西側については土砂の流出により判然としなが、北側・東側・南側については地山の軟質な岩盤を掘削して切岸を形成していた。

10月21日からは、堀切の検出に本格的に着手した。堀切は調査前においてはC地区の北側・北東側・南西側に、尾根を断ち切るようにして設けられた。表土掘削後の断ち割りトレンチにより、南西側堀切から北東側堀切に向かって回廊状の平坦面が巡っていたが、この部分において南東側堀切を確認した。堀切は、いずれも地山である軟質な岩盤層まで掘削した箱堀であった。南西側堀切および北東側堀切では、調査前において中央部に土橋状の隆起部が存在していた。この土橋状の隆起部は堀切構築段階に伴うものではなく、土層の堆積状況から後世に山道として利用するために盛られたものと考えられる。

C地区での山城遺構の検出作業と併行して、11月18日よりA地区の断ち割り用トレンチの掘削に取り掛かった。A地区ではC地区程明瞭な平坦面は確認できず、調査前は頂部および尾根の北側・東側斜面において曲輪と考えられる小規模な平坦面を確認していた。断ち割り用トレンチの土層を観察すると、いずれの平坦面においても形成時の掘削や整地の痕跡が判然とせず、平坦面の形状も明確さを欠くものであった。土砂の流出による影響もあるかもしれないが、A地区における山城遺構構築時の掘削は極めて簡便なものであったと考えられる。平坦面において柱穴等は確認できなかったが、頂部平坦面の南東隅に接して、埋土に焼土を含む土坑を1基検出した。

12月15日に越冬のため発掘道具を一旦片付けて、平成16年（2004）の調査を終了する。

翌平成17年（2005）2月21日より調査を再開し、B地区の表土掘削を開始する。この作業と併行してA・C地区の図面作成作業を行い、3月10日まで平成16年度の調査を行った。

4月5日より平成17年度の調査を開始する。B地区に断ち割り用トレンチを設定し、掘削を開始する。B地区においては、北西にのびる尾根の北東側・南西側斜面に曲輪と考えられる小規模な平坦面が調査前に確認されていた（第7図）。この部分を中心に調査を行ったが、A地区と同様に平坦面形成時の掘削や整地の痕跡が判然とせず、平坦面の形状も明確さを欠くものであった。B地区もA地区と同様に山城遺構構築時の掘削は、極めて簡便なものであったと考えられる。また、B地区においても柱穴等の遺構は確認できなかった。

8月24日に調査区全域の航空写真測量を実施する。8月25日に発掘器材等の撤収を行い、稲葉山城跡の発掘調査を無事終了する。

第2節 A地区

1 概要

A地区は、今回発掘調査を実施した南側の尾根にあたる（第10図）。調査前ではA地区の頂部および北側斜面・東側斜面において、不明瞭ながら平坦面が確認されていた（第6図）。発掘調査では、尾根上を縦断する形でトレンチを設定し、平坦面の造作について確認作業を行った（第11図）。土層観察により、表土層である第1層の直下より地山層であることが判明した。地山層も、土色や含有物の差異によって分層することが可能である。なお、土層観察の結果、平坦面に伴う明確な掘削の痕跡や盛土成形の痕跡を確認することはできなかった（第12～17図）。

2 遺構

1) 平坦面

平坦面A1・A2・A3（第18図）

平坦面A1は、A地区の頂部の北端に位置する。尾根上に不整な長方形を呈して、平坦面が展開する。平坦面A1の北側には緩やかに下る箇所があり、その前面には不明瞭ながら平坦面が展開している。等高線を頼りに平坦面A2の復元を試みたが、平坦面A1と平坦面A2を画する段差について土層観察からは明確な掘削の痕跡を得られていない。このため、両者を併せて一つの平坦面として展開した可能性もある。なお、表土層直下が地山層であり、平坦面上では柱穴等の遺構は検出できなかった。

平坦面A3は、平坦面A1の東側に隣接する平坦面である。平坦面A1から緩やかに下り、東側斜面上に狭小な平坦面を形成する。土層の堆積状況から人為的な掘削や整地の痕跡は認められなかった。なお、すでに同質化しているものの、周囲の土層とは色調が異なる第2層の存在から、この平坦面が古い段階の倒木痕である可能性も推定できるが確証は得られていない（第16図）。平坦面A3の肩部において、焼土を伴う土坑SK01を検出した。

平坦面A4・A5・A6・A7（第10図）

平坦面A4～A6は、A地区の北に向かってのびる尾根上に展開する平坦面である。いずれも尾根の中央部に展開し、緩やかな階段状を呈する。平坦面自体は不明瞭で、土層の観察からも掘削や整地の痕跡は認められなかった。

平坦面A7はA地区北端の東側斜面に位置し、大きく抉れるように平坦面が展開する。平坦面A7は、すでに同質化しているものの、周囲の土層とは色調が異なる第4・5層の存在から、平坦面A3と同様に古い段階の倒木痕である可能性がある（第17図）。

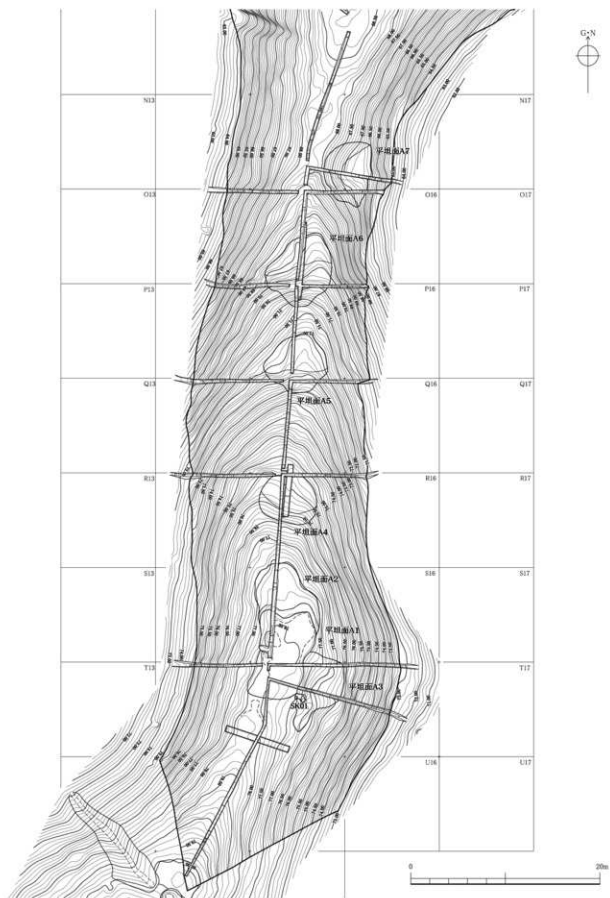
2) 土坑

SK01（第19図）

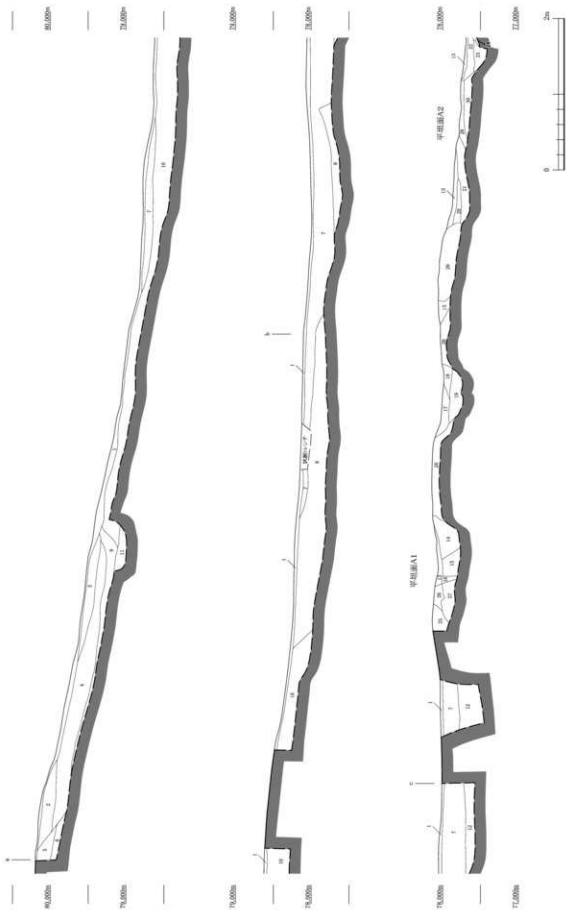
SK01は、平坦面A1の南東隅、平坦面A3の肩部に位置する。長軸118cm、短軸80cmをはかる不整な長方形を呈し、深さは最深部で25cmをはかる。埋土には焼土および微細な炭化物を伴っている。土層の堆積状況から判断すると、東西に二つの掘り込みを有していたことがわかる。遺物が出土しないため帰属時期は不明だが、現代にまで帰属時期が下る可能性もある。

3 遺物

平坦面A1の南側の尾根上において、表土層である第1層直下より須恵器の杯蓋が1点出土している。



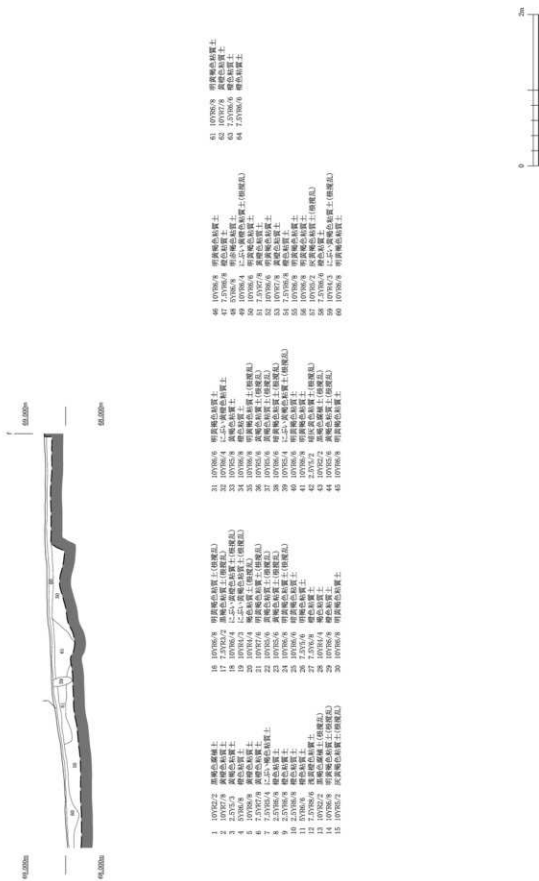
第10图 A地区遺構配置图(縮尺1/400)



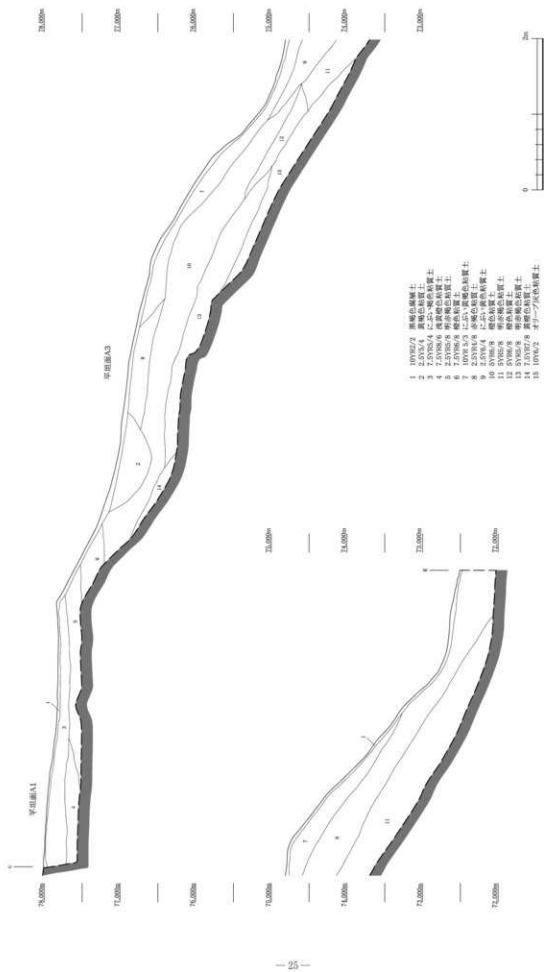
第12图 A地区土留图1 (缩尺1/50)



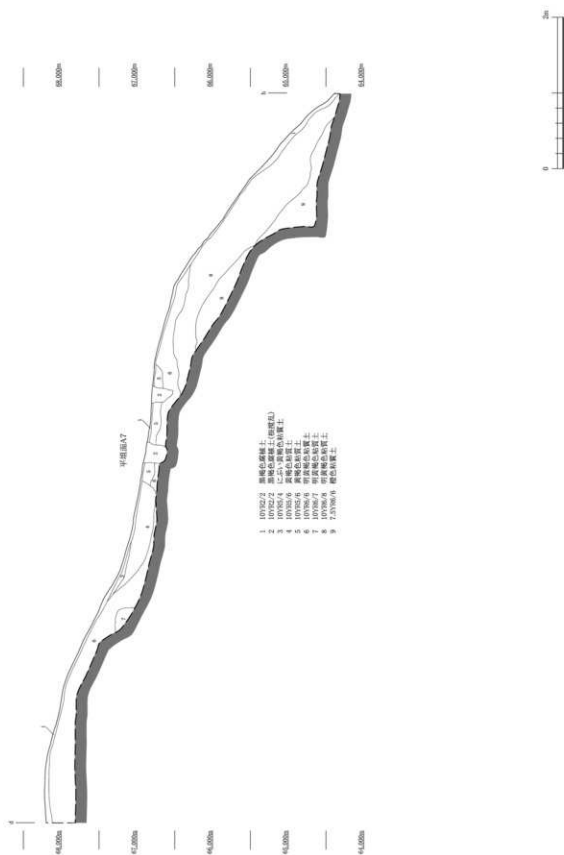
第14图 A地区土层图3 (缩尺1/50)



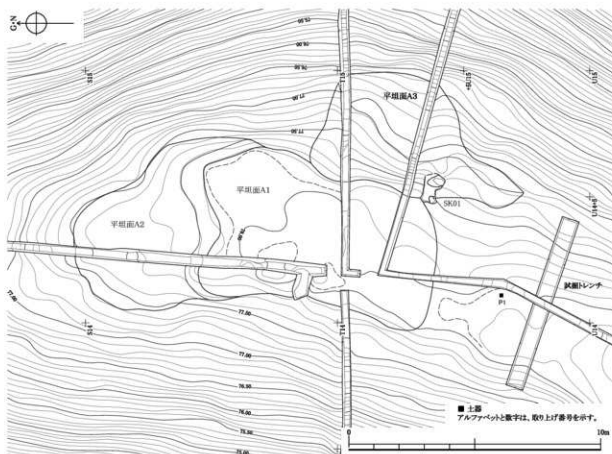
第15図 A地区土層図4 (縮尺1/50)



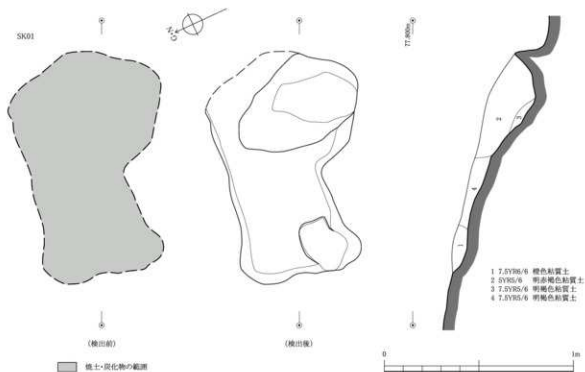
第16图 A地区土層図5 (縮尺1/50)



第17図 A地区土層図6 (縮尺1/50)



第18図 A地区主要遺構配置図 (縮尺1/150)



第19図 A地区土坑実測図 (縮尺1/20)

第18図のP1が、その出土地点である。

第20図は、須恵器の杯蓋である。緩やかに丸味を帯びた天井部を有し、口縁端部を短く揃って返しを形成する。欠けてはいるものの、摘みが存在した痕跡を残す。9世紀前半に位置付けられよう。



第20図 A地区出土遺物実測図
(縮尺1/3)

第3節 B地区

1 概要

B地区は、今回発掘調査を実施した北西側の尾根にあたる(第21図)。A地区から分岐して北西に尾根はのびるが、南半の尾根筋は急傾斜となっている。南半については、調査前においても人為的な痕跡は認められなかった。B地区の北半は比較的緩やかな緩斜面となっており、調査前には北端の頂部および北東側斜面・南西側斜面において、不明瞭ながら平坦面が確認されていた(第7図)。発掘調査では、尾根上を縦断する形でトレンチを設定し、平坦面の造作について確認作業を行った(第22図)。土層観察により、表土層である第1層の直下より地山層であることが判明した。地山層も土色や含有物の差異によって分層することが可能である。なお、土層観察の結果、平坦面について明確な掘削の痕跡や盛土成形の痕跡を確認することができなかった(第23～25図)。

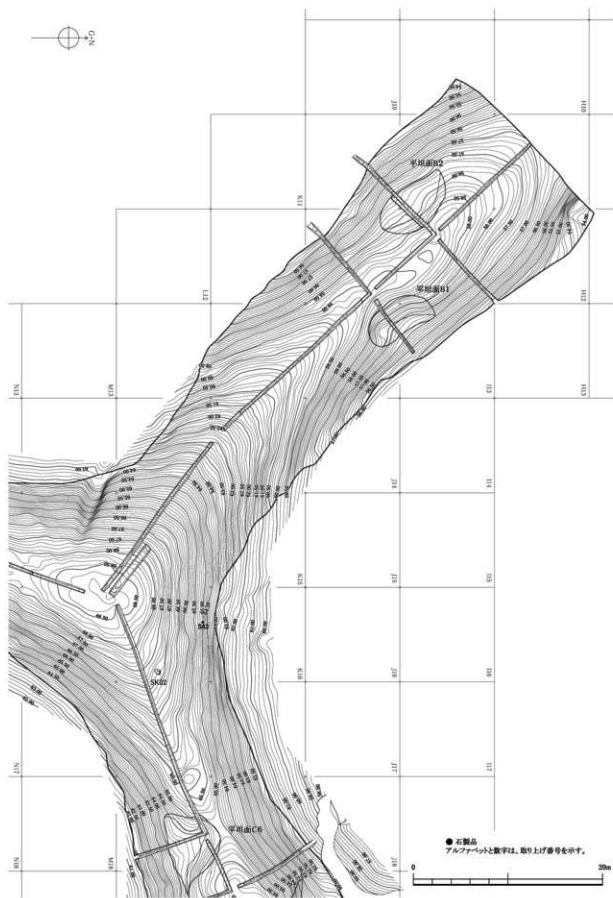
2 遺構

1) 平坦面

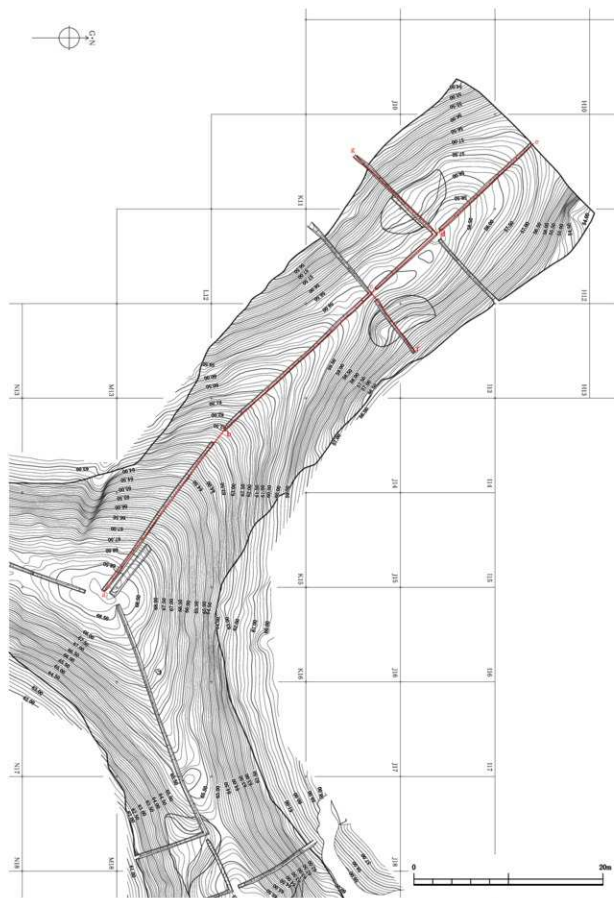
平坦面B1・B2(第21図)

平坦面B1は、B地区の北東側斜面に位置する。尾根頂部より若干下った斜面上に、不整な半円形を呈する平坦面が展開する。平坦面は斜面をやや挟るように展開しているが、土層の堆積状況から人為的な掘削や整地の痕跡は認められなかった。平坦面B1は、すでに同質化しているものの、周囲の土層とは色調が異なる第3層の存在から、古い段階の倒木痕の可能性も推定できるが確証は得られていない(第25図)。

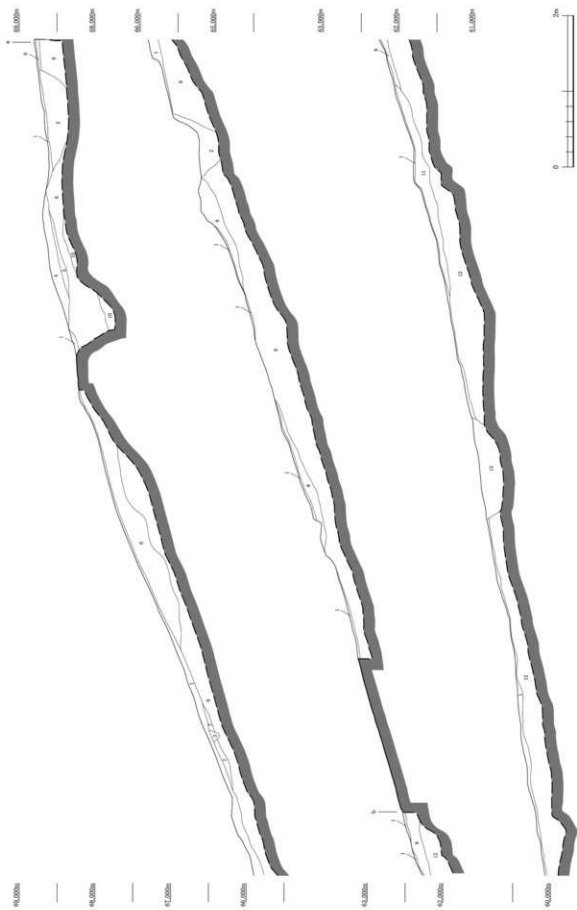
平坦面B2は、B地区の南西側斜面に位置する。尾根頂部より少し下った斜面上に、不整な楕円形を呈する平坦面が展開する。土層の堆積状況から人為的な掘削や整地の痕跡は認められなかった。平坦面B2も、すでに同質化しているものの、周囲の土層とは色調が異なる第3層の存在から、平坦面B1と同様に古い段階の倒木痕の可能性がある(第25図)。



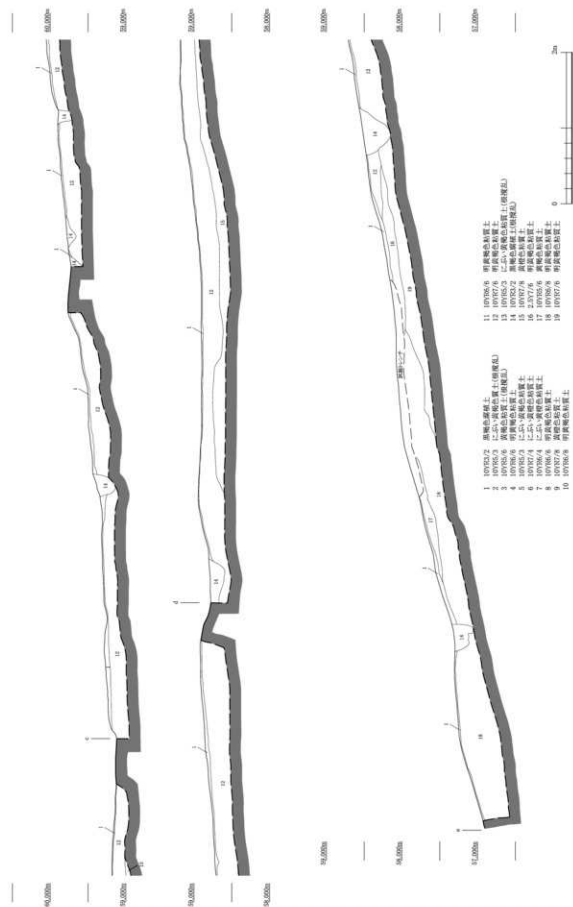
第21図 B地区遺構配置図 (縮尺1/400)



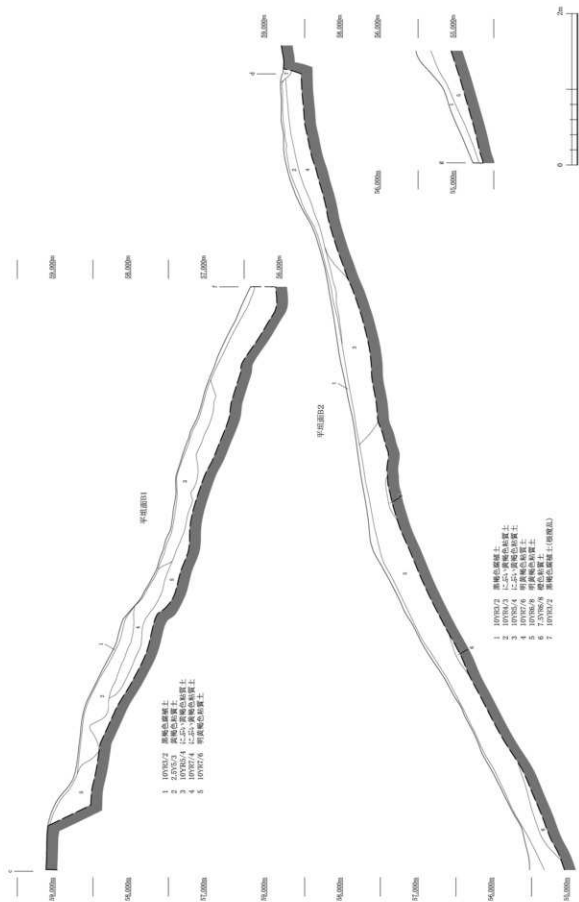
第22図 B地区土層観察ライン位置図 (縮尺1/400)



第23图 B地区土层图1 (缩尺1/50)



第24図 B地区土層図2 (縮尺1/50)



第25図 B地区土層図3 (縮尺1/50)

第4節 C地区

1 概要

C地区は、A地区から北東方向にのびる尾根上に位置する（第26図）。調査前より平坦面や堀切が明瞭に遺存している調査区であった。かつて稲葉山城跡を踏査した大森宏氏が、「見張り台と思われる小郭」と記した箇所である⁽²⁾。調査前においても、尾根の頂部に平坦面を有し、更に頂部の平坦面を画するように堀切を設けていることが確認できた（第8図）。

頂部の平坦面を中心に、放射状に尾根上を縦断する形でトレンチを設定し、平坦面の造作および堀切について確認作業を行った（第27図）。土層観察の結果、尾根頂部の縁辺部において、盛土造成によって平坦面の拡張を行っている様子が確認でき、かつ頂部平坦面下周囲では地山である岩盤層にまで掘削を行って堀切を構築していることが確認できた（第28～38図）。

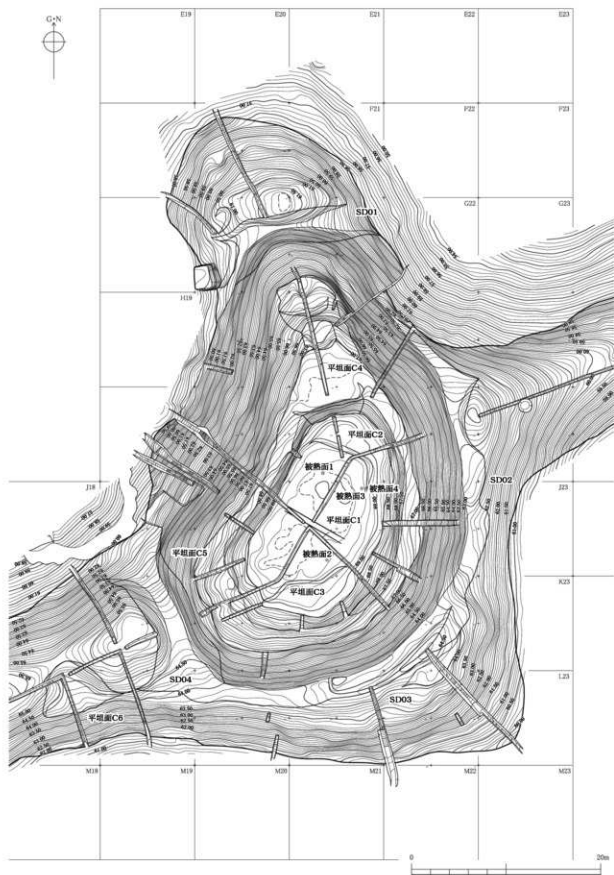
2 遺構

1) 平坦面

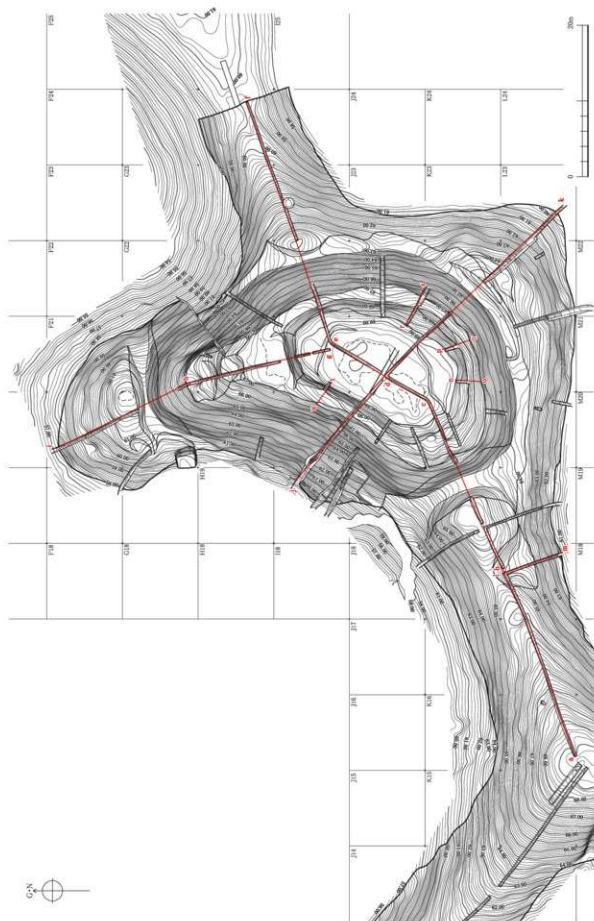
平坦面C1・C2・C3・C4・C5（第39・40図）

C地区の尾根の頂部に中心となる平坦面C1・C2・C3を設け、更に北側の一段下りた箇所に平坦面C4を設けている。平坦面C1・C2・C3がC地区の最高所にあたるため、この平坦面がC地区の最も中心となる郭群と言えよう。平坦面C1は、長軸約17.9m、短軸約11.8mをはかる不整な長方形を呈する。平坦面C1の北側には小規模な段差があり、その前面に平坦面C2が展開する。平坦面C2は不整な半円形を呈し、平坦面C1の長軸方向に沿うように設けられている。平坦面C1の南側にも緩やかな段差を認められ、その下に不整な三角形の平坦面を形成している。この南側の平坦面を平坦面C3として復元を試みた。ただし、平坦面C1との区分は明確ではない上、平坦面自身も平滑ではなく、後世の改変等によって形成された可能性もある。平坦面C1・C2・C3の表土層直下が地山層であり、山頂部を平滑に削平したことがうかがえる。ただし、北側を除く平坦面C1・C2・C3の縁辺部においては、削平した土砂を用いて平坦面の拡張を行っており、その様子を土層の堆積状況からうかがうことができる。第30図e-f間・第34図d-j間・第35図d-k間・第38図n-o間・第38図p-q間・第38図r-s間・第38図t-u間の土層観察の所見では、平坦面C1・C2・C3の縁辺部に堆積している土層の中間に、他の土層に比べ色調がやや暗い土層が堆積している（e-f間の第8層、d-j間の第4・5層、d-k間の第9層、n-o間の第4層、p-q間の第5層、r-s間の第6層、t-u間の第6層）。これら中間の土層の上位には地山層に近い特徴を持つ土層が堆積していることから、中間の土層（e-f間の第8層、d-j間の第4・5層、d-k間の第9層、n-o間の第4層、p-q間の第5層、r-s間の第6層、t-u間の第6層）は旧表土と考えられ、それよりも上位の土層は平坦面C1・C2・C3を形成する際の整地土層であると考えられる。尾根の頂部を平らに掘削し、その掘削した土砂を縁辺部に整地することで平坦面の拡張を行ったものと考えられる。ただし、平坦面C1の南西側ではこのような土層堆積は確認できなかった（第29図）。

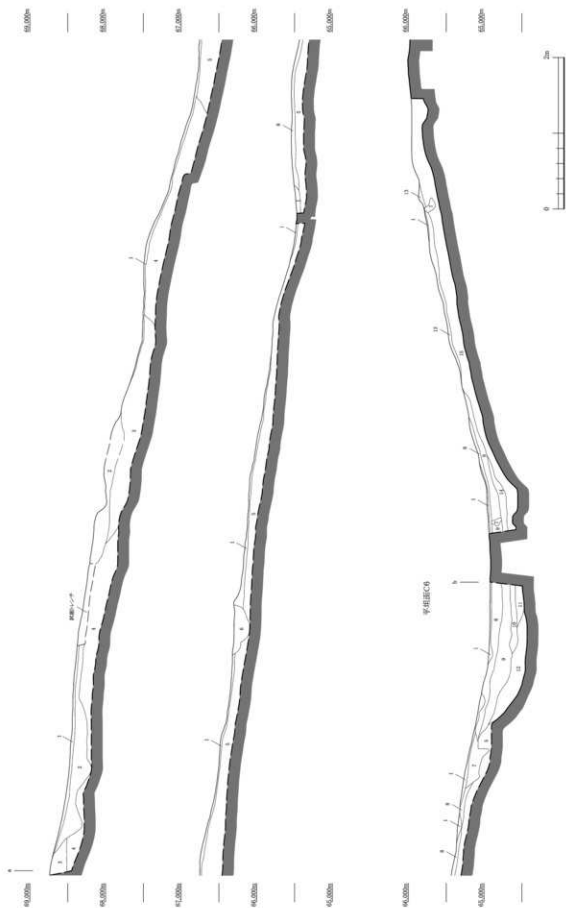
最高所にあたる平坦面C1においては、柱穴等の遺構は検出されなかった。このことから建物等の構築物は、設けられていなかったようである。しかし、時期は判然としないが、赤色硬化した小規模な被熱面を4箇所で見出している（第39図）。いずれも小規模で掘り込みを持たず、地表面が焼けて赤色硬化していた（第41図）。



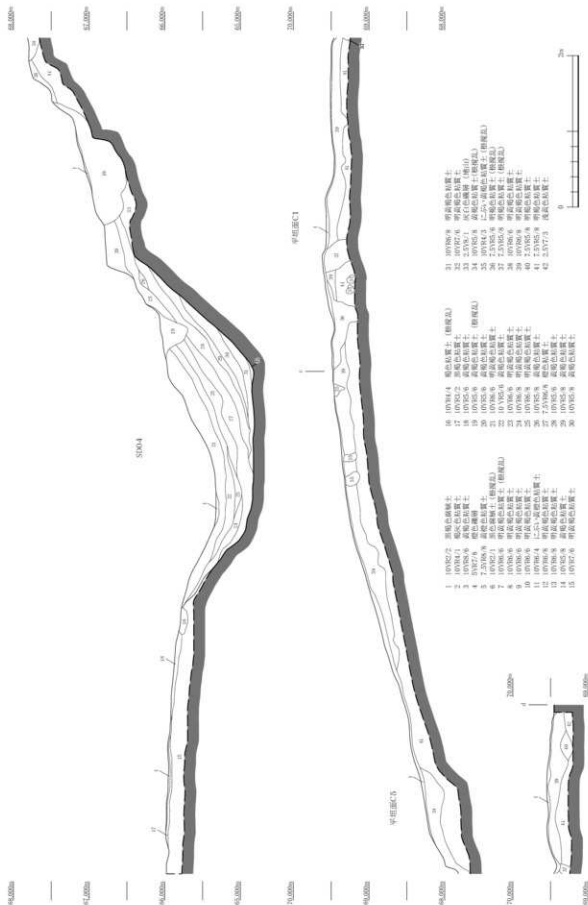
第26図 C地区土道構配置図 (縮尺1/400)



第27図 C地区土層観察ライン位置図(縮尺1/500)



第28図 C地区土層図1 (縮尺1/50)

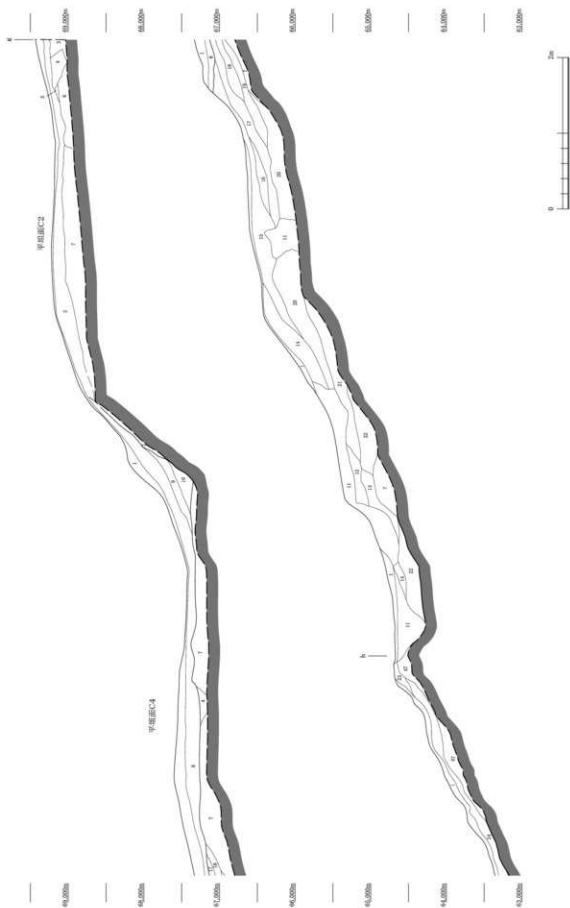


第29図 C地区土層図2 (縮尺1/50)

第4節 C地区



第30圖 C地区土層図3 (縮尺1/50)

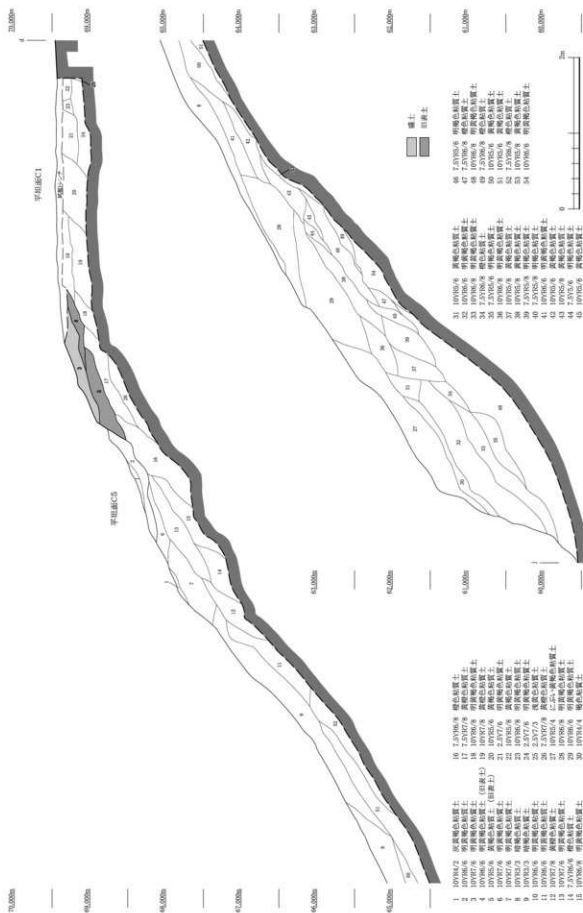


第32圖 C地区土層図5 (縮尺1/50)



第33図 C地区土層図6 (縮尺1/50)

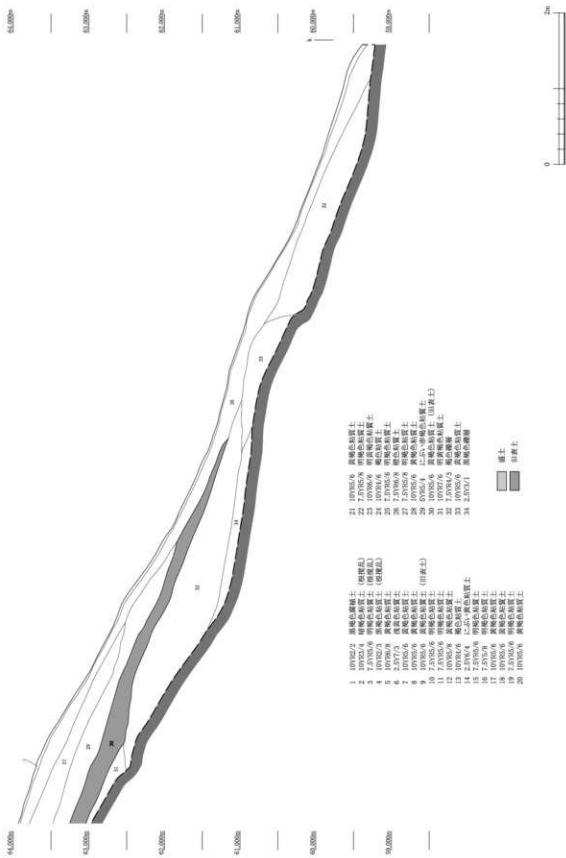
第4節 C地区



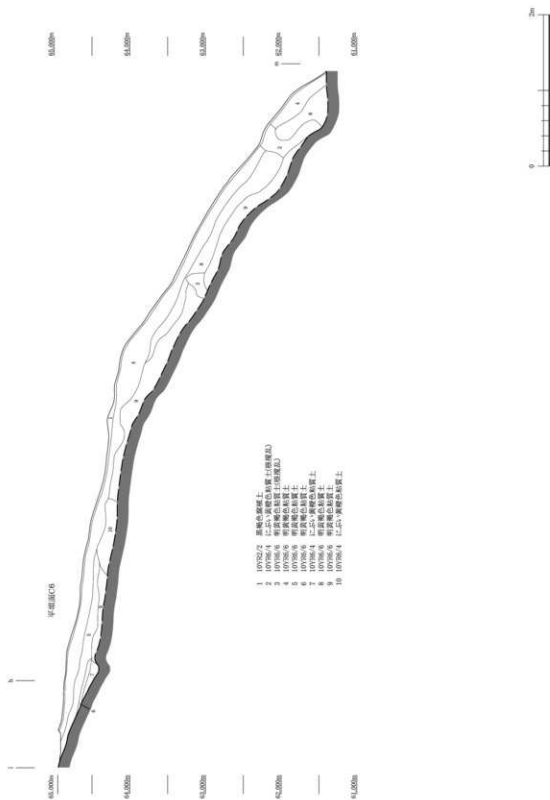
第34圖 C地区土層図7 (縮尺1/50)



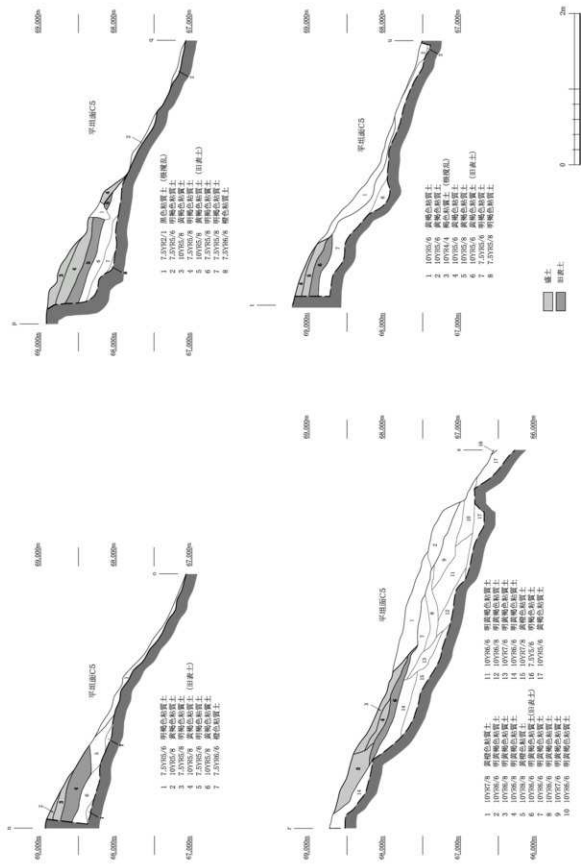
第35図 C地区土層図8 (縮尺1/50)



第36図 C地区土層図9 (縮尺1/50)



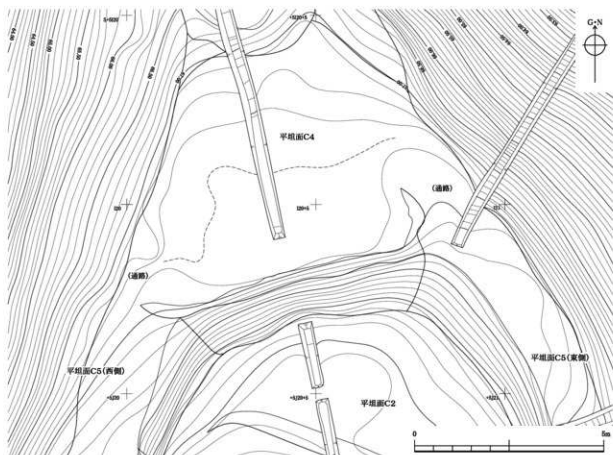
第37図 C地区土層図10 (縮尺1/50)



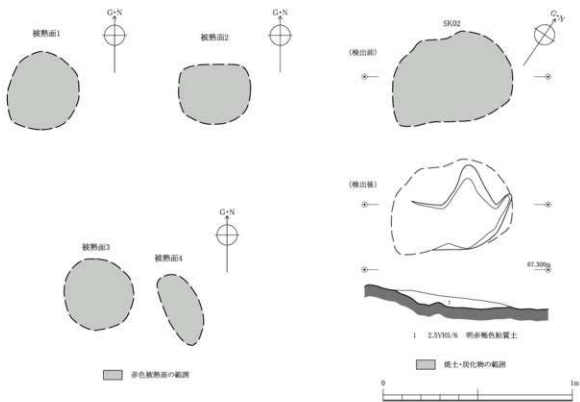
第38图 C地区土層図11 (縮尺1/50)



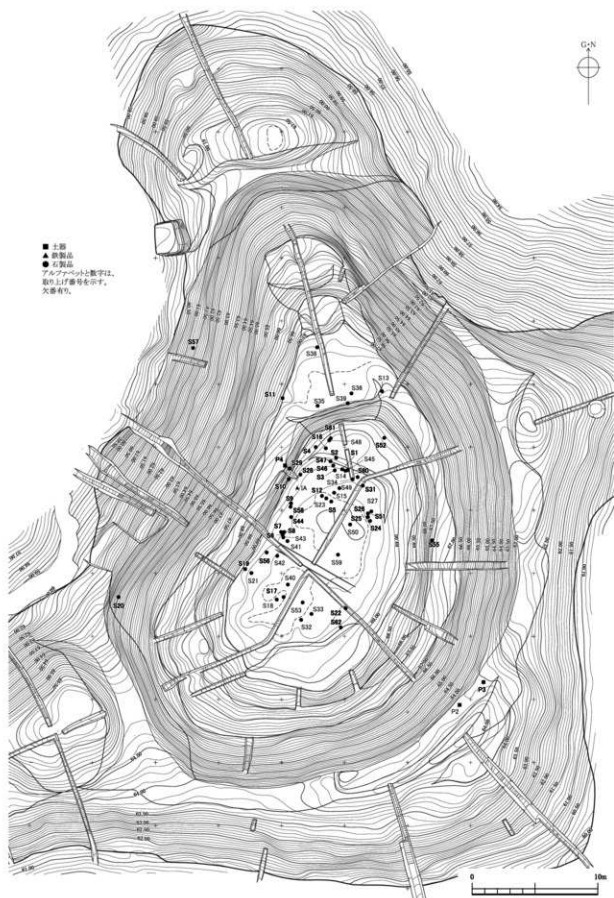
第39図 C地区主要遺構配置図1 (縮尺1/150)



第40図 C地区主要遺構配置図2 (縮尺1/100)



第41図 C地区被熱面・土坑実測図 (縮尺1/20)



第42図 C地区遺物出土状況図(縮尺1/300)

被熱面1は長軸42cm、短軸37cmをはかり、不整な円形を呈する。被熱面2は長軸38cm、短軸32cmをはかり、不整な長方形を呈する。被熱面3は長軸39cm、短軸37cmをはかり、略円形を呈する。被熱面4は長軸40cm、短軸19cmをはかり、長楕円形を呈する。被熱面3・4は近接して存在することから、或いは一つの被熱面であったかもしれない。被熱面の周囲では、調査時において炭化材や炭化物は見受けられなかった。

平坦面C1・C2・C3から130cm程下ったところには、幅約80～100cmをはかる平坦面C5が馬蹄形に巡り、北側では平坦面C4と繋がる。平坦面C5は東側ならびに西側において良好に遺存するが、堀切SD04の東側肩部付近では明確ではなく、緩やかな緩斜面となっている。第29図b-c間で土層を観察したが、平坦面を構築した明瞭な痕跡は認められなかった、しかし、その他の地点（第30図e-f間、第34図d-j間、第35図d-k間、第38図n-o間、第38図p-q間、第38図r-s間、第38図t-u間）では不鮮明ながらも、尾根頂部の緩斜面をL字状に掘削した様子をうかがうことができる。恐らく平坦面C1の南西側は、盛土造成によって平坦面C1の縁辺部および平坦面C5の大部分を形成していたものと想定され、時間的経過に伴って土砂の流出が生じ不明瞭なものになってしまったと考えられる。このように平坦面C5は、中段に設けられた回廊状の帯曲輪と言えよう。

平坦面C4は、平坦面C2の北側に設けられた平坦面である（第40図）。緩やかに下る尾根上をL字状に削平して成形している。平面的には三角形を呈するが、北側の尾根の先端側では緩斜面となり平坦面の痕跡は判然としない。可能性として本来は掘削した土砂を尾根の先端側に整地して、平坦面の拡張を行っていたと考えられるが、トレンチでの土層観察では整地の痕跡は確認できなかった（第32図）。整地した土砂が、時間的経過に伴って流出した可能性がある。平坦面C4と平坦面C2を画する段は、平面的には緩やかなコの字状に削平して成形している。平坦面C4の南東側・南西側は、緩やかな緩斜面となって平坦面C5と接続している。この部分が、平坦面C5との通路として利用されたのであろう（第40図の通路と示した箇所参照）。

平坦面C4および平坦面C5の直下は、急斜面となり切崖を形成している。特に東側では、地山の軟質な岩盤層にまで掘削がおよび切崖としている（第30・35図）。一方の西側も、急斜面であり切崖としての機能は十分に果たしていると捉えることができる。しかし、土層の堆積状況からは掘削の痕跡を確認することができず、また堆積自体もやや乱れた印象を受けた（第34図）。同じ西側の他の部分での土層堆積状況も参照すれば、平坦面C5西側直下は、当初より急斜面であったため小規模な地滑り等の崩落が繰り返し発生した可能性が高く、このため土層の堆積に乱れが生じたものと推察できる。

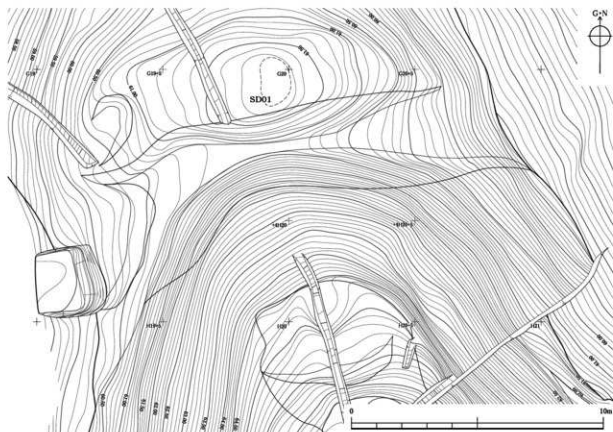
平坦面C1～C5がC地区の中心的郭群、いわゆる主郭であり、表土層直下が平坦面の構築面であった。この平坦面直上において、僅かではあるが遺物として中世陶器・鉄鏃・小円礫が出土している（第42図）。

平坦面C6（第26図）

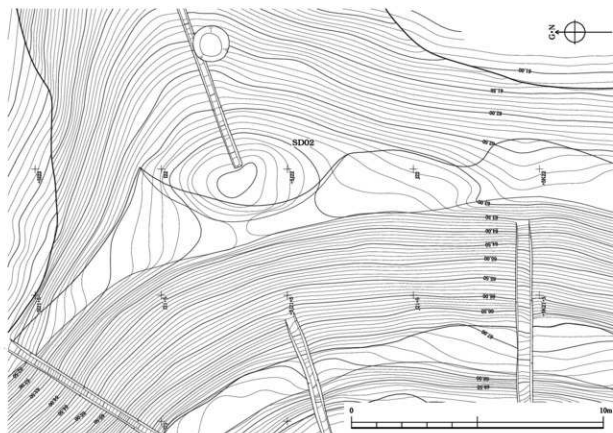
平坦面C6は、C地区の南西側尾根の南側斜面に位置する（第26図）。南西側堀切のSD04の西側に近接して、不整な半円形を呈する平坦面が展開する。土層の堆積状況から人為的な掘削や整地の痕跡は認められなかった。すでに同質化しているものの、周囲の土層とは色調が異なる土層の存在から、古い段階の倒木痕の可能性もある（第28図第9～11層、第37図第5～7層）。

2) 堀切

堀切は、頂部の平坦面C1～C5の主郭を画するように、北側・北東側・南東側・南西側の4箇所に、



第43図 C地区堀切実測図1 (縮尺1/150)



第44図 C地区堀切実測図2 (縮尺1/150)

尾根もしくは山腹を断ち切る形で設けている。なお、各堀切には土塁が伴っていた可能性もあるが、土砂の流出により確認できず判然としない。また、北東側堀切のSD02から南東側堀切のSD03を経て南西側堀切のSD04へと各堀切の底面を結ぶ形で、回廊状に巡る平坦部が確認された。この平坦部は、主郭下を巡る通路として利用された可能性がある。各堀切の規模は以下の通りである。

SD01 (第43図)

C地区主郭下北側に設けられた堀切である。上端幅約320cm、底部幅約40cm、深さは南側の肩部からは約160cmを、北側の肩部からは約80cmをはかる。堀切の形態は箱堀である。堀切の末端は、ハの字状に少し開きながら収束していく。なお、北側肩部から底面までが浅いため、尾根の先端側である北側肩部の平坦部に土塁を設けた可能性もあるが、トレンチによる土層観察ではその痕跡を確認することはできなかった(第33図)。或いは、土砂の流出により消失したのかもしれない。

SD02 (第44図)

C地区主郭下北東側に設けられた堀切である。上端幅約170cm、底部幅約110cm、深さは東側の肩部から約40cmをはかる。西側の肩部は平坦面C5下の切岸となっているため、肩部の上端を明確に捉えることはできなかった。堀切の形態は箱堀である。堀切の末端はハの字状に開きながら収束していき、南側はSD03に連なる平坦部となる。なお、東側肩部から底面までが浅いため、北東側にのびる尾根側に土塁を設けた可能性もあるが、トレンチによる土層観察ではその痕跡を確認することはできなかった(第30図)。或いは、土砂の流出により消失したのかもしれない。

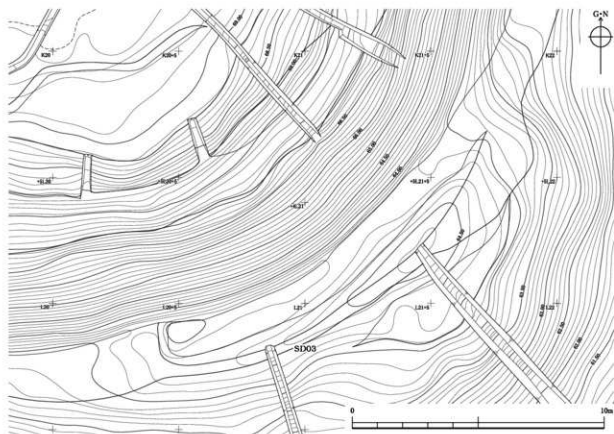
SD03 (第45図)

C地区主郭下南東側に設けられた堀切である。上端幅約250cm、底部幅約120cm、深さは南東側の肩部から約50cmをはかる。北西側の肩部は平坦面C5下の切岸となっているため、肩部の上端を明確に捉えることはできなかった。堀切の形態は箱堀である。底面はSD02に向かう北東側では開放されて平坦部となるが、SD04に向かう南西側では低い肩部(堀切の掘方)が検出された。なお、南東側の肩部から底面までが浅いため、南東側肩部の平坦部に土塁を設けた可能性がある。このため、SD03の南東側の尾根上にトレンチを入れて土層の堆積状況を確認した(第35・36図)。第35・36図d-k間の第30層は他の上下の土層に比して褐色味が強い粘質土層であり、それよりも上位の土層である第26～29層は第30層以下の地山層に類似した赤褐色味の強い粘質土層であった。このことから、SD03の南東側の尾根に堆積した土層の内、第30層が山城遺構構築前の旧表土と考えられ、第30層より上位の土層はSD03等の山城遺構構築時に掘削された土砂が堆積したものと考えられる。また、SD03の南東側は比較的緩やかな傾斜の尾根であり、登攀が容易な状況である。このため、SD03の南東側肩部に接するに形で平坦部が存在しており、この部分に防御用の土塁が設けられていたと想定できる。よって、第30層より上位の土層である第26～29層は、この土塁が崩落して堆積した土層ではないかと考えられる。

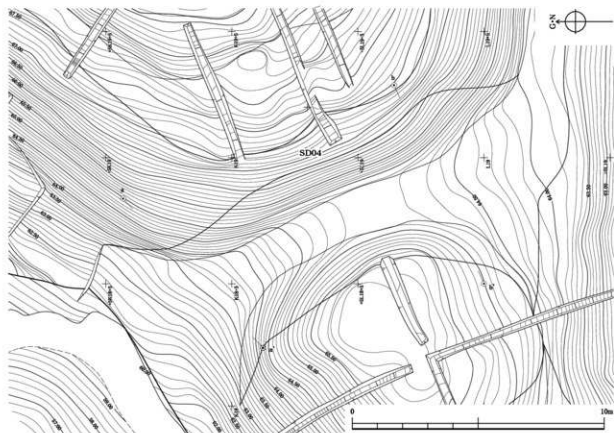
なお、堀切の埋土中からは、底面よりやや浮いた状態で瀬戸・美濃焼の平碗の細片が出土している(第42図P2・P3)。

SD04 (第46図)

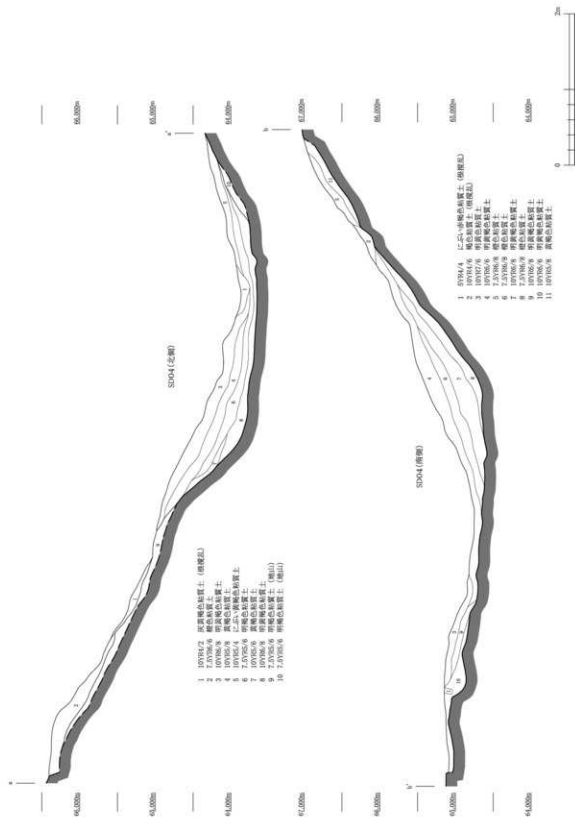
C地区主郭下南西側に設けられた堀切である。上端幅約460cm、底部幅210cm、深さは東側の肩部からは約160cmを、西側の肩部からは約100cmをはかる。堀切の形態は箱堀である。堀切の末端は、ハの字状に大きく開きながら収束していく。底面の南東側は、SD03に連なる平坦部となる。なお、西側



第45図 C地区堀切実測図3 (縮尺1/150)



第46図 C地区堀切実測図4 (縮尺1/150)



第47图 C地区掘切土層図 (縮尺1/50)

肩部から底面までが浅いため、やや狭いものの西側肩部の平坦部に土塁を設けた可能性もあるが、トレンチによる土層観察ではその痕跡を確認することはできなかった(第29・47図)。或いは、土砂の流出により消失したのかもしれない。

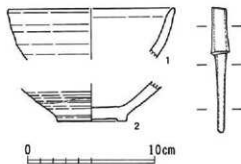
3) 土坑

SK02 (第21・41図)

SK02は、A地区からのびる尾根がC地区の尾根へと繋がる箇所において検出した。長軸65cm、短軸45cmをはかる不整な楕円形状に、焼土および微細な炭化物を含んだ粘質土層の広がりを確認した。この粘質土層を除去すると、深さ6cmをはかる落ち込みを検出する。遺構としての掘方が不明瞭で、壁の立ち上がりが極めて浅いものであった。遺物が出土しないため帰属時期は不明だが、現代にまで帰属時期が下る可能性は否定できない。

3 遺物

平坦面C1～C5を中心とする主郭からは、瀬戸・美濃焼天目茶碗の口縁部片1点(第48図1)、鉄鍔1点(第48図3)、用途不明の小円礫65点(第49・50図)が出土している。いずれも表土直下の平坦面直上からの出土である。また、SD03の埋土中からは、瀬戸・美濃焼の平碗片2点(第48図2)が出土している。第42図のIAが鉄鍔の、P2～4が土器の出土地点を示している。小円礫の出土地点も第21・42図に示したが、平坦面C1・C2・C4に集中して出土する傾向を見せ、しかも平坦面C1の西側に偏在していることが見て取れる。



第48図 C地区出土遺物実測図1(縮尺1/3)

1) 瀬戸・美濃焼(第48図)

- 第48図1は、瀬戸・美濃焼天目茶碗の口縁部である。微細な破片であるため、図上にて復元を行った。
- 体部は外側に向かってやや丸味を帯びながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。細片であるため明確ではないが、藤澤編年の大窩第1段階後半から第2段階に属すると考えられ、16世紀前半に位置づけられよう⁽³⁾。

第48図2は南東側堀切SD03から出土した瀬戸・美濃焼の平碗である。堀切内から同一固体と考えられる

細片が2点出土しているが接合せず、図上にて復元を行った。体部外面上半は回転ナデ調整を、体部外面下半は回転ケズリ調整を施す。見込みも含めて体部内面から体部外面下半かけて、灰軸を施軸する。底部には回転糸切り痕を残して、高台を貼り付ける。復元高台径は、接地面で約5.3cmをはかる。藤澤編年の古瀬戸後I期に属すると考えられ、14世紀後半に位置づけられよう⁽⁴⁾。

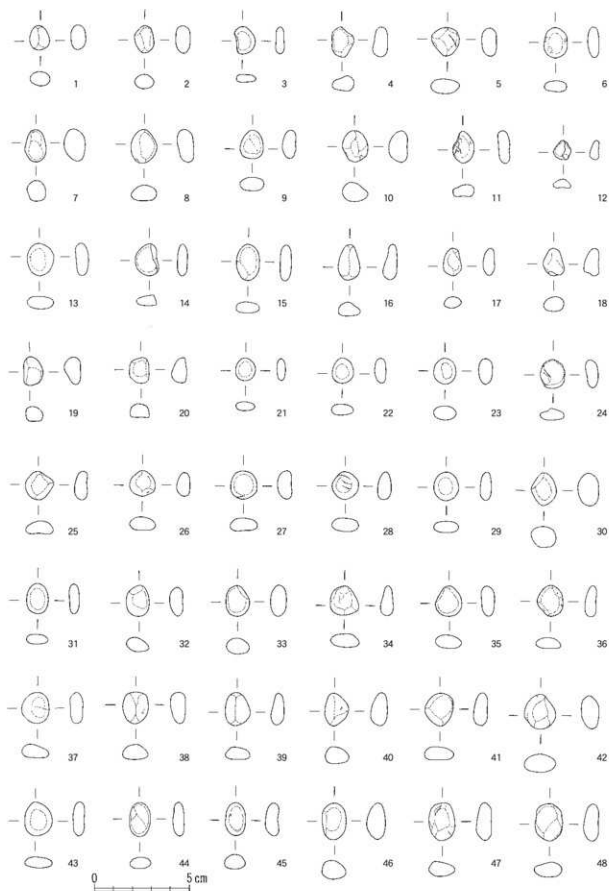
2) 鉄製品(第48図)

第48図3は、鉄鍔である。先端部を欠いているがほぼ全体の形状が把握できる。鍔身から茎部にかけて遺存し、関を有する。残存長は約9.8cm、重さは21.5gをはかる。

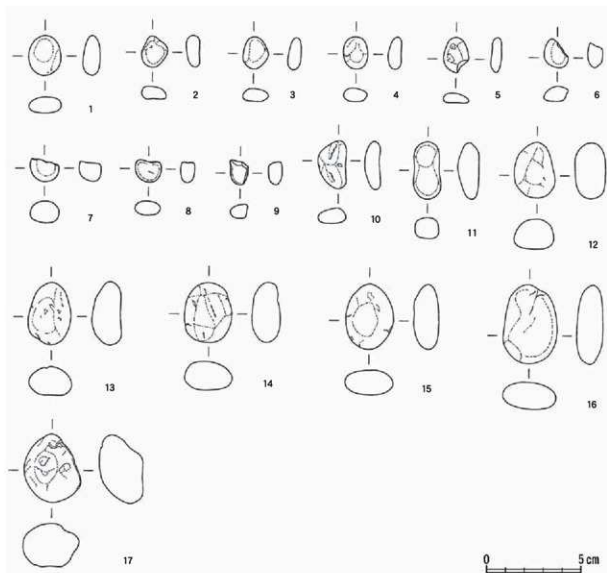
3) 石製品(第49・50図)

第49・50図は小円礫である。一箇所にまとまって出土する傾向は無く、広範囲に散在して出土している。出土量も少ないことから、平坦面上の一角に玉砂利として敷き詰められていたものとは考えにく

第4册 C地区



第49图 C地区出土物实测图2 (缩尺1/2)



第50図 C地区出土遺物実測図3 (縮尺1/2)

い。また、小振りなものが多いことから、投石用の礫とも考えたい。

第49図1～48・第50図1～9は、長軸1.1～2.1cm、短軸0.9～1.7cm、厚さ0.5～1.2cm、重さ0.5～4.1gをはかる。これらの小円礫は長楕円・円形・隅丸方形等の多様な形状をなし、多少の大小は認められるものの、いずれも親指の頭程の大きさである。また、扁平なものも多く、少なくとも一面に平坦面が確認でき、安置できるようになっている。いずれの小円礫も角が取れており石肌は滑らかなものが多い。しかも、割れた面も研磨によるものか石肌が滑らかに整えられている例もある。やや小振りながらも、その形状からこれらの小円礫は碁石として使用されていたと考えられ⁽⁵⁾、石材の違いから第49図1～12が白石、第49図17～48・第50図1～9が黒石であったと思われる。第49図13～16は第49図1～12の石材とは異なるものの、全体に灰色を帯びることから、白石である可能性がある。

第50図10は長軸2.6cm、短軸1.5cm、厚さ0.8cm、重さ4.0gをはかる不整な長楕円形の小礫である。一面に平坦面が確認でき、安置できるようになっている。角は取れており、石肌は滑らかである。第49図1～12と同じ白色の石材であり、このことから、第50図10も碁石として使用された可能性がある。

第50図11～17は、長軸3.0～4.2cm、短軸1.3～2.9cm、厚さ1.1～2.3cm、重さ7.2～29.4gをはかる小円

第2表 C地区出土小円礫観察表(取り上げ番号は第42図に対応)

採区番号	長軸長(cm)	短軸長(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取り上げ番号・出土地区	備考
第49図 1	1.30	1.05	0.80	1.40	S 27	白石
第49図 2	1.45	1.05	0.75	1.50	S 8	白石
第49図 3	1.45	1.00	0.50	1.00	S 47	白石
第49図 4	1.60	1.15	0.80	1.80	S 35	白石
第49図 5	1.50	1.50	0.80	2.30	S 56	白石
第49図 6	1.60	1.20	0.70	1.50	S 12	白石
第49図 7	1.70	1.15	1.10	2.40	S 48	白石
第49図 8	1.80	1.35	0.85	2.70	S 42	白石
第49図 9	1.50	1.25	0.70	1.70	S 33	白石
第49図 10	2.00	1.35	1.00	2.80	C地区排土	白石
第49図 11	1.70	1.10	0.65	1.50	I 22区切岸	白石
第49図 12	1.10	0.90	0.50	0.50	S 26	白石
第49図 13	1.75	1.40	0.70	2.30	S 58	白石か
第49図 14	1.70	1.25	0.60	1.40	S 44	白石か
第49図 15	1.95	1.15	0.60	1.80	S 52	白石か
第49図 16	1.90	1.15	0.75	1.80	S 41	白石か
第49図 17	1.45	0.95	0.60	1.30	S 46	黒石
第49図 18	1.45	1.10	0.80	1.50	S 9	黒石
第49図 19	1.50	1.00	0.90	1.70	S 6	黒石
第49図 20	1.35	1.05	0.80	1.60	S 10	黒石
第49図 21	1.20	1.05	0.45	0.70	S 1	黒石
第49図 22	1.35	1.15	0.60	1.20	S 5	黒石
第49図 23	1.40	1.20	0.75	1.60	S 23	黒石
第49図 24	1.50	1.25	0.65	1.70	S 60	黒石
第49図 25	1.50	1.50	0.70	1.80	S 7	黒石
第49図 26	1.35	1.35	0.70	1.70	S 51	黒石
第49図 27	1.50	1.40	0.70	2.10	S 19	黒石
第49図 28	1.45	1.40	0.70	1.90	S 34	黒石
第49図 29	1.50	1.30	0.60	1.70	S 22	黒石
第49図 30	1.75	1.35	1.10	3.30	S 53	黒石
第49図 31	1.60	1.15	0.45	0.70	S 14	黒石
第49図 32	1.65	1.20	0.75	1.80	S 16	黒石
第49図 33	1.65	1.25	0.85	2.20	S 61	黒石
第49図 34	1.55	1.50	0.70	2.00	S 45	黒石
第49図 35	1.60	1.40	0.65	1.90	S 49	黒石
第49図 36	1.65	1.35	0.60	1.70	S 29	黒石
第49図 37	1.65	1.40	0.70	2.30	S 11	黒石
第49図 38	1.65	1.35	0.80	2.40	S 3	黒石
第49図 39	1.75	1.30	0.70	2.00	S 36	黒石
第49図 40	1.75	1.25	0.90	2.40	S 31	黒石
第49図 41	1.75	1.50	0.75	2.70	S 21	黒石
第49図 42	1.80	1.65	0.95	3.60	S 59	黒石
第49図 43	1.80	1.45	0.60	2.20	S 28	黒石
第49図 44	1.80	1.10	0.60	1.60	S 15	黒石
第49図 45	1.75	1.10	0.70	1.80	S 43	黒石
第49図 46	1.95	1.25	1.00	3.30	S 40	黒石
第49図 47	2.00	1.35	0.80	3.00	S 4	黒石
第49図 48	2.00	1.50	0.80	3.10	S 62	黒石
第50図 1	2.10	1.70	0.90	4.10	S 2	黒石
第50図 2	1.65	1.35	0.70	2.00	S 38	黒石
第50図 3	1.70	1.35	0.70	2.20	J 21区23トレンチ	黒石
第50図 4	1.70	1.25	0.70	2.30	C地区排土	黒石
第50図 5	1.85	1.35	0.50	1.60	S 13	黒石
第50図 6	1.50	1.30	0.80	1.70	S 25	黒石
第50図 7	(1.05)	1.50	1.20	2.70	S 50	黒石
第50図 8	(1.05)	1.35	0.75	1.70	S 24	黒石
第50図 9	1.20	0.90	0.75	1.20	S 32	黒石
第50図 10	2.60	1.50	0.80	4.00	J 21区平坦面 C 1	白石か
第50図 11	3.00	1.30	1.10	7.20	S 20	
第50図 12	3.00	2.10	1.60	13.80	S 57	
第50図 13	3.30	2.25	1.50	15.00	S 18	
第50図 14	3.15	2.50	1.50	16.70	S 17	
第50図 15	3.45	2.55	1.30	15.70	S 55	
第50図 16	4.20	2.80	1.40	23.30	S 39	
第50図 17	3.60	2.90	2.30	29.40	S 63	

礫である。形状は、やや扁平な長楕円形である。一部に平坦面を有し、安置できるものも含まれるが、全体に丸味を帯びており、置いたときに不安定なものが多い。いずれも角が取れ、石肌は滑らかである。用途は特定できない。

第5節 D地区

1 概要

D地区は、A地区南側の事業予定地外の調査区である。この調査区には明瞭に山城遺構が遺存しているが、今まで縄張り図等が作成されていなかった。稲葉山城跡の構造を把握する上で測量図化が必要と考え、現況測量を実施した(第51図)。D地区は、細長い尾根上に曲輪と考えられる平坦面を連ねており、不明瞭ながら南北二つの郭群より構成されているようである。

2 遺構

1) 平坦面・土塁

平坦面D1～D8・SA01(第51図)

D地区の尾根頂部は一見すると細長い前方後円墳状を呈し、平坦面D1～D8までがD地区の主要な曲輪であり、主郭と言えよう。このD地区の主郭は、更に平坦面D1～D4の北側主郭と平坦面D6～D8の南側主郭に分けられ、その間を繋ぐようにして平坦面D5が存在する。平坦面D1・D5・D6の各間には明瞭な段差はなく、平坦面D1から緩やかに下り、尾根の鞍部状を呈する平坦面D5を経て、平坦面D6に向かって緩やかに上っていく状況である。平坦面D1は、尾根の最高所に設けられた長方形の曲輪である。曲輪北端には土砂の流出によって高さを減じているが、土塁であるSA01を設けている。SA01は現状では緩やかなコの字状を呈するが、土塁端部には山道として利用された痕跡を有するため、本来の形状かどうか疑わしい点がある。恐らく、SA01は平坦面D1の北端に一字状に設けられていた可能性がある。SA01の前面には平坦面D2・D3が存在するが、平坦面D2は尾根上の緩斜面であることから平坦面としての明瞭性を欠いている。平坦面D3は土塁前面の小規模な平坦面であり、土塁崩落土の堆積により生じた段差の可能性も否定できない。

平坦面D6～D8までが南側主郭であるが、いずれの平坦面も不整形であり、また段差もあまり持たない。平坦面D7・D8の南側正面に、谷を挟んで稲葉山城跡の本体が望める。その距離は、直線距離で200m程である。

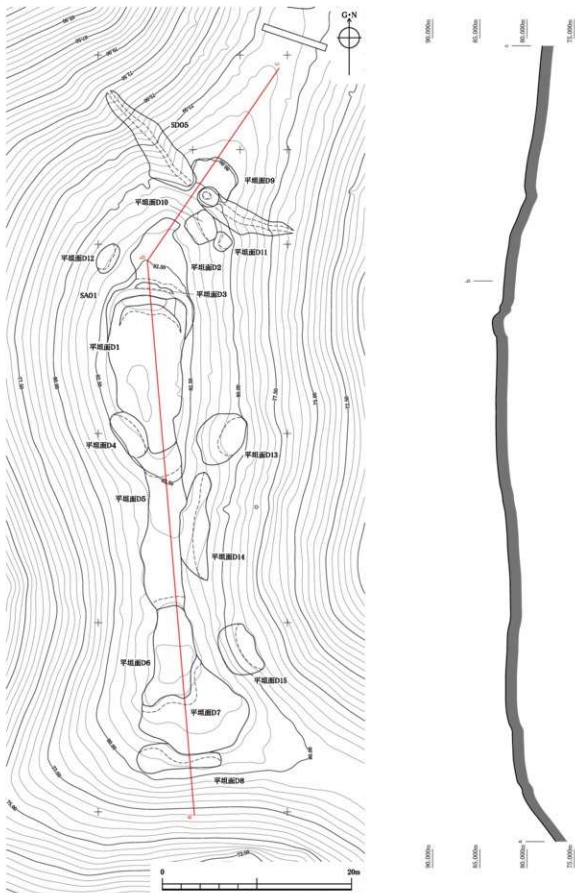
平坦面D9～D15(第51図)

D地区主郭下の北側から東側斜面に、平坦面D9～D15が存在する。いずれも僅かな平坦部を有するが、堀削等の形跡が不明瞭である。後世の植林等による改変、もしくは倒木等の自然の営為によるものとも考えられる。

2) 堀切

SD05(第51図)

D地区の北端、A地区との境に堀切を1条設ける。A地区とを分かちように尾根上に堀削し、その両端は東西の斜面を堅堀となつて下っていく。尾根中央部には土橋が遺存するが、堀切に伴うものではなく、恐らく後世に山道として利用するために設えたものと考えられる。



第51図 D地区現況図 (縮尺1/400)

第6節 E地区

1 概要

E地区は谷部の調査区であり、A～D地区に展開した中世山城とは直接的には係わりを持たない。狭小な谷部中央において、柱穴を中心とした遺構が検出された（第52図）。第53・54図は調査区の土層図であり、第5・6層が遺物包含層である。第21・22・26層の上面が遺構検出面であり、それ以下の土層は谷部の自然堆積層である。今回の調査区で検出した遺構の多くは柱穴であり、地形に沿う形で谷底を中心に構築されている。出土した遺物は製塩土器に酷似した土師質土器が主体であり、その出土も局所的であり調査区中央部のJ4・J5・K4・K5区より集中して出土する。それ以外のグリッドからの遺物の出土は、僅かであった。

2 遺構

1) 掘立柱建物

遺構として検出された数多い柱穴の内、一定の規格性をもって矩形に配置される柱穴列を掘立柱建物であると認定した。ただし、現地における発掘調査の際は、掘立柱建物を明確に認定することができなかった。現地調査終了後に測量図を基に再度遺構の配置状況を検討した結果、2棟の掘立柱建物を復元し得た。現時点では掘立柱建物の上屋構造が明らかではないため、便宜上柱穴列で形成される矩形の長軸方向を桁行、短軸方向を梁行としておきたい。掘立柱建物の桁行長・梁行長は、柱穴列で形成される矩形を基にその辺の長さを計測している。なお、柱穴列を形成する柱穴は全てが直線的に配置されていないため、柱穴列両端の柱穴を結ぶ線上に他の柱穴が並ばない例も存在する。このため、柱穴列の横断面の図には、全ての柱穴の断面が視認できるように投影し、図上で合成している例もあることを断っておく。また、建物の桁行方位は座標北より計測している。

S B O 1 (第55・56図)

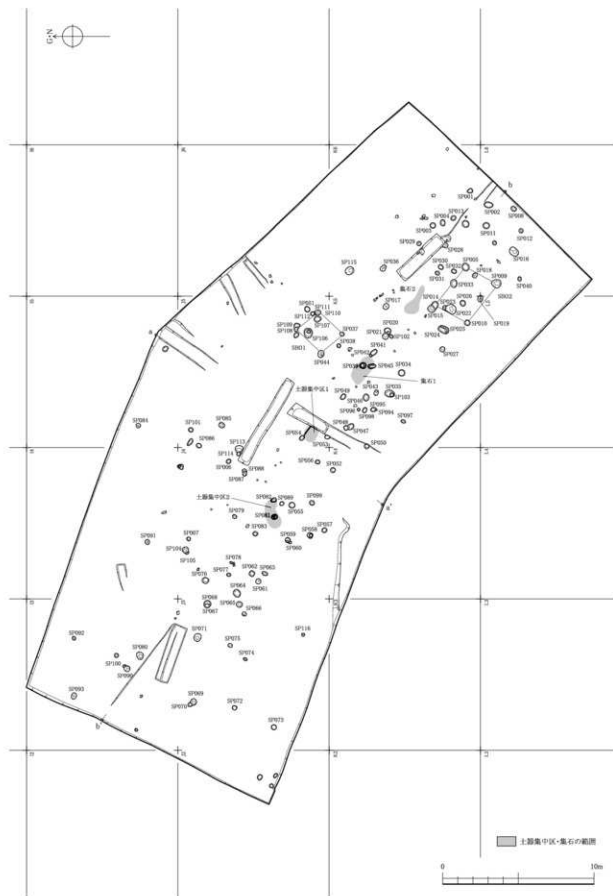
J5・K5区において検出した、桁行1間×梁行1間をはかる4本柱の建物である。桁行長2.22m、梁行長1.91mをはかる。各柱穴列は、正確に並列せずに、互いにずれて対置している。このため各柱穴列で形成される矩形は、菱形に歪む長方形を呈する。柱穴の規模は、径30～50cm、深さ5～19cmをはかる（第56図）。建物の桁行方位は、N-43°-Eをはかる。

S B O 2 (第55・56図)

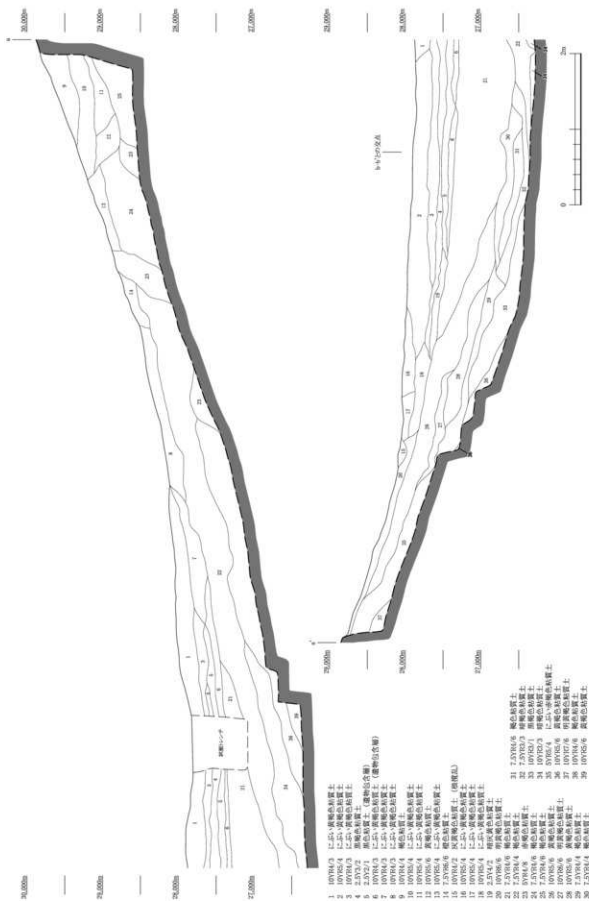
K5・K6・L5・L6区において検出した、桁行2間×梁行1間をはかる6本柱の建物である。桁行長3.25m、梁行長2.44mをはかる。各柱穴列は、正確に並列せずに、互いにずれて対置している。このため各柱穴列で形成される矩形は、菱形に歪む長方形を呈する。また、南側柱穴列中央のS P O 1 9が北側にずれて配置されているため、南側柱穴列は直線的に柱穴が配置されていない。このためにS P O 1 9・O 3 3間の梁行長は、2.13mと短くなっている。柱穴の規模は、径39～64cm、深さ7～28cmをはかる（第56図）。建物の桁行方位は、N-51.5°-Eをはかる。

2) 柱穴 (第57～61図)

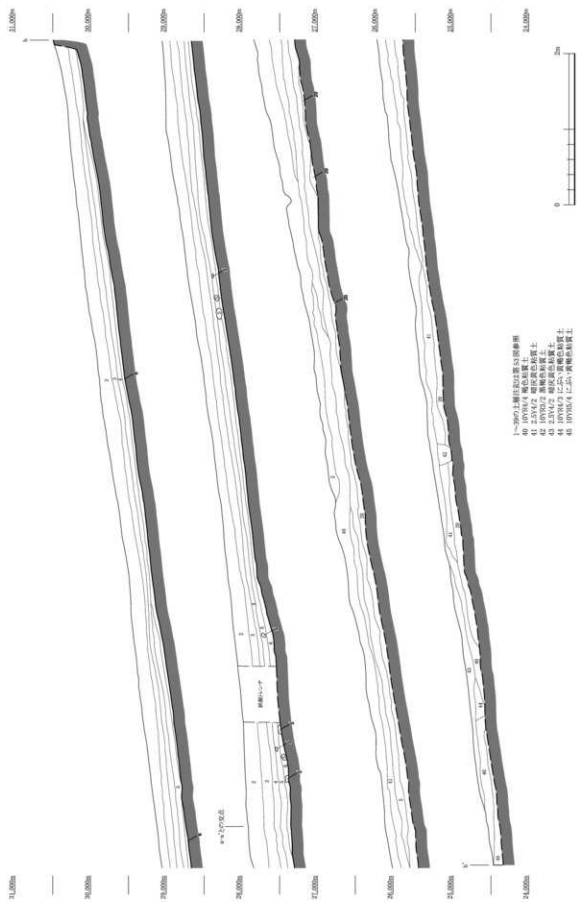
地形に沿うように、谷底にあたる調査区中央部において柱穴が多数構築されている。掘り込みの浅い柱穴が多いが、掘り込みの深い柱穴も存在することから前項で復元した棟数以上の掘立柱建物が存在した可能性もある。遺物が伴う柱穴はS P O 5 4・O 8 1・O 8 2・O 8 9・1 1 3であり、製塩土器に酷似した土師質土器の細片が出土している。



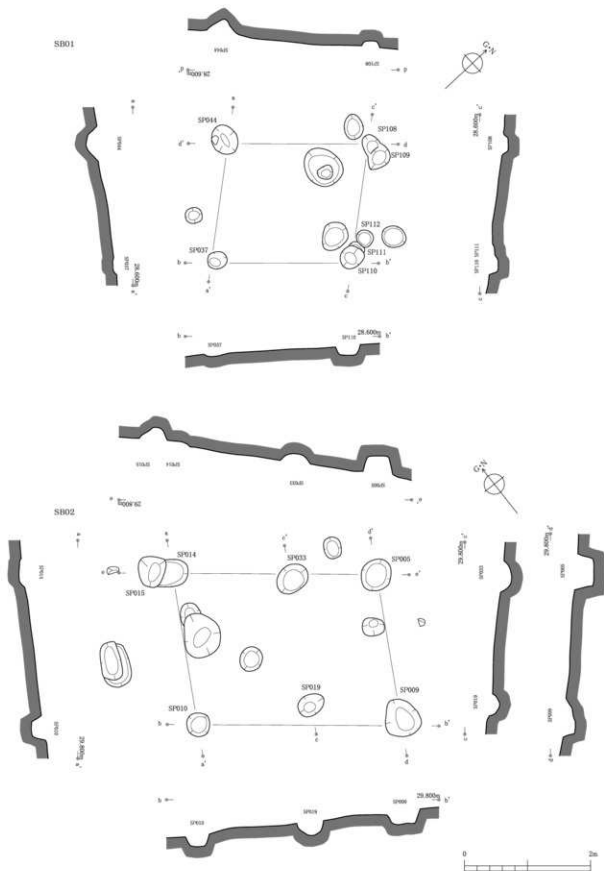
第52図 E地区遺構配置図 (縮尺1/250)



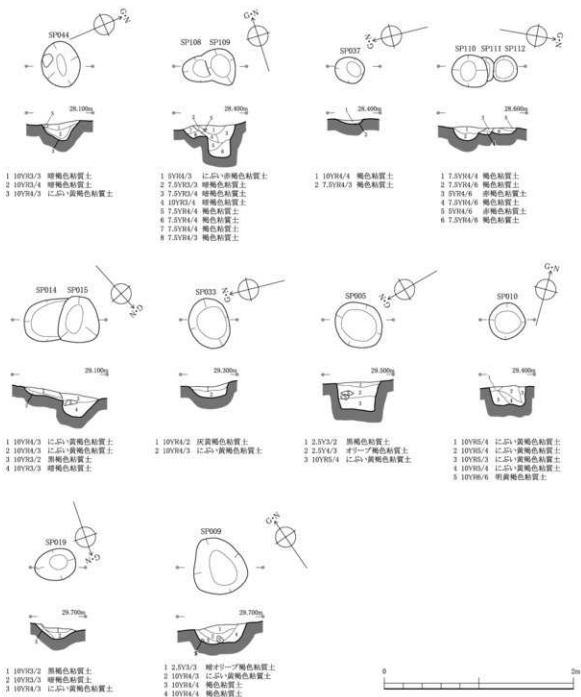
第53図 E地区土層図1 (縮尺1/500)



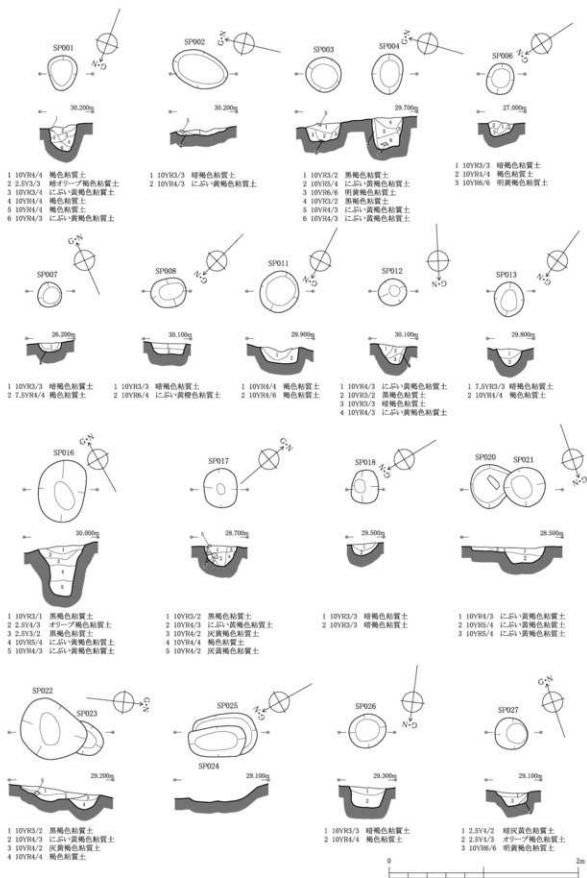
第54図 E地区土層図2 (縮尺1/500)



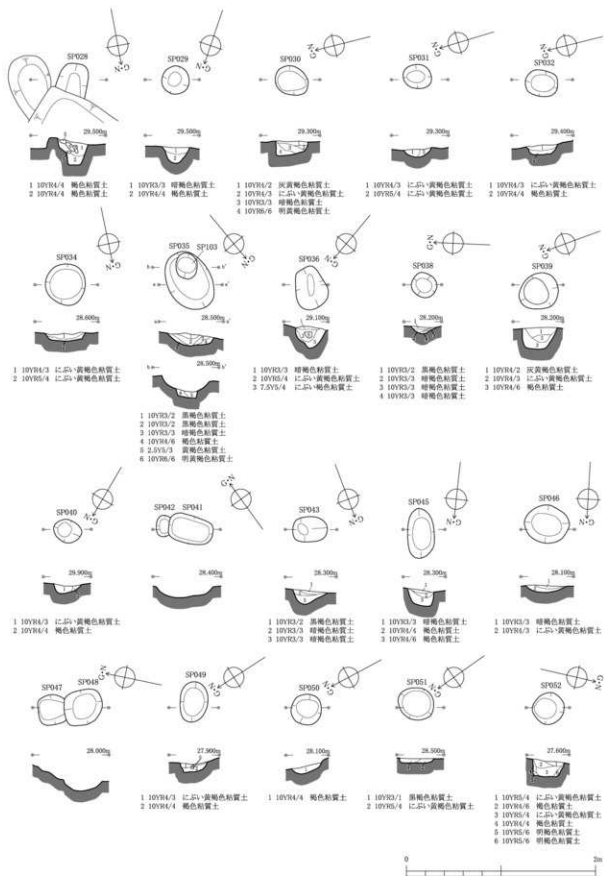
第55図 E地区掘立柱建物実測図(縮尺1/60)



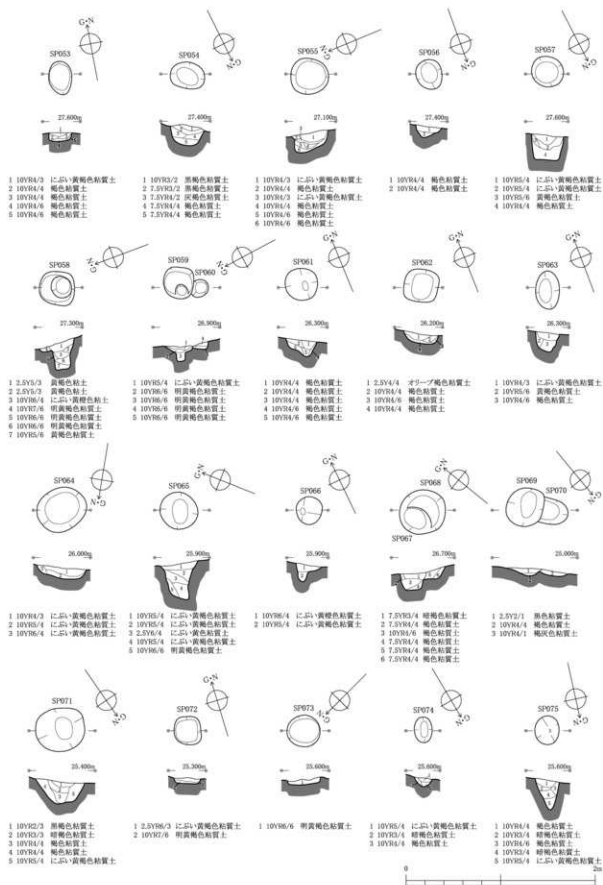
第56図 E地区柱穴実測図1 (縮尺1/40)



第57図 E地区柱穴実測図2 (縮尺1/40)

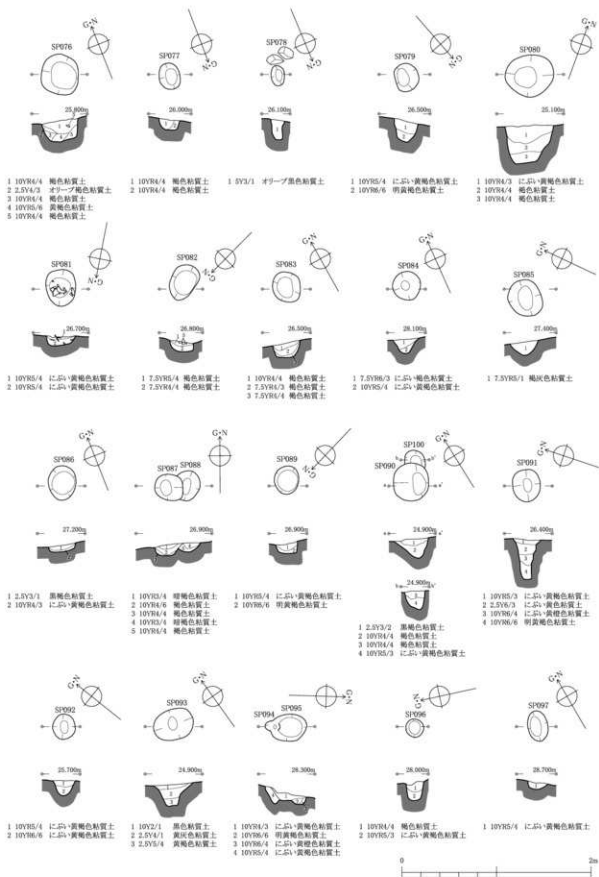


第58圖 E地区柱穴実測図3 (縮尺1/40)

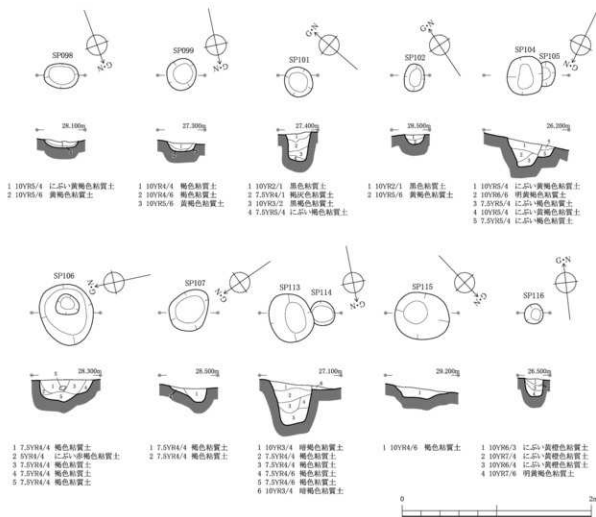


第59図 E地区柱穴実測図4(縮尺1/40)

第6節 E地区



第60図 E地区柱穴実測図5 (縮尺1/40)



第61図 E地区柱穴実測図6 (縮尺1/40)

3) 土器集中区

調査区の中央部のJ4・J5・K4・K5区を中心に遺物が出土するが、特に2地点において土器が集中して出土した箇所がある。いずれも、土器が一括廃棄されたものと考えられる。

土器集中区1 (第62図)

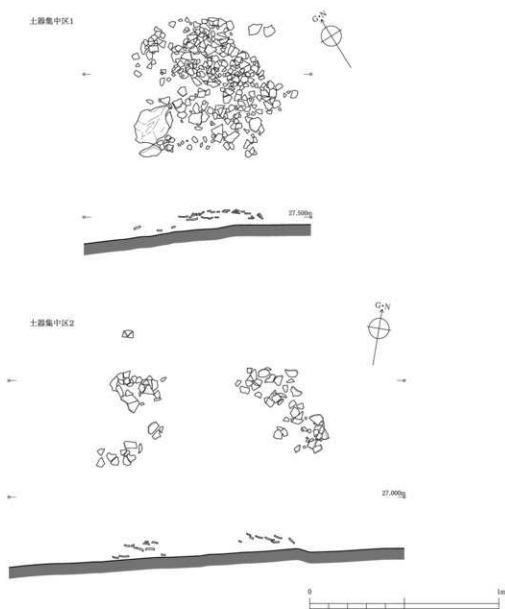
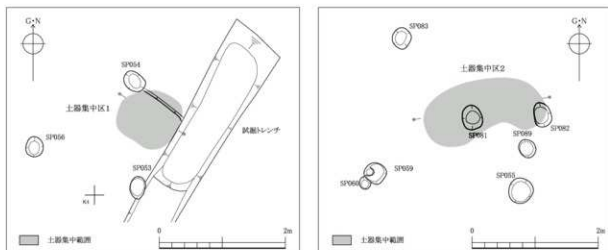
J5区において検出した。径約80cmの範囲に製塩土器に酷似した土師質土器片が、多数折り重なるようにして出土した。しかし、多くの破片が出土するものの接合可能なものは少ない。

土器集中区2 (第62図)

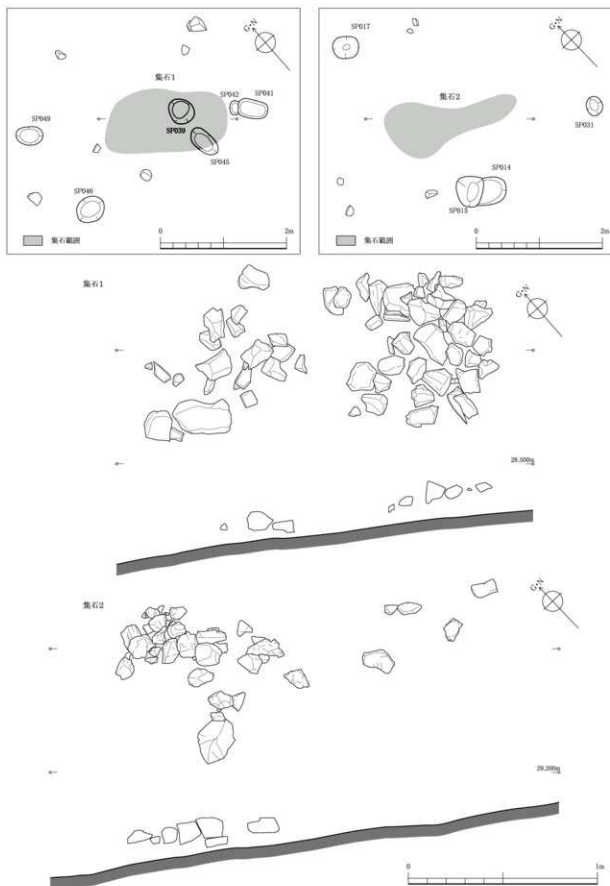
J4区において検出した。長さ約120cm、幅50~70cmにわたる範囲に製塩土器に酷似した土師質土器片が、二つのまとまりを持って出土した。土器集中区1に隣接することから、土器集中区1の一部である可能性もある。この場合、土器集中区2は土器集中区1より流出した土器群と想定される。

4) 集石

拳大の礫が集中する箇所を、2地点で検出した。集石の性格は不明であり、礫自体も自然の角礫で加工痕は認められなかった。自然の営為によって形成された可能性もあるが、遺構として報告しておく。



第62図 E地区土器集中区検出位置図および実測図（縮尺上段1/60、下段1/20）



第63図 E地区集石検出位置図および実測図(縮尺上段1/60、下段1/20)

集石 1 (第63図)

K5区において検出した。長さ約185cm、幅約93cmの範囲に角礫が集中する。角礫の大きさは、4～31cmをはかる。角礫には、被熱の痕跡は認められなかった。

集石 2 (第63図)

K5・K6区において検出した。長さ約202cm、幅約98cmの範囲に角礫が集中する。角礫の大きさは、2～26cmをはかる。角礫には、被熱の痕跡は認められなかった。

3 遺物**1) 製塩土器 (第64・65図)**

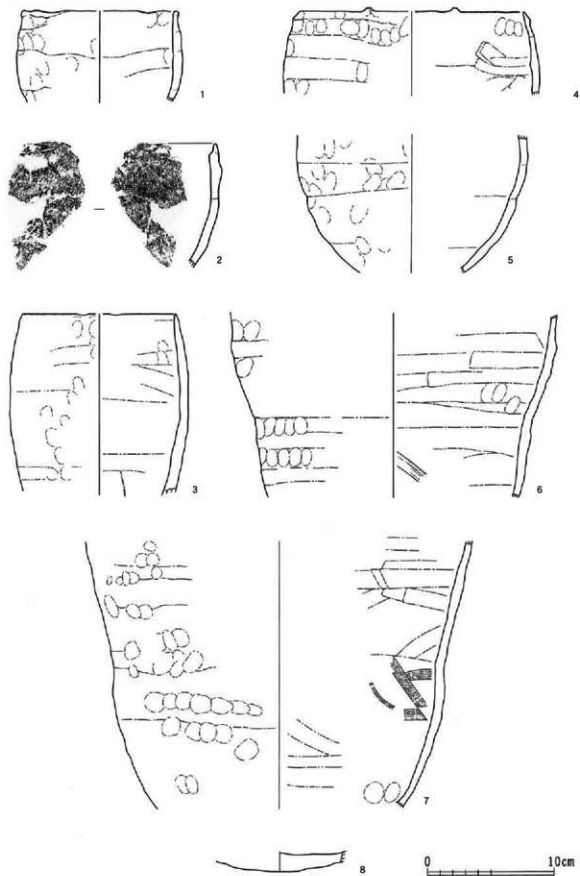
E地区では、土器集中区1・2を中心とした狭い範囲において、製塩土器に酷似した土師質土器がまとまって出土している。調整技法等から若狭湾沿岸で出土する製塩土器に酷似しているが、製塩炉が検出されていない上に土器自体にも煎熬に伴う二次被熱の痕跡が希薄である。よって、製塩に伴う煎熬に用いた土器を製塩土器として規定するならば、E地区出土の土師質土器は製塩土器とは言いがたいだろう。しかし、調整技法等の酷似から、製塩土器に使用するために成形された土器である可能性が極めて高いため、あえて本書では以下においてこの種の土師質土器を製塩土器と呼称していきたい。

出土した製塩土器はいずれも細片であるため、器形が完全に把握できる資料は極めて少ない。少ない資料ながらも極力図化に努め、器形が把握できるものは図上にて器形を復元している。ただし、出土した製塩土器は不整形に形作られているため歪みが著しく、復元した法量および器形については十分な精度を有しているとは言いがたい。よって、観察で得た事実のみを記載する。

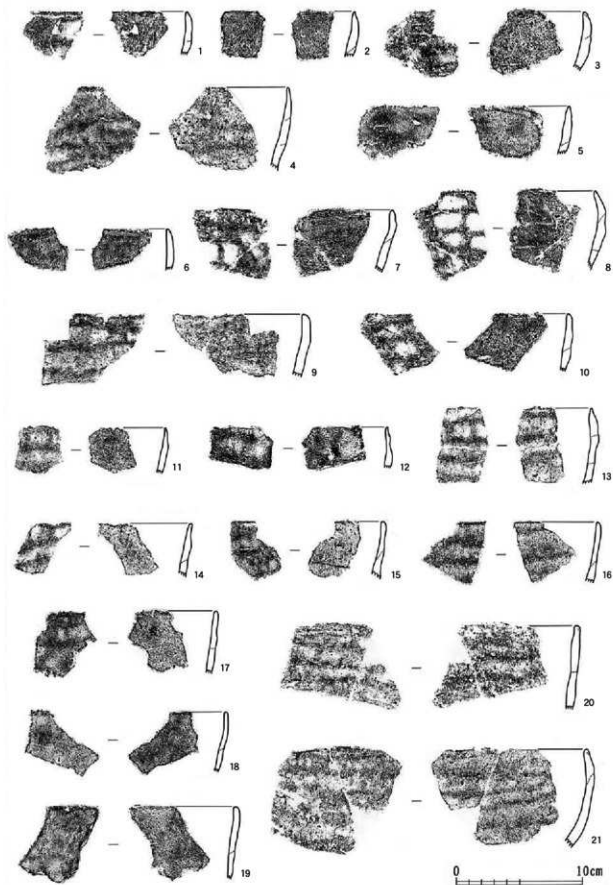
出土した製塩土器は、遺存している部位から復元するならば、碗タイプのもので深鉢タイプのもので大きく分けられる(第64図)。碗タイプは第64図1であり、直立気味の口縁部と丸味を帯びた体部を有する。底部については明らかではないが、恐らく丸底になるものと推定される。細片ではあるが、第64図2も碗タイプの可能性がある資料である。深鉢タイプは、法量から判断して大小の2種が存在する。第64図3～5が、小型のものであろう。全体の器形が把握できる資料が少ないため明確ではないが、体部は砲弾形を呈する。小型の深鉢タイプでは、遺存している体部下半の形状から緩やかな丸底であった可能性がある。第64図6・7が大型の深鉢タイプであり、体部の中央が若干くびれる。底部の形状については不明である。なお、第64図8は湾曲の少ない器形のため、底部片と考えられる資料である。底部片であるならば、器壁の厚さから判断して大型の深鉢タイプになる可能性がある。

碗タイプおよび深鉢タイプともに粘土紐を積み上げて成形し、体部外面にはナデ調整を施すが、輪積み痕および指頭圧痕を残す。一方、内面は輪積み痕を残さないように丁寧なナデ調整を施す。また、積み上げた粘土紐の端部を指先で摘み出しながら口縁部を成形するため、口縁端部は不規則な波状口縁のように凹凸を持つ。これを整えるため、第64図1のように飛び出した口縁端部の一部を外側に折り返して口縁端部を仕上げる。第64図4は、成形時に飛び出した口縁端部の一部が処理されないまま、小突起状に残された例である。

第65図1～21は、製塩土器の口縁部である。図示したように口縁端部の形状や器壁の厚さ等において差異が認められる。しかし、同一個体であっても口縁端部の形状および器形の傾き、更には器壁の厚さが計測部位によって大きく異なっている。均一かつ丁寧に成形するという意識が低いためであろうか。前述したように、口縁端部においては、指先で形を整えた箇所は断面が尖頭状となるが、それがあまりお



第64図 E地区出土遺物実測図1 (縮尺1/3)



第65图 E地区出土遗物实测图2(缩尺1/3)

よばない箇所は断面が方形を呈する。体部においても、成形時の力加減によって器壁の厚みが均一ではない例も存在する。このため、口縁部のみの資料から、器形や器壁の厚さを基に出土資料を分類することは困難である。色調については、灰白色を呈する資料が多い。

以上、E地区から出土した製塩土器は、その特徴から判断すると若狭地方の製塩土器である浜瀬ⅡB式新段階に相当し、7世紀後半に位置付けられるものと考えられる。

2) 須恵器 (第66図)

第66図1～4は、須恵器の杯である。いずれも細片であり、全体の器形を把握できる資料は少なく、図上にて復元を行った。1は杯の口縁部であり、丸味を帯びた体部から緩やかに外反しながら口縁部にいたる。2は無台杯の底部である。3・4は有台杯の底部であり、低い高台が付く。3・4は同一個体である可能性が高い。

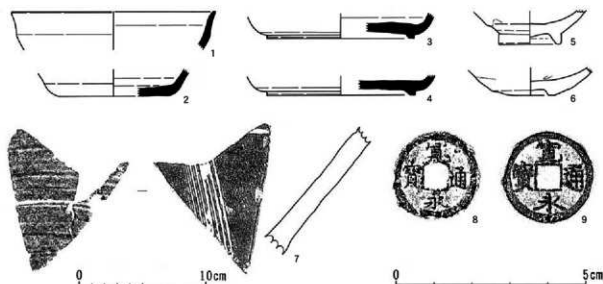
これらの須恵器は表土および遺物包含層から出土しているが、製塩土器とは出土地点が異なり、共存する資料とは言いがたい。いずれも9世紀代に位置づけられよう。

3) 中・近世陶器 (第66図)

第66図5は、瀬戸・美濃焼鉄釉碗の底部である。高台は付け高台で、回転ケズリ調整で成形している。天目茶碗であろうか、時期は判然としない。第66図6は、唐津焼皿の底部である。底部は碁笥底を呈し、底部内面には胎土目を残す。16世紀末から17世紀初頭に位置付けられよう。第66図7は、越前焼掃鉢である。口縁部下内面に沈線を巡らし、一単位8条の掃目を引く。木村編年のV-1期に属すると考えられ、15世紀後半に位置付けられよう⁽⁴⁾。いずれも、表土からの出土である。

4) 銭貨 (第66図)

第66図8・9は、寛永通寶である。E地区では表土より1点、調査区近傍にて表探で4点、計5点の銭貨を得ている。この内の2点は錆がひどく、1点は銭文が判読できない。残りの4点はいずれも寛永通寶であり、背面は無文である。比較的状态が良好な2点の拓本を、図示しておく。



第66図 E地区出土遺物実測図3 (1～7:縮尺1/3、8・9:縮尺1/1)

第7節 まとめ

1 稲葉山城跡の本城について

今回の発掘調査を実施した箇所は、稲葉山城跡の最北端部分である。稲葉山城跡の本体（以下、本城と記す）は、C地区の中心となる平坦面C1から直線距離で400m程南側に行った山頂部に展開する。

稲葉山城跡の本城は、飯盛山から北東へのびた山嶺の先端部に位置し、上加斗と法海の境をなす海拔142mの山頂部に主郭を配している。主郭は南西から北東に向かう尾根頂部に築かれ、地形に沿うように北東郭と南西郭の二郭より構成される⁽⁷⁾。北東郭は尾根頂部の形状に合わせて瓢箪形となり、北東端と南東端には槽台と考えられる方形の高所部が設けられる。北東郭の北側は大きく落ち込む谷地形を呈し、上加斗から法海へと連なる旧道がはしる。この旧道に面して、北東郭下に畝状堅堀を配置する⁽⁸⁾。畝状堅堀は、北東郭の旧道に面した北東側から北西側にかけて設けられ、総数は21条を確認する。北東郭北西側の一段低い箇所には小規模な郭群が設けられ、その下には畝状堅堀の西端を成す長大な堅堀が3条設けられている。

北東郭から南西郭の間は鞍部状に一段落ち込み、この部分に二郭を分かつ堀切を設ける。南西郭は不整な楕円形を呈し、北西側および南西側に土塁を設ける。更に、南西側の土塁下には堀切を設けている。この堀切から以南の尾根上では山城遺構が確認できないため、この堀切が本城の南西側の城域を区画するものであろう。南西郭を挟む形で設けられた2条の堀切は尾根を断ち切る形で設けるが、その両端は斜面を下り堅堀となっている。また、南西郭の北西側には畝状堅堀を8条設けており、北東郭下の畝状堅堀と呼応する形で東端の堅堀は長大なものとなっている。

北東郭西側は谷部となっており、この谷部内に登城用の大手道が存在したと考えられている⁽⁹⁾。この谷部を挟む形で、主郭下に畝状堅堀が設けられているのである。

北東郭から南側に入る尾根上にも、不明瞭ながら小規模な郭群と堅堀が設けられており、南側への備えを行っている。

主郭や堀切等の遺構の配置状況から推察すると、稲葉館が所在したと伝えられる北西側の谷部に向けての強い防衛意識が見て取れる。これらの遺構の配置状況については、西側より襲来する本郷氏への備えであることが、容易に読み取ることができる。ただし、全ての遺構が同時期のものであるとは限らない。築城から落城まで40年もの期間があることから、幾度かの改修が行われた可能性が高い。特に、畝状堅堀は永禄期から天正期（1558～1592）に発達したものであると考えられている⁽¹⁰⁾。このことから、稲葉山城跡本城の畝状堅堀も、永禄期以降に整備されたものであろうと推定されている⁽¹¹⁾。

なお、発掘調査時に現地踏査を行った際に、北東郭下北側斜面の下半部、旧道より若干北東郭側に斜面を登った地点において越前焼の甕もしくは蓋の胴部片を2点採集しており、いずれも16世紀代に属するものと考えられる。稲葉山城跡に伴う遺物と考えられる。

城跡のある尾根の西側山麓一帯には「稲葉」という小字があり、この付近に伊崎氏の館が存在したと伝えられている。現在の稲葉観音堂背後の谷部、もしくは前述した主郭下旧道の上加斗側の谷部が候補地として挙げられよう。このため、幾度か館跡の候補地とされる谷部内の踏査を試みた。稲葉観音堂背後の谷部は北東郭西側の谷部と一連のものであり、この谷部内を通して主郭へと登城したと推定されている。現在は竹林として利用されているが、谷部の中程には一石五輪塔および石仏が散在する箇所があり、中世から近世にかけて墓地として利用されていたようである。一方、旧道の上加斗側の谷部は山林として利用されており、後世の改変を受けているようである。踏査の結果、二つの谷部では現状におい

て館跡の痕跡を見出すことはできなかった。

2 A～D地区について

今回発掘調査を実施した箇所は、前述のように本城よりかなり離れた尾根上に展開する遺構群である。A～C地区の三つの尾根について発掘調査を実施したが、山城遺構が明瞭に検出されたのはC地区のみである。A地区およびB地区においては、不整形な平坦面を尾根上にて検出したが掘削や整地の痕跡は確認し得なかった。土層の堆積状況から、これらの平坦面の幾つかは古い時期の倒木によって形成された平坦面である可能性もある。

C地区では、尾根頂部の最高所に平坦面C1～C5を設け、この平坦面を画するようにSD01～04を設ける。C地区では平坦面C1～C5を中心に山城遺構が構築されており、稲葉山城跡の一部を成す遺構群であると考えられる。しかしながら、C地区で検出した遺構と、本城およびD地区にて確認した遺構とを比較すると、堀切の形態において相違が認められる。

本城の堀切およびD地区で確認したSD05は、尾根を断ち切るように構築されており、更に堀切の両端は尾根の斜面を長く下り、堅堀となっている。翻ってC地区のSD01～04の形状は箱堀であり、その両端は堅堀とはならず尾根上にとどまる。この形態差は構築時期の相違であろうか。更に、本城には敵状堅堀が構築されており、このことから永祿期以降に本城が再整備された可能性があることは前述した。第2章で述べたように天文9年(1540)に稲葉山城跡が築城されたと伝えられ、それから40年後の天正8年(1580)に落城したと伝えられている。築城から落城まで40年もの歳月があり、この間に幾度かの城域の改修・再整備が行われた可能性が高く、これにより曲輪や堀切の改修・付加等が行われたものと容易に想像できる。

しかし、C地区の山城遺構が、稲葉山城跡の本城が構築された当初より存在したのか、或いは長期にわたる整備の過程において新たに付加された施設なのかは定かではない。C地区より出土した遺物は僅かであり、山城遺構の帰属年代を把握するには心もとない資料である。それでも、16世紀代に属する可能性のある資料があり、この点を踏まえると検出した山城遺構が稲葉山城跡の存続期間の前半頃には存在した可能性がある。

次に、C地区の性格について考えてみたい。A・B地区に明確な山城遺構が検出されず、かつD地区の北端にA地区と画するようにSD05や土塁であるSA01を設けている。このことから、稲葉山城跡の本城の最前線の防御ラインとして、D地区の山城遺構群が構築されたことが読み取れる。一方のC地区は、A・B地区に連なる尾根上に規模の大きなSD04を設けている。このことは、南西側への防御意識が決して低くないことを示している。更に、A地区から二股に尾根が分かれる箇所(A・B・C地区が交わる地点)には山城遺構を設けていないことも考慮するならば、C地区が稲葉山城跡の本城からある種独立して機能する存在であった可能性を示しているのではないだろうか。D地区からA地区を通りC地区までの尾根筋を一続きの城域として有機的に結びつけるには、A地区に明確な山城遺構の存在が不可欠と考えられるのである。実際にはA・B地区には平坦面は存在するが、明確な山城遺構とは言いがたいものばかりである。A・B地区は一時的に利用されたかもしれないが、本来の城域ではなかったと想定するならば、SD04およびSD05の構築の意味が自ずと読み取れるであろう。

更に稲葉山城跡の城域をC地区までとするならば、広大な城域を有することとなり、その維持・管理は容易なものではないであろう。このことから、稲葉山城跡の主要な城域はSD05によって画された

D地区までであり、C地区は稲葉山城跡の主要な城域から独立して構築された遺構群であると考えられないであろうか。C地区が稲葉山城跡の付随施設であるならば、まさに大森氏が指摘した様に、「見張り台」もしくは「出城」的機能を有していた施設と言えるであろう⁽¹⁾。

C地区の頂部に展開する平坦面C1～C3からの眺望は非常に良く、北側には小浜湾に浮かぶ蒼島が、西側には若狭富士と呼ばれる青葉山が望める。更に南側を振り返れば、稲葉山城跡の本城が見通せる。まさに、見張り台と呼ぶにふさわしいと思われる。

今後、稲葉山城跡において本城の調査・研究が深化すれば、C地区に構築された遺構群の性格が明らかとなるであろう。

3 E地区について

E地区では、狭小な谷部内において遺構を検出した。しかし、柱穴以外に明確な遺構は検出し得ず、かつ現地での調査途中においても検出した遺構の性格を把握することが叶わなかった。柱穴が存在する以上、何らかの構築物が存在したことは明らかであり、調査終了後の検討段階において掘立柱建物2棟の復元を試みている。今後、改めて検出した遺構について再検討を加える必要があるであろう。更に、土器が局所的に出土する等、遺物の出土状況においても特異な様相を有している。遺構や遺物からE地区の性格を推し量ることは、現時点では困難と言えよう。

なお、E地区で出土した土器の大部分は土師質の土器であり、器形や器面の調整技法から判断して製塩土器として利用される土器に酷似する。ただし、出土した土器自体には煎熬に伴う二次被熱の痕跡が希薄であるため、厳密には煎熬のために使用された土器ではないと考えられる。つまり、製塩用に作られた土器ではあるが、製塩のためには使用されなかった土器である可能性がある。しかしながら、本書では特徴の類似性を鑑みて、敢えてこの土師質土器を製塩土器として扱った。

E地区から出土した製塩土器は、器形において碗タイプと深鉢タイプが存在し、更に深鉢タイプは法量差から2種に分けられそうである。そして、器形や調整技法等から判断すると若狭地方の製塩土器である浜瀬ⅡB式新段階の資料であると考えられる。製塩土器の編年に照らし合わせるならば、出土した土師質土器は7世紀後半に位置付けられるものと考えられる⁽²⁾。

更に、同時期の製塩土器が、E地区から1.5km程離れた岡津製塩遺跡にて出土している。岡津製塩遺跡から出土した製塩土器を実見すると、E地区から出土した製塩土器が岡津製塩遺跡出土資料に極めて近い特徴を有している印象を受けた⁽³⁾。地理的にも近い位置関係にあることから、E地区の遺構・遺物は、岡津製塩遺跡に係わった集団が関与している可能性があるものと考えられる。

若狭地方の内陸部において、製塩土器の出土が僅かではあるが報告されており、今後の研究の進展によりE地区の性格が明らかになるものと期待したい。

註

1 稲葉山城跡の呼称については、『若狭郡志』では「本所村城址」と記載され、福井県の中世山城をまとめた下記の文献a・bでは「稲葉山城(跡)」と記載されている。「本所村城址」は、城跡が所在する上加斗の中世の村名「本所村」に由来し、単に本所村に所在する城址という意味合いで使用されているようである。一方、「稲葉山城(跡)」は下記文献bに掲載された伊崎氏の家系図に「稲葉城」との記載が見られ、恐らく伊崎氏が館を構えたことされる箇所の字名「稲葉」に由来するものと考えられる。

一方、嶺南地方の山城の調査を精力的に行っていた故大森宏氏が後年著した下記の文献c・dでは「加斗城」と記載してい

る。大森氏がすでに鬼籍に入っておられるため定かではないが、築城したのが在地の伊崎氏ではなく、武藤氏の一族であったことから、伊崎氏ゆかりの名称を冠することをさせて「加斗城」と呼称したのかもしれない。或いは、小浜市太良庄にも同名の「福葉山城跡」があり、これと混同をさけるためにあえてと呼び分けた可能性もある。

- a 福井県立朝倉氏遺跡資料館編 1987 『福井県の中・近世城館跡』 福井県教育委員会
- b 大森 宏ほか編 1979 『若狭の中世城館』 小浜市教育委員会
- c 大森 宏 1994 『大飯町の中世山城』『わかさ本郷 茶谷山城跡発掘調査報告書』 大飯町教育委員会
- d 大森 宏 1996 『戦国の若狭 一人と城』 大森睦子

2 前掲註1文献d

3 藤澤良祐 2002 『瀬戸・美濃大宮編年の再検討』『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

4 藤澤良祐 1991 『瀬戸古窯址群Ⅱ 一古瀬戸後期様式の編年一』『研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館

5 同様の小円礫は、おおい町石山城跡の発掘調査でも出土している。ただし、石山城跡出土の小円礫は、福葉山城跡出土の小円礫に比べやや大きくかつ形が比較的整った円形を呈している。

赤澤徳明編 2005 『石山城跡』福井県埋蔵文化財調査報告第83集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

6 木村孝一郎 2008 『越前焼の編年の研究ノート』『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会

7 福葉山城跡の本城については、大森宏氏の詳細な研究がある。本章においても、氏の研究に多くを依っている。福葉山城跡の本城の縄張りについては、前掲註1文献dを参照されたい。

8 この畝状堅堀は、大森宏氏作成の縄張り図(前掲註1文献d)には記載されていないが、平成16年(2004)3月21日に福井県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財調査員(現主査)藤本眞友美が現地踏査を行い、その存在を確認している。また、平成17年(2005)6月11日に行った城郭談話会(代表山上雅弘氏)の現地見学会でも、筆者をはじめとする見学会参加者がこれを追認した。

9 小浜市教育委員会下中隆弘氏の御教示による。

10 旧若狭国内で畝状堅堀を持つ山城については、若狭町安賀里城跡・熊川城跡、小浜市後瀬山城跡・小村城跡、おおい町達城跡、高浜町和田城跡が挙げられると大森宏氏が前掲註1文献dにて指摘している。嶺南地方の中世山城を調査した大森宏氏によれば、これらの畝状堅堀も永禄期以降に整備されたものと推定しているが、文献資料等が乏しいため導入の時期については明確ではない。

近年発掘調査が実施された、おおい町石山城跡(前掲註5文献)においても畝状堅堀を検出したが、その導入の時期を明らかにすることはできなかった。

一方、旧越前国内での畝状堅堀の導入については、青木豊昭氏の研究によれば越前国守護の朝倉氏が元亀元年(1570)以降に織田信長の侵攻に対処するため、朝倉氏に依る山城を導入していったと推定している。

- a 青木豊昭 1997 『戦国時代越前における畝堀について 一その消長と意義一』『発掘調査開始30周年・特別史跡指定25周年記念特別展 眠りからさめた戦国の城下町』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- b 青木豊昭 2003 『朝倉義景時代の山城 一その縄張りの特徴と意義』『朝倉義景のすべて』 新人物往來社

11 前掲註1文献c

12 前掲註1文献d

13 近年、若狭地方の製塩土器編年研究において、浜瀬ⅡB式から後続する船岡式かけての様相が毎編年代も含めてやや流動的な状況になっている。浜瀬ⅡB式と船岡式との間をつなぐ新たな型式の設定や、船岡式の上限年代が過ぎる可能性が論じられている。E地区出土資料からこれらの問題点について積極的に論及する力量が筆者にはないため、従来の編年表を基に毎編

年代を求めている。浜欄ⅡB式から船岡式への編年上の研究については、下記の文献を参照されたい。

- a 小浜市教育委員会文化課編 1980 『岡津製塩遺跡 ー第1次・第2次発掘調査報告ー』 小浜市教育委員会
- b 入江文敏・品中清彦編 1986 『大島寺内川遺跡』大飯町文化財調査報告第6集 大飯町教育委員会
- c 福井県立若狭歴史民俗資料館編 1988 『特別展 塩 ー生産の歴史三千年ー』
- d 大森 宏・森川昌和 1994「福井県（若狭）」『日本土器製塩研究』 青木書店
- e 入江文敏 2006 『若狭地方の官衙遺跡と土器製塩』『興道寺廃寺と興道寺遺跡 ～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』
美浜町歴史シンポジウム記録集3 美浜町教育委員会

14 小浜市教育委員会の御厚意で、岡津製塩遺跡出土遺物の一部を実見させて頂いた。

第4章 黒駒遺跡の調査

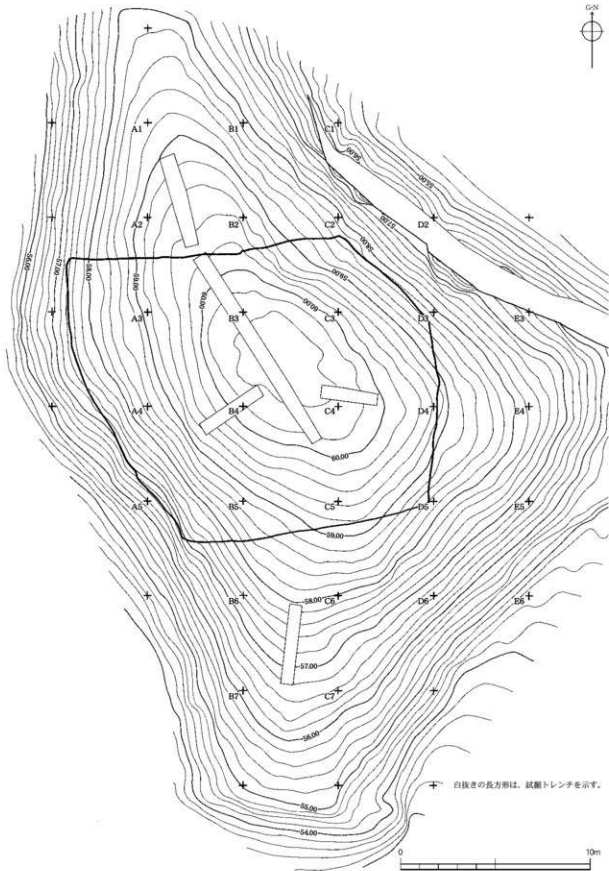
第1節 調査の経過

黒駒遺跡の発掘調査は、平成17年(2005)4月18日に着手した。調査区は調査前までは山林であり、事業予定地内の立木伐採後、調査を開始した。調査はまず、調査区および周辺の清掃作業を実施し、4月21日に現況の写真撮影を行った。また、電子平板による現況測量とグリッド杭の設定にも着手した。グリッド杭は、国土平面直角座標第VI系に揃えるように5mピッチで配置し、東西にA～E列、南北に1～7列を配した(第67図)。

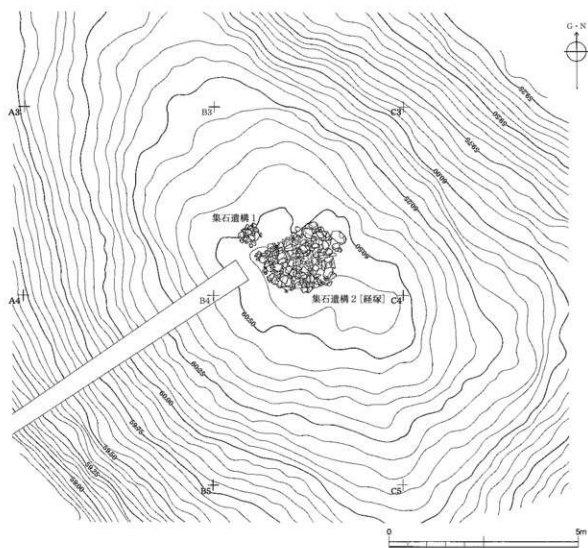
表土掘削は5月9日より開始した。試掘調査で一部が検出された集石遺構については、埋め戻されてきた試掘トレンチを再度掘削することによって予め確認し、その全容の把握を優先的に行った。集石遺構は近接して大小2基あり、径約0.6mの小さなものを「集石遺構1」、径約2mの大きなものを「集石遺構2」と便宜上呼称した。両遺構とも表土直下の地山面で全体を検出したが、周囲の表土中にも多数の礫が含まれており、もとはこれらの集石遺構を構成したものと考えられた。調査区内において、ほかの遺構の検出はなかった。なお、集石遺構2を覆うように大きな木株が根を張っており、その除去作業にかなりの時間と労力を費やしたことを付記しておく。5月27日に集石遺構の写真撮影を実施し、5月30日より平面図の作成に取り掛かった。また、6月3日には調査区全体の航空写真測量を実施した。

6月6日に両集石遺構の内部の調査に着手した。集石遺構1については、集石の下に浅い土坑があることが判明したが、遺物の出土はなく、性格を明らかにできないまま調査を終了した。集石遺構2については、まず長軸を境とした北西側を半截することとした。この時点ではプランは認識できなかったが、作業の過程で土坑に多数の石がぎっしりと落ち込んでいる様子がすぐに明らかとなり、石を除去しながら掘方の検出を進めた。6月13日、掘方下部の北西壁際で銅製経筒の蓋上面を検出した。更に、周囲を精査したところ、四方が石組によって囲われている状況を確認した。そこで、この石組を構成するとみられる石を残して半截を続行したが、土坑底面に至る前に掘り下げが困難となったため、記録をとった後、残り半分の掘削に着手した。掘削を進めると、深さ約50～60cmに石をほとんど含まない土層が認められ、その下で再度集石を検出した。この下部の集石は上端がほぼ揃っており、また、経筒を囲む石組の構築面とほぼ同レベルとみられたことから、土坑底面に敷かれたものと考え、6月17日・20日、この段階での図面作成・写真撮影を実施した。その後、石組の背後を断ち割り、それが土坑壁面に設けられた横穴に構築されていることを確認した。更に集石を除去し、石組の構築箇所を除く土坑底面を検出した。これにより、石組全体がほぼ露出することとなった。記録を終えた後、6月23日に石組の解体と経筒の検出に着手した。経筒は腐食が著しく、取り上げに際して形状を保てないことが危惧された。しかし、強化剤を塗布しつつの慎重な作業の結果、翌24日、無事取り上げに成功した。続いて石組を完全に解体し、土坑の掘方全体の検出を行った。必要な図面の作成を終え、6月28日、調査区の全景の写真撮影を行い、現地調査を終了した。

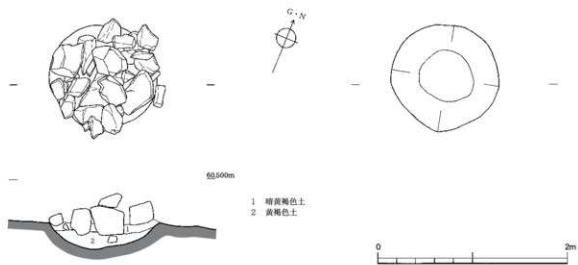
なお、銅製経筒については、検出時に筒身の破損箇所から経軸らしき木質が視認されたが、筒身内には土砂も堆積しており、明確な判断はできなかった。更に、経筒の遺存状態が非常に悪かったことから、取り上げ後もしばらくは十分な精査が行えなかった。その後、平成18年度に(株)京都科学に委託した保存処理の過程において、経筒のみならず経巻の一部が遺存していることを確認した。



第67図 調査前状況図 (縮尺1/200)



第68図 遺構配置図 (縮尺1/100)



第69図 集石遺構1実測図 (縮尺1/20)

第2節 遺構と遺物

本遺跡が立地する尾根は独立丘陵状を呈し、その頂部で集石遺構を2基検出した。2基は、ほぼ接するような位置関係にある（第68図）。その内の1基は埋経遺構、いわゆる経塚であることが判明した。以下、遺構ごとにその構造と出土遺物について解説する。

1) 集石遺構1（第69図）

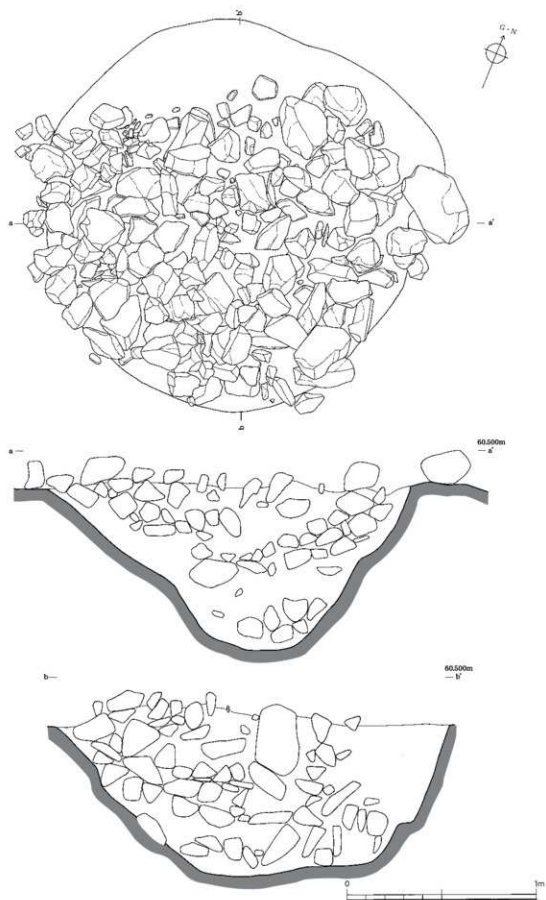
遺構 径約0.6mの略円形に礫が集積されたものである。礫は拳大からやや大きい程度の亜角礫が主体をなす。石材はチャート質のものが多く、下部に深さ約0.15mの楕円状を呈する浅い土坑を有している。土壌の水洗も実施したが、遺物の出土はなかった。

2) 集石遺構2〔経塚〕（第70～74図）

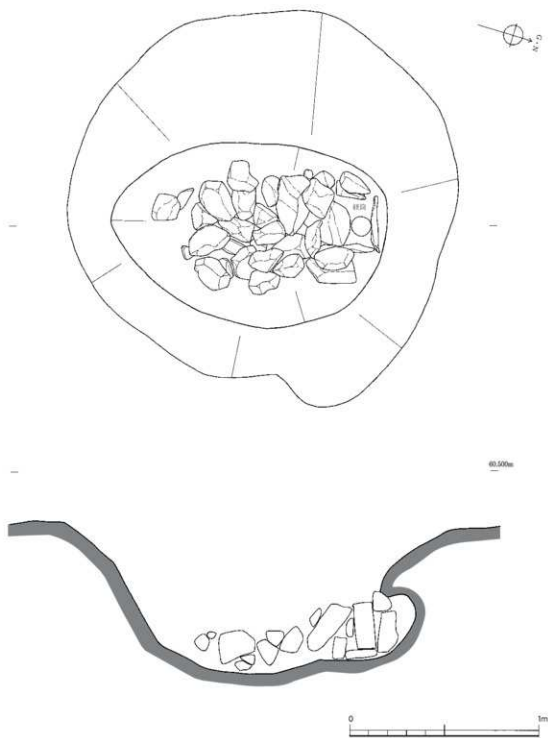
遺構 中心となる土坑（以下、「主土坑」）、主土坑壁面の横穴とそこに構築された小石室様の石組、主土坑底面付近の集石（以下、「下部集石」）、主土坑上半を埋める集石（以下、「上部集石」）から構成される。以下、検出順に説明する。上部集石は主に拳大から人頭大のチャート質の亜角礫からなる。検出面において長軸約2m、短軸約1.5mの不整楕円形を呈する（第70図）。木株に覆われていたことから、根擾乱による変形が推測されるが、西～南側はもとの平面形を比較的保っていると考えられ、なめらかな弧状をなす。主土坑は上面で径約2mの不整円形を呈し、深さ約0.9mをはかる（第70～72図）。ただし、北西側の掘方については木根の影響等から不安を醸しており、上部集石の広がりや埋没状況、横穴の存在を考慮すると、主土坑本来の上面形は、北西～南東方向が扁平な楕円形であった可能性が高い。全体的に下半が急傾斜に掘り込まれており、上部集石が埋めるのは、その傾斜変換線より上位であることがおおそ認められる。上部集石の下には小礫を若干含む程度の厚さ0.1～0.15mをはかる土層があり、検出面から深さ約0.5mで下部集石に至る。下部集石は20個程の亜角礫からなる（第71図）。石材は大小のばらつきが大きい、上端の高さがほぼ揃っていることから、意識的に配されたものと考えられる。下部集石と土坑底面との間には厚さ0.1m以下の薄い土層がみられ、そこから刀子等の遺物が若干出土した。主土坑壁面の北西側下部には、主土坑底面よりやや高い位置に横穴が穿たれ、経筒を保護するための石組が構築されている（第72・73図）。石組は横穴の底面に扁平な円礫を据え、その四方に板状の角礫を立てて囲うもので、内法で幅約0.3m、奥行き約0.2m、高さ約0.3mをはかる。奥壁は幅広い板石の上に角柱状の石材を横位に積んでいる。奥壁背後には空隙があったとみられ、しまりのない土砂が堆積していた。両側壁は各一石が横穴壁面に貼り付けるように設置されており、左側壁は裏込め石を持つ。開口部には角柱状の石材が横位に置かれ、更に開口部全体を塞ぐように大型の石材が立てかけられていた。なお、下部集石は、この閉塞石との位置関係から石組構築の後に形成されたことがわかる。石組の底石である扁平な円礫の上に銅製経筒が直接安置され、石組との隙間には小振りの礫が充填されていた。天井石については、調査時、大振りの板石を取り除いた後に経筒を検出したため、それが天井石であった可能性を考えた。しかし、その板石を除去してから経筒および石組を検出するまでに若干の掘削を要したこと、石組奥壁が横穴の天井に密着していたことから、現在では天井石はなかったものと考えている。板石を除去した時点では横穴の存在を認識できずに掘削を進めたが、本来は横穴の天井部が石組全体を覆っていたのであろう。復元される横穴の奥行きは約0.5mとなる。

遺物 銅製経筒1、刀子1、器種不明の鉄器片1、および覆輪の細片がある（第74図）。銅製経筒を除いて、全て下部集石の下から出土した。なお、覆輪の細片は土壌洗浄によって検出したものである。

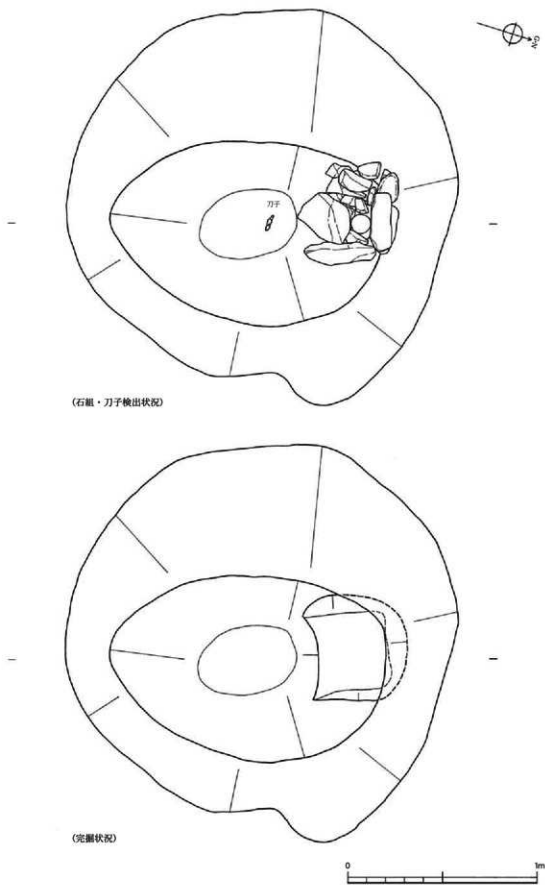
1は銅製経筒である⁽¹⁾。全体的に腐食が著しく進行しており、緑青錆で覆われた状態であった。蓋、



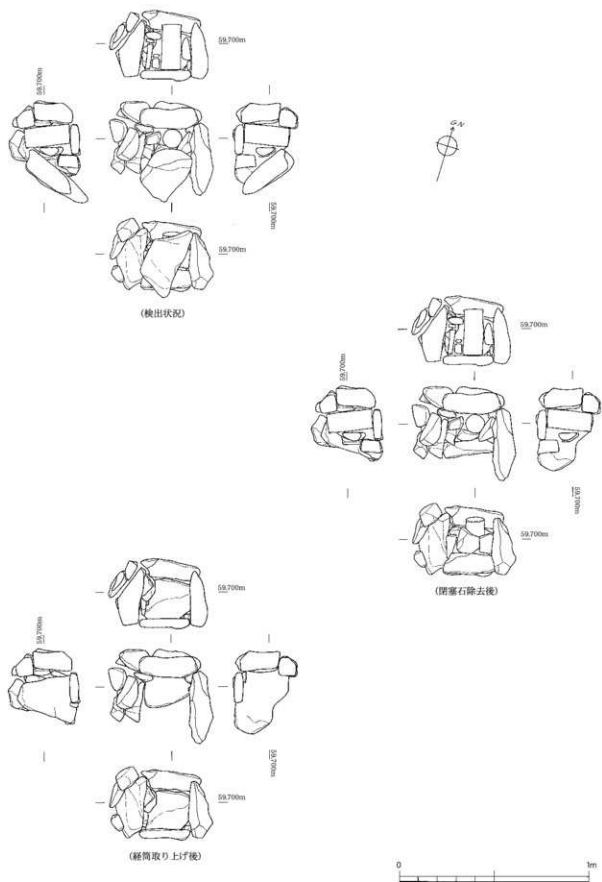
第70図 集石道構2 [経塚] 上部集石実測図 (縮尺 1/20)



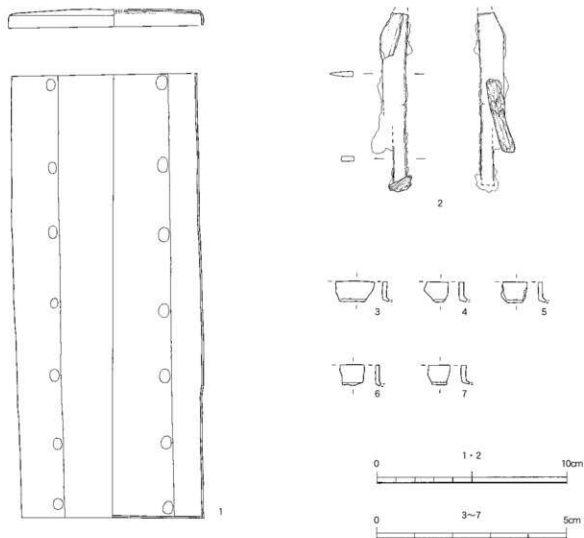
第71図 集石遺構2 [経塚] 下部集石実測図 (縮尺1/20)



第72図 集石遺構2 [経塚] 埋納部・掘方実測図(縮尺1/20)



第73図 集石遺構2〔経塚〕石組実測図(縮尺1/20)



第74図 集石遺構2〔経塚〕出土遺物実測図（1・2：縮尺1/2、3～7：縮尺1/1）

筒身、底板からなる。筒身は2枚の銅板を鉋で留めたもので、口径100mm、底径96mm、器高236mm、厚さ0.8mmをはかる。底板は筒身の下端に揃うようにはめ込まれた平底で、鉋留めの形跡はみられない⁽²⁾。蓋は被せ蓋で、口径102mm、器高10mmをはかる。僅かに甲盛りを持つが、平蓋に近い印象を受ける。検出時に中央部がめくれ上るように破損したため、摘みをとばしてしまった可能性を考え、周辺をくまなく精査したが、発見できなかった。破損部の観察からは摘みがついていた形跡は認められない⁽³⁾。一方、筒身内には経巻10巻と経軸の一部が遺存していた（図版第21）。経巻は下端の27～61mmが遺存するのみであるが、紙本経の質感を良く留めている。径はいずれも約20mmをはかる。現状で赤外線による分析を行ったが、文字の痕跡は確認できなかった。経軸は束ねられた経巻の中心部に位置する一巻のもので、現存長83mmをはかる。

2は刀子である。切先を欠損しており、残存長95mmをはかる。刀身の片面と茎先に木質の付着が認められる。柄材の一部であろうか。

3～7は箱の置口と考えられる覆輪の細片である⁽⁴⁾。本来の断面形はU字状をなすと考えられるが、原形を留める破片は皆無であった。図示したのは僅かに屈曲部を残すもので、いずれも端部は角頭状を呈し、側面は平坦かやや膨らむ。厚さは約1mmを測る。屈曲部には明瞭な稜を有し、厚みは1mm以下と

なる。表面は褐色で光沢があり、断面は白色を呈する。成分元素分析の結果、錫が主成分であることが判明した⁽⁴⁾。

第3節 まとめ

黒駒遺跡の調査では2基の集石遺構を検出した。その内、集石遺構1は遺物の出土もなく、性格は不明であると言わざるを得ない。ただ、経塚である集石遺構2との位置関係や用いられている石材の類似性からすれば、まったく無関係に構築されたとは考えにくく、経塚造営に関わる施設である可能性が高いと考えられる。

集石遺構2は、調査の結果、経塚であることが明らかとなった。その構造を構築順にみると次のとおりである。①土坑（主土坑）を掘削する。②主土坑下部の壁面に横穴を穿つ。③横穴に銅製経筒を安置した石組を構築する。④主土坑の底面に礫を配する（下部集石）。⑤埋土の後、主土坑上位を多数の礫で充填する（上部集石）。

①・②の特徴は、丹後・丹波・但馬といった近畿北部に多くみられる構造であり、特にその分布の中心は若狭地方の西に隣接する丹後地方にあるとされる（杉原2001）。若狭地方においては小浜市田島元山谷遺跡（御嶽編2003）に類似があり、本例と共にその分布の一端を示している。また、③についても横穴に構築される点で①・②と同様の分布傾向にあると言える。なかでも本例のように外容器を用いず直接銅製経筒を納めた事例としては、京都府私市丸山経塚（鍋田1988）や兵庫県田多地1号経塚（出石町教育委員会1985）等が挙げられ、いずれも板石を方形に組み合わせた石組を築いている。なお、若狭地方では地域的に石組を設ける傾向が強いとされるが（村上2008、村木2003）、同時に外容器を用いる例が多く、その石組の形状は、外容器の周りに不整形に礫を積み上げたものが大半である。

⑤について、経塚の上部が礫で覆われることは一般的な構造として認められよう（奈良国立博物館編1977）。一方、④の主土坑底面付近の集石は、横穴を埋納部とする構造において、主土坑の性格を考える上で注意を要する。この集石は、各石材の大きさはまちまちであるものの、上端の高さがほぼ揃っており、面を意識して配されたかと捉えられる。上部集石との間に礫をほとんど含まない土層があることも考慮すると、この段階での埋葬行為が想起される。人骨や蔵骨器等の出土はないため根拠に乏しいが、上述したような近畿北部の埋経遺構を積極的に墳墓と関連付ける見解もあり（杉原1987・1989・2001）、一つの可能性として提示しておきたい。

遺物については、まず経容器として銅製経筒を検出した。遺存状態の悪さにもかかわらず、内部に経巻10巻が原形を一部留めていたことは貴重な成果であった。文字は確認できないものの、10という巻数は、法華経8巻に開経（無量義経）と結経（観音賢経）を加えたものである可能性が高いとされる（三宅1977）。副納品については、刀子が主土坑中央の底面付近で出土し、掘削した土坑の清浄儀礼に関連するものと理解できる。また、細片のため全容は知りえないが、箱の置口とみられる覆輪を検出したことも、多様な副納品の在り方を示すものとして重要であろう。

なお、本遺構の造営時期については、年代の指標となる遺物の出土がなく、明確にしがたい。副納品が少ないことや、近畿北部の類似する構造を持つ経塚や若狭地方の経塚の動向からすれば、大略13世紀と捉えておいて大過ないと思われる。

黒駒遺跡の立地する尾根からは飯盛の集落を一望でき、また北の眼前に若狭湾、遠く西には万葉集にも詠われた青葉山を望むことができる。このような眺望に優れた場所が経塚の造営場所として選択され

ることは各地に多々認められる。また、中世に遡る由来をもつ飯盛寺の由緒によれば、その本尊である薬師如来をもとと有した寺院が、この尾根の麓に所在したとされる⁽⁶⁾。経塚造営における勧進としての役割を担ったことが想像されよう。

註

- (財) 大阪市文化財協会伊藤幸司氏に同身片の成分元素分析を実施して頂いた。以下にその結果と所見を要約して紹介する。
 - ・主元素は銅 (Cu) で、ほかに鉛 (Pb)・砒素 (As)・銀 (Ag)、微量であるが錫 (Sn)・アンチモン (Sb) 等が含まれる。
 - ・鉛 (Pb) が比較的多く検出され、成形に際して接合剤として利用された可能性がある。
 - ・外面の測定では微量ながら金 (Au) のピークが検出された。断定はできないが鍍金の可能性もある。
- 京都国立博物館久保智康氏から、鑑付けの可能性があるとの御教示を得た。
- 久保智康氏に観察して頂き、御教示を得た。
- 久保智康氏に観察して頂き、経箱の可能性が高いとの御教示を得た。
- (財) 若狭湾エネルギー研究センター安田啓介氏に分析を依頼した。詳細については附章を参照のこと。なお、本資料については、当初、その外観から陶磁器、ガラス製品、骨といった可能性を考えた。しかし、このような予想外の結果がためため、久保智康氏に観察を依頼した経緯がある。
- 『若州管内社寺由緒記』は「往昔は当村の内田徳山椿林寺と申寺に有之、其時代人王四十四代元正天皇御宇靈龜・養老の年号也」と記しており、黒駒遺跡が位置する尾根南麓の小学今徳にあったと言われている (文化財建造物保存技術協会編1998)。また、この本尊薬師如来坐像の胎内からは、永徳元年 (1381) の年号のある願文と共に、経巻・写経・摺仏・香木・銭貨が発見されている (福井県立若狭歴史民俗資料館2003)。現飯盛寺本堂下では経石埋納塚がみつかり、納経という行為が形を変えながら受け継がれているとも言えよう。

引用・参考文献

- 出石町教育委員会 1985 『田多地古墳群・田多地経塚群』
- 杉原和雄 1987 「経塚と古墓」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 杉原和雄 1989 「経塚と墳墓」『考古学雑誌』第74巻4号 日本考古学会
- 杉原和雄 2001 「近年調査された京都府北部出土の土師製筒形容器とその遺跡について」
『京都府埋蔵文化財論集』第4集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 関 秀夫 1985 『考古学ライブラリー33 経塚』 ニューサイエンス社
- 綱田 勇 1988 「私市丸山経塚の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第28号
(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 奈良国立博物館編 1977 『経塚遺宝』 東京美術
- 福井県立若狭歴史民俗資料館 2003 『若狭路千年—水と炎と千年の名宝』
(財) 文化財建造物保存技術協会編 1998 『重要文化財 飯盛寺本堂修理工事報告書』 飯盛寺
- 御嶽貞義編 2003 『田島元山谷遺跡』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 三宅敏之 1977 「経塚の遺物」『遺跡と遺構』『新版 仏教考古学講座 第6巻 経典・経塚』 雄山閣
- 村上雅紀 2008 「福井県の埋経遺跡」『王権と武器と信仰』 同成社
- 村木二郎 1998 「近畿の経塚」『史林』81巻2号 史学研究会
- 村木二郎 2003 「東日本の経塚の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第108集 国立歴史民俗博物館

附章 黒駒遺跡から出土した覆輪の成分元素分析

第1節 分析に至る経緯

黒駒遺跡の調査では、検出した集石遺構の一つ（集石遺構2）が経塚であると判明した。その主土坑底面直上に堆積した土壌の水洗を実施したところ、表面が光沢のある褐色、断面が白色を呈する10mm角以下、厚さ1mm以下の細片を多数検出した。その一部には容器類の口縁部のような端面と屈曲がみられ、器種は不明ながら陶磁器の細片であろうと考えていた。しかし、陶磁器としてはあまりに薄い器厚や風化の様相から、ガラス製品ではないかという指摘を受け、そのいずれかを確かめるべく成分元素分析を実施することにした。

第2節 分析の方法と結果

1) 分析方法

元素分析は粒子励起X線分析（PIXE, Particle Induced X-ray Emission）法を用いて行った。この手法は、加速器からのイオンビームを測定試料に照射し、試料からの特性X線を測定することによって元素分析を行うもので、Na～Uまでの元素について非破壊でかつ比較的高精度（ppmレベル）で元素分析ができるという特徴をもつ。本測定は、若狭湾エネルギー研究センター放射線研究棟の照射室1にある元素分析コースにおいて行われた。イオンビームにはエネルギーが3MeVの水素を用いた。X線検出器にはゲルマニウム半導体検出器を用いた。

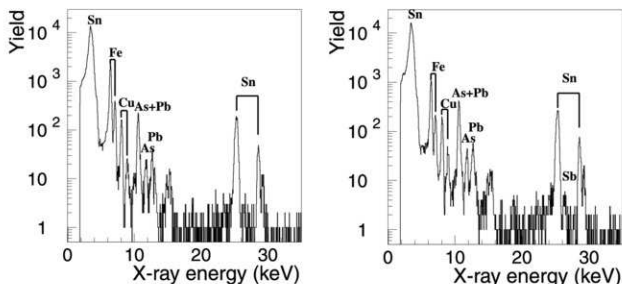
試料は出土した破片を水道水で洗浄したものを用いた。2試料の測定を行い、1つはそのままの状態（試料1）、もう1つは表面をピンセット先端で削って（試料2）測定を行った（第75図）。試料はカーボンテープで炭素板上に固定し、更にその炭素板を試料台に取り付けた。測定は真空中で行った。測定時間はおよそ500秒、測定時のビーム電流はおよそ10pAだった。X線検出器からの信号はプリアンプ、スペクトロスコピアンプで信号増幅、波形整形を行った後にマルチチャンネルアナライザーでスペクトル表示を行い、PCにデータを保存した。また、カレントインテグレーターを用いて照射ビーム電流の測定を行った。



第75図 測定試料写真（左 [試料1]、右 [試料2]）

2) 測定結果

第76図に測定で得られたX線のエネルギースペクトルを示す。両方の試料から鉄 (Fe)、銅 (Cu)、亜鉛 (As)、錫 (Sn)、鉛 (Pb) が検出された。また、試料2からはアンチモン (Sb) も検出された。得られたスペクトルに対してPIXE解析ソフトウェア (GeoPIXE¹⁾) を用いてスペクトル解析を行った。標準試料測定を行っていないために正確な定量値を出すことは困難であるが、X線放出断面積等の基礎データから計算で求めると、Snの含有量が70~90%、他の元素が1~5%程度であることが示唆された。このことから、本試料は錫を主成分とする金属製品である可能性が高いことが判明した。



第76図 X線エネルギースペクトル (左 [試料1]、右 [試料2])

第3節 おわりに

以上のように、当初の想定とはまったく異なり、錫製品であることが判明した。この結果を受けて、京都国立博物館久保智康氏に観察を依頼し、箱の置口と考えられる覆輪であるとの教示を得た。現存する古代・中世の手箱等には通常錫や銀の置口がつけられるようであるが²⁾、遺跡から置口のみが出土することは管見にないということであり、分析データを提示することにした次第である。

註

1 <http://nmp.csiro.au/GeoPIXE.html>

2 岡田 謙編 1966 『日本の美術 第3号 調度』 至文堂

写 真 图 版



(1) 調査区遠景 (東より)



(2) 調査区遠景 (西より)



(1) A地区全景（北東より）



(2) A地区全景（北より）



(1) B地区全景 (北東より)



(2) B地区全景 (北西より)



(1) C地区全景 (南より)



(2) C地区全景 (西より)